

The Molecular Biology Society of Japan

MBSJ NEWS

日本分子生物学会

2015.2

No.110

会報

目次

■ 第19期理事長挨拶	1
■ 第19期役員・幹事・各委員会名簿	2
■ 第38回日本分子生物学会年会・第88回日本生化学会大会 合同大会 (BMB2015) 開催のお知らせ (その1)	3
【ご挨拶】	3
【大会組織】	4
【プログラム概要】	4
【ワークショップの企画公募について(2015年3月16日(月)受付締切)】	10
【日程表(予定)】	11
■ 第37回日本分子生物学会年会 開催報告	12
■ キャリアパス委員会 年会企画報告	13
■ キャリアパス委員会 年会における発表者の属性統計調査報告 バランスのとれた研究環境を築くために～2014属性調査から学べること～	40
■ キャリアパス対談 第6回: 斎藤通紀×石井 優	41
■ 「女子中高生夏の学校2015」実行委員募集のお知らせ	43
■ 新しい会員種別と休会制度に関するお知らせ(予告)	43
■ 第19期新理事会準備会議記録	45
■ 第18期・第19期合同理事会記録	46
■ 平成27年度(第37回)通常総会記録	60
■ 平成26年度(2014年度)収支決算報告	63
■ 監査報告書	68
■ 平成27年度(2015年度)活動予算書	69
■ 学術賞、研究助成の本学会推薦について	72
■ 研究助成一覧	72
■ 各種学術集会、シンポジウム、講習会等のお知らせ	76
○千里ライフサイエンスセミナー J1「粘膜免疫システムの解明と免疫疾患」	
○第17回マリンバイオテクノロジー学会大会	
○International Conference of Cancer Immunotherapy and Macrophages 2015	
○Conference on Transposition and Genome Engineering 2015	
■ 賛助会員芳名	79



特定非営利活動法人
日本分子生物学会

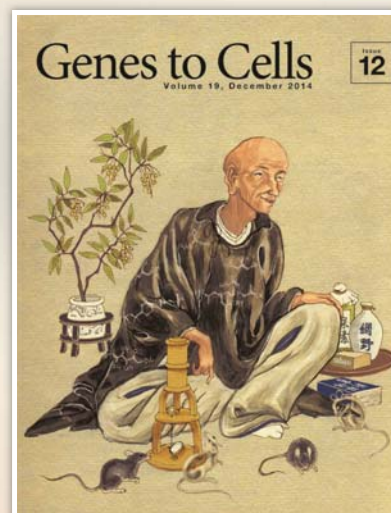
<http://www.mbsj.jp/>

Genes to Cells

Published on behalf of the Molecular Biology Society of Japan

Edited by: Mitsuhiro Yanagida
Frequency: Monthly | Impact Factor: 2.855

日本分子生物学会の学会誌Genes to Cellsは、分子生物学の優れた研究成果を掲載し、著者にとって有益な学術情報や先見性の高い最新の研究情報を提供しています。全世界9,000以上の機関で読まれており、年間333,000件以上のダウンロード数を誇ります。是非Genes to Cellsにご投稿ください。



Genes to Cells 投稿の利点

- ・ わかりやすく便利なオンライン投稿システム
- ・ 2015年からの完全オンライン化でカラー掲載料がなくなります
- ・ 出版までの過程をお知らせするAuthor Servicesをご利用いただけます
- ・ 早期出版EarlyViewサービスにより、最新号への収載を待たずにオンラインで出版されます
- ・ 出版後6か月経過した全論文が無償公開となり、世界中からアクセス可能になります
- ・ オープンアクセス希望者はオプションで『Online Open』(有料)を選択できます
- ・ 2012年9月以降の総説は日本分子生物学会のサポートを受け OnlineOpen で公開中

オンライン投稿はこちら

<http://mc.manuscriptcentral.com/gtc>

2012年・2013年出版 引用数TOP論文 *2014年12月現在

Efficient TALEN construction and evaluation methods for human cell and animal applications (Volume 18, Issue 4)
Sakuma, T; Hosoi, S; Woltjen, K; Suzuki, K; Kashiwagi, K; Wada, H; Ochiai, H; Miyamoto, T; Kawai, N; Sasakura, Y; Matsuura, S; Okada, Y; Kawahara, A; Hayashi, S; Yamamoto, T

Structures of D14 and D14L in the strigolactone and karrikin signaling pathways (Volume 18, Issue 2)
Kagiyama, M; Hirano, Y; Mori, T; Kim, S.Y; Kyojuka, J; Seto, Y; Yamaguchi, S; Hakoshima, T

DNA-RNA hybrid formation mediates RNAi-directed heterochromatin formation (Volume 17, Issue 3)
Nakama, M; Kawakami, K; Kajitani, T; Urano, T; Murakami, Y



ジャーナル閲覧ページ

www.wileyonlinelibrary.com/journal/gtc

日本分子生物学会の会員はオンラインジャーナルに無料でアクセスしていただけます。
ユーザー登録は学会事務局までお申し込みください。
日本分子生物学会事務局: info@mbsj.jp

登録後のアクセスに関するご質問は、
Wiley カスタマーサービスにて承ります。
Wiley カスタマーサービス: cs-japan@wiley.com



WILEY

80804

第 19 期理事長挨拶



会員の皆様へ

19 期の理事長に選任され、これからの 2 年間の学会運営を担当する事になりました。微力ではありますが、本学会のために尽くす所存ですので、どうぞよろしくお願いします。

本学会が設立されたとき、私は大学院生でしたが、会員数も 600 名程度で、年会での発表会場は 2 つでした。それ以前は関連分野の人が集まって、シンポジウムとして 1 会場で行っていましたが、2 会場になっただけでも随分大きくなったと思ったものです。現在のように 7 千名を越える年会参加者がある学会になろうとは思っていませんでした。分子生物学の方法論が多く分野に取り入れられるとともに、本学会が多様な分野を積極的に取り込んできたためでしょう。しかし、大きな学会の抱える問題が色々と顕在化しているように思えます。

「多様性」は生物学における重要なキーワードですが、学会においても、今の日本の社会においても、重要であると思います。本学会で進めています男女共同参画を含むキャリアパスの形成においても、女性の積極的な登用とともに多様な働き方を認めていけば、有為な人材を育ててゆくことができます。海外からの研究者の採用も同じでしょうし、異なる文化で育った人たちが一緒に研究を進める上でも重要な要素です。多様性を認めることは、異なる才能を見いだす基本となるのです。本学会でも、多様性を忘れることなく、運営を進めて行きたいと思います。

本学会の年会は、主催者に運営を任せるというスタンスで進められています。その中でも、年会の一部が英語で進められています。大学のグローバル化が叫ばれて久しいのですが、もう一步英語化が進まないかとも思います。単に日本で研究をする人の発表の場であるだけでなく、近隣の国々からの参加者もいますから、それらの人々にとっても有益な会であればと思うのです。そのことが、海外からの参加者を増やし、よりよい研究会になるのではないのでしょうか。逆に、研究の場に日本語を残すことも必要です。発想や思考方法は文化に根ざしたものです。言葉は文化を築き上げる重要な要素です。異なる文化に根ざした発想が相互作用することによって新たな研究の進展をもたらしてこそ、我々が日本で研究している意味が生まれてくると考えるのです。この英語化と日本語のバランスをうまくとることが重要であると思います。

昨今、画像処理技術の発達とともに、論文に掲載された図への疑義が取り上げられ、研究公正性が強く認識されてきています。分子生物学会ではこれまでも若手教育の一環としてこの問題を取り上げてきましたが、今後もそれを継続する必要があります。一方で、“Research Integrity”は、研究公正性という言葉ではその本質を表していないのではないのでしょうか。真理の解明に向けて研究に真摯に向かう心の持ちようこそ、研究者となる神髄であり、“Integrity”だと思うのです。これは研究を進める中で、指導者から学生へ、また先輩から後輩へと受け継がれて行くものであり、我々は一層、研究の現場での対応をこころがける必要があります。学会が、これらについての議論の場となることを望みます。

学会の活動として社会との関係も重要です。本学会では、高校への出前授業の仲介や高校生による年会での発表会等を通じて、社会の学会への認識を高めるとともに次世代の研究者を育むことを目指しています。また我々の研究費の大半は国民の税金により支えられていますので、国民への説明責任があります。そのため、最先端の研究を分かり易く説明する公開講演会等についても、機会を得て進めて行きます。一方で、研究費の配分方法等の科学行政についても、関係者との意見交換をする機会があればと考えています。

とりとめもなく自分の考えを書いて参りましたが、今後とも皆様の分子生物学会への暖かいご支援をお願いします。

2015 年 1 月
三島にて
荒木 弘之

第 19 期役員・幹事・各委員会名簿

理事長

(任期：2015 年 1 月 1 日～2016 年 12 月 31 日)

荒木 弘之 (遺伝研)

副理事長

佐々木裕之 (九大・生医研)

塩見美喜子 (東大・理)

理 事

一條 秀憲 (東大・薬)

大隅 良典 (東工大・フロンティア研究機構)

貝淵 弘三 (名大・医)

糸 昭苑 (東工大・生命理工)

小安 重夫 (理研・IMS)

相賀裕美子 (遺伝研)

篠原 彰 (阪大・蛋白研)

眞貝 洋一 (理研・和光)

高橋 淑子 (京大・理)

長田 重一 (京大・医)

林 茂生 (理研・CDB)

水島 昇 (東大・医)

吉田 稔 (理研・和光)

渡邊 嘉典 (東大・分生研)

上村 匡 (京大・生命)

岡田 清孝 (自然科学研究機構 / 龍谷大・農研)

影山龍一郎 (京大・ウイルス研)

小林 武彦 (遺伝研)

斎藤 通紀 (京大・医)

塩見 春彦 (慶應大・医)

白髭 克彦 (東大・分生研)

杉本亜砂子 (東北大・生命)

田畑 哲之 (かずさ DNA 研)

仲野 徹 (阪大・医 / 生命機能)

深水 昭吉 (筑波大・生命領域学際研究 C)

山本 正幸 (基生研)

吉村 昭彦 (慶應大・医)

監 事

辻本 賀英 (大阪府立成人病 C)、花岡 文雄 (学習院大・理)

幹 事

庶務幹事 深川 竜郎 (遺伝研)、本間美和子 (福島県立医大・医)

会計幹事 水島 昇 (東大・医)

編集幹事 上村 匡 (京大・生命)

広報幹事 金井 正美 (医科歯科大・実験動物センター)、渡邊 嘉典 (東大・分生研)

集会幹事 仲野 徹 (阪大 / 第 38 回年会)、三浦 正幸 (東大 / 第 39 回年会)

第 19 期執行部

荒木理事長、深川庶務幹事、本間庶務幹事、金井広報幹事、渡邊広報幹事

Genes to Cells 編集長

柳田充弘 (沖縄科学技術大学院大学)

賞推薦委員会

相賀裕美子 (委員長)、一條秀憲、貝淵弘三、小安重夫、長田重一

研究助成選考委員会

塩見春彦 (委員長)、大隅良典、影山龍一郎、高橋淑子、林 茂生

国際会議支援・選考委員会

篠原 彰 (委員長)、眞貝洋一、杉本亜砂子、田畑哲之、仲野 徹

キャリアパス委員会

小林武彦 (委員長)、石井 優、井関祥子、岩崎 渉、大谷直子

小野弥子、胡桃坂仁志、須藤裕子、中川真一、東山哲也、柳田素子

研究倫理委員会

白髭克彦 (委員長)、岡田清孝、塩見美喜子、杉本亜砂子

生命科学教育

篠原 彰 (担当理事)

将来計画検討委員会

〈検討中〉

「日本分子生物学会 若手研究助成 富澤純一・桂子基金」 第 2 期 基金運営委員会 (任期:2015年1月1日～2017年12月31日)

山本正幸 (委員長)、小原雄治 (副委員長)、上村 匡、大杉美穂

近藤 滋、塩見美喜子、東山哲也、荒木弘之 (職指定)

第 38 回日本分子生物学会年会・第 88 回日本生化学会大会 合同大会 (BMB2015) 開催のお知らせ (その 1)

会 期：2015 年 12 月 1 日(火)～4 日(金) (4 日間)
会 場：神戸ポートアイランド (神戸ポートピアホテル、神戸国際会議場、神戸国際展示場)
大 会 長：第 38 回日本分子生物学会年会 年会長 影山龍一郎 (京都大学)
第 88 回日本生化学会大会 会 頭 遠藤斗志也 (京都産業大学)
演 題 登 録 期 間：2015 年 7 月 1 日(水)～ 7 月 15 日(水)
事前参加登録期間：2015 年 7 月 1 日(水)～ 10 月 30 日(金)
*サーバーメンテナンス等の関係で前後する可能性があります
大会事務局連絡先：BMB2015 運営事務局 (株エー・イー企画 大阪オフィス内)
〒 532-0003 大阪市淀川区宮原 2-14-14 新大阪グランドビル 6F
Tel: 06-6350-7163 Fax: 06-6350-7164 E-mail: bmb2015@aeplan.co.jp
合同大会ホームページ：http://www.aeplan.co.jp/bmb2015

【ご挨拶】

ようこそ神戸へ。今年の第 38 回分子生物学会年会は、第 88 回生化学会大会との合同大会 BMB2015 として、2015 年 12 月 1 日～4 日の 4 日間にわたって、神戸ポートアイランドで開催いたします。

分子生物学会が生化学会と合同で年会を開催するのは BMB2010 以来 5 年ぶりということになります。両学会はそれぞれの歴史と特徴をもって発展し、これまでも単独で数多く年会・大会を開催し、成功してきました。しかし一方で、わが国の生命科学を代表する 2 つの大きな学会が、今回久々に合同で年会・大会を開催することの意義は、少なくないものと考えています。それは単に会員の経済的・時間的負担を減らすとか、短期間でより広い分野の学術情報の収集や交換ができるといった効率の問題だけではありません。2 つの年会・大会の足し算ではない、BMB だからこそできる企画や構成というものがあるはずです。というわけで、BMB2015 では両学会の枠組みを越えて、両学会の準備委員会関係者が議論を重ねて様々なアイデアを出し、鋭意、検討と準備を行っているところです。ポスターと口頭発表による一般発表、プレナリーレクチャー、パイオニアズレクチャー、企画シンポジウム、公募ワークショップに加えて、研究者やそれを取りまく社会との関係を考えるフォーラム、魅力的な市民公開講座などを計画しています。さらには日本の科学を考える「ガチ議論」も 2 年ぶりに帰ってきます。

生命科学全般をカバーする巨大年会・大会の意義は、日々の研究を行っているラボから外に出て、そこに行けば何かがあるという「ワクワク感」にあると思っています。どれだけその期待に応える、あるいは期待をこえるワンダーランドを BMB が提供していけるかが問われるところですが、それは皆さんと一緒に作っていくものでもあります。BMB でこんな事をしたい、あんな物を見てみたい、聴いてみたい、といったアイデアをぜひお寄せください。

BMB2015 の準備状況は Facebook や両学会のホームページ等でご案内していきますので、皆さまよろしく願いいたします。

2015 年 1 月
分子生物学会年会長 影山龍一郎、生化学会大会会頭 遠藤斗志也

【大会組織】

〈大会長〉

第 38 回日本分子生物学会年会 年会長 影山龍一郎（京都大学）

第 88 回日本生化学会大会 会 頭 遠藤斗志也（京都産業大学）

〈プログラム幹事〉

第 38 回日本分子生物学会年会 中山 和久（京都大学）

第 88 回日本生化学会大会 田口 英樹（東京工業大学）

〈庶務幹事〉

第 38 回日本分子生物学会年会 仲野 徹（大阪大学）

第 88 回日本生化学会大会 吉森 保（大阪大学）

〈プログラム委員〉

新井 洋由（東京大学）

武田 洋幸（東京大学）

岩田 想（京都大学）

西田 栄介（京都大学）

岡村 均（京都大学）

西村いくこ（京都大学）

小川 佳宏（東京医科歯科大学）

浜地 格（京都大学）

加藤 晃一（岡崎統合バイオサイエンスセンター）

松崎 文雄（理化学研究所）

菊池 章（大阪大学）

水島 昇（東京大学）

斎藤 通紀（京都大学）

宮園 浩平（東京大学）

塩見美喜子（東京大学）

山本 卓（広島大学）

眞貝 洋一（理化学研究所）

山本 雅之（東北大学）

【プログラム概要】

◆プレナリーレクチャー

12 月 1 日(火) Tom A. Rapoport (Harvard Medical School)

12 月 2 日(水) Brigid Hogan (Duke University Medical Center)

12 月 3 日(木) 長田 重一（京都大学）

◆シンポジウム

プログラム委員による企画シンポジウム 20 テーマを開催いたします。

1. 糖質生物学・脂質生物学（グライコミクス）分野

糖鎖を作る・読む・壊す分子システム

Molecular system for creating, decoding, and destroying glycans

オーガナイザー：加藤 晃一（岡崎統合バイオサイエンスセンター）

宮田 真路（名古屋大学）

古典的な糖鎖修飾の重要性は認識されているが、一方で未だに数多くの機能未知な糖鎖関連遺伝子を取り残されている。最近のゲノムワイド関連解析の発展により、これらの糖鎖関連遺伝子が様々な疾患の原因になっていることが分かってきた。そこで本シンポジウムでは、新規な糖鎖の生合成、認識、分解にかかわる分子システムを理解し、その作動メカニズムと高次生命現象の関係を探求することを目指す。

2. 糖質生物学・脂質生物学（リン脂質）分野

リピドミクスから見てきた脂質の新機能 —基礎から臨床まで—

New aspects of lipid biology unveiled by lipidomics — from bench to clinic —

オーガナイザー：新井 洋由（東京大学）

青木 淳賢（東北大学）

生体膜リン脂質から特異的に分解あるいは修飾され生成された生理活性脂質は、情報伝達物質として標的分子を介し多彩な生命現象および病態の発症・進展に関与する。近年開発されてきたリピドミクスは、従来の生理活性脂質に加えさらに多彩な脂質分子が従来の予想を超えた機能を発揮していることを明らかにしている。本シンポジウムでは日本のお家芸の一つである生理活性脂質研究をリードする研究者に基礎から臨床応用研究まで幅広い最新的话题を提供してもらう。

3. タンパク質（構造生物学、機能予測）分野

結晶化に悩む皆さんへ

For those with crystallophobia

オーガナイザー：白水 美香子（理化学研究所）

岩田 想（京都大学）

X線結晶構造解析と溶液 NMR が生体高分子の原子分解能の生体高分子の構造解析の主力として長く用いられて来たが、近年、本来の膜環境に向けた溶液 / 固体 NMR 法や、電子顕微鏡による単粒子解析法、さらに自由電子レーザーを用いた構造解析法などにより、結晶になりにくいサンプルや生体膜のように扱いの難しい環境下での構造解析が可能になりつつある。これらを含む新しい構造解析手法とそれらの今後の展望について討論する。

4. タンパク質（フォールディングと品質管理）分野

新生鎖が奏でる細胞機能制御

Nascent chains : the ribosome as a hub for protein quality control

オーガナイザー：田口 英樹（東京工業大学）

稲田 利文（東北大学）

mRNA の情報がポリペプチドへと翻訳されるセントラルドグマの終端には未開拓の大きな分野が潜んでいる。翻訳中の新生ポリペプチド鎖（新生鎖）はタンパク質が完成する途上の単なる中間体ではない。リボソームをハブとして新生鎖自らのフォールディングや品質管理を制御するだけではなく、完成タンパク質にはない生理学的な機能を有する場合もある。これまで接点がなかった RNA の品質管理やタンパク質のフォールディング / 品質管理研究が渾然一体となり、新たなバイオロジーが出現しつつある。本シンポジウムでは、新生鎖研究を切り拓く内外の研究者により、新たな分野の拡がりを共有したい。

5. 酵素・レドックス・生体エネルギー（その他）分野

生体の酸化・親電子性物質ストレス応答の分子基盤

Molecular Basis of Oxidative-Electrophilic Stress Response

オーガナイザー：小松 雅明（新潟大学）

山本 雅之（東北大学）

私たちの体には、酸化ストレスや環境毒物由来の親電子性物質ストレスに曝されると、様々な生体防御遺伝子群を活性化して応答する能力が備わっている。転写因子 Nrf2 とその抑制性制御因子 Keap1 がこの生体防御系の中心的役割を担っているが、この制御系の本質は、プロテアソーム系を介した転写因子の分解による抑制を基盤とする脱抑制応答機構にある。さらに、本制御系はオートファジータンパク質分解系とも密接に関連する。本シンポジウムでは、目覚ましい勢いで解明されつつある Keap1-Nrf2 制御系の分子メカニズムを中心に、現在の到達点を討論したい。

6. 細胞の構造と機能（核と細胞小器官の構造と機能）分野

オルガネラバイオロジー：細胞の構造と機能の新しい姿

Organelle biology: New pictures of cellular structures and functions

オーガナイザー：遠藤 斗志也（京都産業大学）

Gia Voeltz（コロラド大学）

オルガネラ研究は新しい段階に入っている。オルガネラは細胞の機能上の要請や外部環境の変化に応じて、その構造、形態、量、その結果としての機能を変え、ダイナミックに変化する。オルガネラは細胞内を膜で区画化することで生化学反応を分離するだけではなく、オルガネラ間コンタクトを介して積極的に代謝物質や情報を交換し、協力して細胞機能を維持しようとする。本シンポジウムでは、様々なオルガネラに関する最新の研究から見てきた新しいオルガネラ像について議論したい。

7. 細胞の構造と機能（オートファジー）分野

オートファジー

Autophagy

オーガナイザー：水島 昇（東京大学）

濱崎 万穂（大阪大学）

オートファジーはリソソームを分解の場とする細胞質成分の分解システムである。現在、オートファジーそのものの多様性とそれを司る分子群の実態の理解が急速に進んでいる。また、オートファジーの多彩な生理機能やヒト疾患との関係も次々と明らかになり、オートファジー制御化合物の探索なども進んでいる。オートファジー研究は新しいステージに入っていると言える。本シンポジウムでは多角的視点から現在のオートファジーを議論する。

8. 細胞の構造と機能（細胞周期、細胞分裂、細胞極性）分野

器官形成における多細胞動態の階層を超えた理解に向けて

Understanding of organogenesis beyond the hierarchy of multicellular behaviors

オーガナイザー：菊池 章（大阪大学）

永樂 元次（理化学研究所）

器官形成は細胞の増殖や分化、形態変化、移動などが同時に起こる極めてダイナミックな現象である。この複雑な現象を理解するには分子、細胞、組織の各階層の知見を蓄積するだけではなく、階層間をつなぐ原理を新たに発見する必要がある。本シンポジウムでは、器官形成過程における多細胞動態に注目した研究を紹介するとともに、階層を超えた器官形成の理解によって、機能的な立体組織を自在に形成するための新たな技術が創成される可能性についても議論したい。

9. 細胞応答（プロテインキナーゼ、ホスファターゼ）分野

細胞間コミュニケーションによる自律的なパターン形成

Spontaneous pattern formation driven by cell-cell communication

オーガナイザー：西田 栄介（京都大学）

戎家 美紀（理化学研究所）

多細胞体では複数の細胞が互いにコミュニケーションしながらひとりでに時空間パターンを形成する。多くの場合、できたパターンに沿って細胞分化や形態変化が起こるので、細胞パターン形成は多細胞システムの根幹の一つと言える。細胞間コミュニケーションの手段は分泌因子や細胞間の接触などさまざまであり、生じるパターンも幾何学的なものから一見してルールがわからないものまで多様である。多細胞体における細胞パターン形成の多様性と普遍性を議論したい。

10. **ゲノムと遺伝情報（クロマチン、エピジェネティクス）分野**

エピジェネティック記憶の維持と可塑性

Maintenance and plasticity of epigenetic memory

オーガナイザー：眞貝 洋一（理化学研究所）

中山 潤一（名古屋市立大学）

DNA やヒストンの化学修飾は、エピジェネティック情報の根幹として機能している。発生・分化過程で確立される細胞種特異的なエピゲノムは細胞複製を超えて維持される。一方、生殖細胞系列を通じて子孫へ伝えられる際、エピゲノムの情報はリセットされる。また、環境刺激によりエピゲノムは変わりうるが、そのような変化は老化や疾病の原因にもなりうる。本シンポジウムでは、このようなエピジェネティック記憶の維持、再構築や可塑性に焦点を絞り、最新の話題を提供することで、その原理や生命機能における役割に関して議論したい。

11. **ゲノムと遺伝情報（RNA プロセッシング、輸送、翻訳、非コード RNA）分野**

RNA と生命現象

Life driven by RNAs

オーガナイザー：塩見 美喜子（東京大学）

阿形 清和（京都大学）

21 世紀に入り、次世代シーケンシングの技術とその生物情報学的なデータ解析によって RNA の多様性と潜在力は俄に露呈した。個々の RNA の細胞内における活躍ぶりも徐々に明らかになってきている。RNA は細胞内空間でどのように生まれ、どういった分子と出会い、相互作用することによって自身の機能を発揮しているのか？ その機能は生物間で保存された、あるいは生物個体に特有な生命現象をどのように制御しているのか？ 本シンポジウムでは RNA が司る生命現象に焦点をあて、最新の研究成果と共に RNA が秘める魅力を共有する場としたい。

12. **発生・再生（生殖細胞、受精）分野**

幹細胞形質の遺伝学的・後成遺伝学的制御

Genetic and Epigenetic Regulation of Stem Cell Fate

オーガナイザー：斎藤 通紀（京都大学）

その他一名予定

幹細胞は成体の恒常性維持に必須であり、その異常は様々な病態につながる。また、胎性・組織幹細胞形質の試験管内制御は、再生医学の進展に貢献する。本シンポジウムでは幹細胞形質の遺伝学的・後成遺伝学的制御に関する第一線の研究者を招聘し、幹細胞の形質制御機構・その異常に関する最前線の知見を議論する。

13. **発生・再生（初期発生、器官形成、形態形成）分野**

ゲノムとエピジェネティックコードから発生と進化のメカニズムを探る

Genomics and Epigenomics in Development and Evolution

オーガナイザー：武田 洋幸（東京大学）

田村 宏治（東北大学）

これまでに多くの生物のゲノムが解読され、さらにエピジェネティック修飾の実態も精力的に解明されつつある。これら膨大な情報を駆使して、我々は発生生物学、進化生物学の長年の課題に挑戦している。特に本シンポジウムでは、ゲノム進化と生物の形態変化、エピジェネティック修飾の成立機構とそれによる発生重要遺伝子群の発現調節について最新のデータを元に議論したい。

14. 疾患生物学（がん）分野

血管リンパ管の新生とリモデリングの生命科学

The life sciences elucidated by the analysis of angio/lymphangiogenesis

オーガナイザー：宮園 浩平（東京大学）

高倉 伸幸（大阪大学）

血管・リンパ管新生は、臓器および器官の組織細胞との相互作用によって、組織特異的なリモデリングにより誘導される。血管やリンパ管の維持機構の破綻が、様々な血管病の成因となり、血管・リンパ管制御による、種々の疾患の治療法の開発が行なわれつつある。本セッションでは、血管とリンパ管の形成の分子機序の解析から明らかになってきた生命科学について、発生学、病理学、病態学などの多岐にわたる観点で討論する。

15. 疾患生物学（代謝疾患、生活習慣病、メタボロミクス、老化）分野

組織リモデリングと疾患

Tissue Remodeling and Diseases

オーガナイザー：小川 佳宏（東京医科歯科大学）

柳田 素子（京都大学）

組織リモデリングは、組織の傷害に対する生理的な修復機転であるが、高度に進行性の場合には、臓器の機能不全あるいは個体死がもたらされる。組織リモデリングの経時変化は複雑であり、臓器や病態により大きく異なるため、詳細な分子機構は不明である。一方、組織リモデリングの終末像としての組織線維化の多くは不可逆的であり、臨床的にもアンメットニーズが高い。本シンポジウムでは、臓器や病態を越えて組織リモデリングと疾患に関する研究の最近の進歩と将来展望を議論したい。

16. 神経科学（神経系の発達と分化）分野

脳とこころの発達の分子メカニズム

Molecular Mechanisms of Brain and Mind development

オーガナイザー：松崎 文雄（理化学研究所）

下郡 智美（理化学研究所）

脳の発生は胎児期に遺伝的な支配を受けながら形態形成することから始まり、生後には外部環境の影響を受けつつ形態と機能を変化させ、“こころ”を持つ成体脳へと成熟してゆく。この一連の流れの間にどのような事が脳内で起きているのか、その分子メカニズムはどこまで解明されているのか、可視化などの最先端技術を使って明らかになっている最近の知見をもとに、脳の発達ダイナミクスの研究の現状と将来を展望する。

17. 神経科学（感覚、生物時計、光周性）分野

細胞と時間

Cell and Time

オーガナイザー：岡村 均（京都大学）

相賀 裕美子（国立遺伝学研究所）

生物は時間という位相の中で生きている。生体リズムは地球が生命にもたらした贈物で有り、細胞には一日という外的時間に対応して内的リズムを刻む機構がある。一方、細胞周期は生命にとって根源的な現象で有り、哺乳類を含め現存するあらゆる生き物は、地球創世記から延々と繰り返された細胞と増殖と分裂の産物であると言える。本シンポジウムは、時間フレームが生体の形成や維持の基本的な現象である細胞増殖や分化にどのように展開しているのかを、分子レベルで考察する。

18. **植物、農生物学、食品科学（植物のオルガネラ、細胞、器官形成）分野**

植物細胞は忙しい：駆け巡るオルガネラの動的制御機構

The busy world of plant cells: dynamic organelle movements and their physiological roles

オーガナイザー：西村 いくこ（京都大学）

田村 謙太郎（京都大学）

個体の静かな佇まいからは想像できないほど、植物の細胞内では様々なオルガネラがダイナミックに運動している。原形質流動と呼ばれるこの現象は1774年に初めて記載されている。イメージング技術の進展により、オルガネラの運動機構とそれぞれの運動の生理学的意義が徐々に明らかにされつつある。本シンポジウムでは、植物オルガネラの動的なふるまいとその役割について最先端の知見を集結して議論する。

19. **バイオテクノロジー、新領域、進化（遺伝子工学、核酸工学、ゲノム編集）分野**

ゲノム編集で細胞・生物をカスタマイズする

Customizing cells and organisms using genome editing

オーガナイザー：山本 卓（広島大学）

堀田 秋津（京都大学）

目的の遺伝子を自在に改変するゲノム編集技術は、2013年始めのCRISPR/Cas9の開発によって、全てのライフサイエンス研究者のための技術となった。本シンポジウムでは、ゲノム編集技術によって可能となってきた細胞や生物のモデル作製に焦点を当て、最新の研究成果を紹介するとともに、ゲノム編集を用いたライフサイエンス研究の今後の展開について議論する。

20. **バイオテクノロジー、新領域、進化（ケミカルバイオロジー）分野**

タンパク質可視化・制御の新技術：細胞局所から個体まで

New technologies for imaging and regulation of cellular proteins: from subcellular region to whole bodies

オーガナイザー：浜地 格（京都大学）

清中 茂樹（京都大学）

遺伝子工学と蛍光タンパク質の開発により、細胞内におけるタンパク質可視化技術は劇的に加速し、その可能性をさらに広げつつある。これと相補的な方法として、細胞内タンパク質を有機小分子で可視化および制御するケミカルバイオロジーを基盤とした技術開発も進んできている。また、動物個体においてもタンパク質の発現制御や可視化を可能とする技術の発展も顕著になってきた。本シンポジウムでは、細胞内局所から個体レベルまでの階層で、タンパク質可視化および機能・局在制御に関する最新の研究を紹介し、議論したい。

◆ワークショップ（公募締切：2015年3月16日(月)）

会員より企画を公募します。後述の募集要項をご参照の上、奮ってご応募ください。

◆一般演題（一般口頭発表、ポスター発表）

演題登録受付期間：2015年7月1日(水)～15日(水)

採択された全ての一般演題は、ポスター発表を行っていただきます。

また、一般口頭発表への採択希望を募り、審査の上採択された演題については口頭での発表も行っていただきます。演題申込みに関する詳細は、次回会報および決定次第合同大会ホームページにてお知らせいたします。

なお、演題の登録には、日本分子生物学会または日本生化学会の会員であることが必要です。未入会の方はお早めに入会手続きをお済ませください。多数の演題投稿をお待ちしております。

◆ランチョンセミナー

企業との共催によるランチョンセミナーを開催いたします。

◆その他の企画

海外在住の若手研究者に対する渡航費補助やパイオニアズレクチャー、研究倫理フォーラム、創薬シンポジウム、

ガチ議論、CSHA セッション、両学会共同企画などの開催を予定しています。詳細は決定次第、合同大会ホームページにてご案内いたします。

【ワークショップの企画公募について（2015年3月16日(月)受付締切）】

ワークショップの企画を日本分子生物学会ならびに日本生化学会の会員の皆様より公募します。

ご提出いただいた企画案は、厳正なる審査を行い、採否を決定します。採否結果は4月中旬頃に応募者へご連絡します。

下記募集要項をご確認の上、奮ってご応募ください。特に女性研究者や若手研究者による積極的な提案を歓迎します。魅力あふれる企画をお待ちしております。

◆募集要項

- ・1企画あたりの時間は2時間30分で、約95企画を採択します。
- ・オーガナイザーは、日本分子生物学会または日本生化学会の会員に限ります。
- ・演者は、オーガナイザーにてご指定いただきます。一般演題からの採択はありません。
- ・海外からの演者招聘費用（旅費・滞在費・宿泊費等）について、大会からの補助はありません。ただし、非会員演者の参加費は免除とします。
- ・国内演者についても、旅費・宿泊費・謝金等について、大会からの補助はありません。ただし、非会員演者の参加費は免除とします。

◆応募要領

下記事項を明記の上、3月16日(月)までに大会事務局宛に E-mail (bmb2015@aeplan.co.jp) でご提出ください。

- 1) タイトル（日本語・英語）
- 2) オーガナイザーの氏名、所属（日本語・英語）
- 3) 概要〔400字程度〕（日本語・英語）
- 4) 予定演者の氏名・所属（応募時での演者による講演承諾は不要です）
- 5) 連絡窓口となるオーガナイザーの氏名、連絡先
- 6) 次の11の分野から該当する分野をお選びください。

1. 糖質生物学・脂質生物学	2. タンパク質
3. 酵素・レドックス・生体エネルギー	4. 細胞の構造と機能
5. 細胞応答	6. ゲノムと遺伝情報
7. 発生・再生	8. 疾患生物学
9. 神経科学	10. 植物、農生物学、食品科学
11. バイオテクノロジー、新領域、進化	12. その他（いずれの分野にも該当しない場合）
- 7) 予想される聴衆数

◆企画提出およびお問合せ先

BMB2015 事務局（㈱エー・イー企画 大阪オフィス内）

〒532-0003 大阪市淀川区宮原 2-14-14 新大阪グランドビル 6F

Tel: 06-6350-7163 Fax: 06-6350-7164 E-mail: bmb2015@aeplan.co.jp

【日程表（予定）】

	8	9	10	11	12	13	14	15	16	17	18	19	20	21
12月1日(火)			シンポジウム/ ワークショップ/ 一般口頭発表 9:00-11:30		プレナリーレク チャー/バイオ ニアズレク チャー 11:45-12:30	ランチョンセミナー 12:45-13:45 両学会共同企画 12:40-13:45		ワークショップ/ 一般口頭発表 14:00-16:30					フォーラム 18:45-20:15	
		貼付	機器・試薬・書籍展示 NBRP展示/BioDB展示 10:00-18:45								ポスター発表・討論 16:45-18:45	撤去		
12月2日(水)			シンポジウム/ ワークショップ/ 一般口頭発表 9:00-11:30		プレナリーレク チャー/バイオ ニアズレク チャー 11:45-12:30	ランチョンセミナー 12:45-13:45 両学会共同企画 12:40-13:45		ワークショップ/ 一般口頭発表 14:00-16:30					フォーラム 18:45-20:15	
		貼付	機器・試薬・書籍展示 NBRP展示/BioDB展示 10:00-18:45								ポスター発表・討論 16:45-18:45	撤去		
12月3日(木)			シンポジウム/ ワークショップ/ 一般口頭発表 9:00-11:30		プレナリーレク チャー/バイオ ニアズレク チャー 11:45-12:30	ランチョンセミナー 12:45-13:45		ワークショップ/ 一般口頭発表 14:00-16:30					フォーラム 18:45-20:15	
		貼付	機器・試薬・書籍展示 NBRP展示/BioDB展示 10:00-18:45								ポスター発表・討論 16:45-18:45	撤去		
12月4日(金)			シンポジウム/ ワークショップ/ 一般口頭発表 9:00-11:30		ランチョンセミナー 12:00-13:00		ワークショップ/ 一般口頭発表 13:15-15:45		市民公開講座 16:15-18:15					

※あくまで2014年12月時点での予定であり、今後変更される可能性があります

第 37 回日本分子生物学会年会 開催報告

第 37 回分子生物学会年会は昨年 11 月 25 日(火)～ 27 日(木)の 3 日間、パシフィコ横浜にて開催し、7,565 名の参加者を迎えて盛会のうちに終了いたしました。

第 37 回年会は、当初より、サイエンスの議論を中心に、皆がデータを前にとことん議論のできる学会を目指して企画を進めてきました。シンポジウムはプログラム委員の名前を冠した 12 企画、およびテーマ指定の 6 企画の計 18 企画を開催したところ、いずれも大変盛況で、多くの会場で立見となった聴講者のために中継会場を設けて対処しなければならないほどでした。ワークショップは公募による 50 企画を開催しましたが、指定演題は少なくし、全てのワークショップに一般演題から 290 題にのぼる演題を採択しました。また、指定演者にもポスター発表をお願いしました。ワークショップで白熱した議論を行っていただいた後には、指定演者を含めたすべてのワークショップ演者にポスター会場へ移動してもらい、ポスター発表を併せて行っていただきましたが、年季の入った研究者と若手の研究者がともにポスターを並べ、垣根を越えて議論を戦わせることはあまり前例がなく、新鮮な経験と感じられたのではないのでしょうか。ポスターセッションに関しては特に今回のプログラムの中心と位置づけ、そのためにこの時間には他のプログラムを一切入れず、第 32 回年会で導入したディスカッサー制度を復活させました。会員の皆様に協力をお願いしましたところ、300 名を超える方にディスカッサーをお引き受けいただき、積極的に議論の火付け役兼仕切り役としてご尽力いただきました。なかには、体調不良などで

当日参加できなくなったディスカッサーの代わりに、急遽会場をお願いし、ディスカッサーを務めていただいた方もいらっしゃいます。お陰さまでポスターセッションは大変盛り上がり、毎日、あまりの熱気にエアコンを入れなければならないのではないかと心配したくらいでした。最終日のポスターセッションにも大勢の参加者が集い、長時間にわたって議論をしている姿を見た時には正直感激しました。

この度は多くの方々のご理解、ご協力により、「データを前にとことん議論する」、「サイエンスを楽しむ」という当初の目標を実現することができたのではないかと考えております。年会の企画・運営にお力をお貸しいただいた組織委員・プログラム委員各位、オーガナイザー、講演者、ディスカッサーの皆様、および援助をいただいた企業・助成諸団体の皆様、そして全国から参加いただいた皆様に、心より御礼申し上げます。

目の前のデータが自然の謎の何を我々に語ってくれているのか、それを解き明かしていくのがサイエンスの醍醐味です。そのような思いを新たに、様々なサイエンスに出会うことのできる場として、今後も、このような熱気にあふれるサイエンスの議論が分子生物学会で続くことを願っております。

第 37 回日本分子生物学会年会

年会長 小安 重夫

(理化学研究所統合生命医科学研究センター)

キャリアパス委員会 年会企画報告

2年の任期を振り返って思うこと

第一期キャリアパス委員会の委員長としてのお役目は、2013年元日と共にはじまり2014年末日と共に終了しました。キャリアパス委員会は、第18期理事会の発足に伴い、大隅典子理事長のアイデアに基づいて設置された委員会で、17期まで続いた「男女共同参画委員会」と、研究倫理委員会の傘下にあった「若手教育問題ワーキンググループ」を前身とします。課せられたミッションは、若手・中堅が直面する問題を掘り起こし、その改善策を老若男女共に考えること。扱うテーマは、‘キャリアパス’に限らず幅広く、無病息災、商売繁盛、学問成就、はたまた縁結び、と、多数の願掛けをあつかう神社みたいなもの、といえぱ判りよいかもしれません。発足からまだ2年ということで、その成果の善し悪しを現時点で問うことは難しいかもしれませんが、「男女共同参画」「若手教育」ともが抱えていた「マンネリ」傾向の解消法という意味では、理事長の案は的を射ていたといえるでしょう。学問においても学際化が推奨されるようになって久しいのは周知の事実で、何事も長期にわたり一所に留まっていたは、良い発想も良い結果も得られません。

第一期委員会のメンバーは、私を含め12名。委員の任命は委員長の独断で、ということで責任重大ではありましたが、多くは「男女共同」と「若手教育」のメンバーで、皆さん快く引き受けてくださり、苦労は全くありませんでした。敢えて言うまでもなく、委員全員が生粋の、そして気鋭の生命科学研究者であり、若手（及び中堅）問題のエキスパートではありません。しかし、若手（及び中堅）が抱える問題の深刻さを日頃から実感し、何か良い策はないものかと親身になって思案する、あるいはしようと努めてくれる面々でした。年に数回会議を開き、ああでもない、こうでもないと思恵をしばらく、ランチョン企画を練り、実行してきました。2013年のテーマは「研究テーマ」と「バイオベンチャー」、2014年は「キャリアパス」と、もう一つは、表向きは多少ベールをかけたつもりですが「研究倫理」に絡んだものでした。御陰様でいずれの企画も好評で、アンケートでは多くのポジティブコメントをいただきました。御来場いただきました会員の皆様には御礼を申し上げます。2014年の企画に関する詳細はfacilitatorをつとめてくださった岩崎渉委員（東大）と小林武彦委員（遺伝研）が別途、総括をしてくださることになっています。是非、御一読ください。

例年のランチョン企画に加えて、18期はもう一つ、男女共同参画実態調査報告書をまとめ世に送り出すとい

う大役も仰せつかりました。「男女共同参画学協会連絡会」という会をご存知でしょうか。通常「連絡会」と呼ばれていますが、分子生物学会をはじめ60程の学会が加盟する団体で、その名のごとく、研究者コミュニティーにおける男女共同参画を推進することをミッションとしています。2012年の暮れ、この「連絡会」は第3回科学技術系専門職の男女共同参画実態調査（通称、大規模アンケート）を実施しました。その調査結果は2014年5月にすでに冊子として公表されていますが、その中から日本分子生物学会会員2,448名分（全体の15%に相当）の回答を抽出、分析し、そして公表するという作業を行ったのです。これまでと異なり、生データの抽出と図表化、および予備分析は外部に委託する旨を聞いておりましたので安易に考えていましたが、いざ報告書をまとめる段階に至ってはじめて、まずその情報量の多さに冷や汗をかき、その後は仕事の煩雑さにうなされっぱなしでしたが、連絡会担当の井関祥子委員（医科歯科大）、小野弥子委員（都医学研）、および大規模アンケート解析ワーキンググループに特別参画してくださった石井優委員（阪大）、岩崎渉委員、佐藤健委員（群馬大）の御尽力が得られ、無事、11月に「第3回日本分子生物学会男女共同参画実態調査報告書」を発行することが出来ました。

表紙を淡いクリーム色にし、分子生物学会のマークをカラーで入れ、タイトルには大いばりで「日本分子生物学会」の文字を入れてみました。2,448名の本学会会員の回答を抽出し分析したのですから全くもって合理的な変更点だったと思います。ちょっとした視覚の問題ですが、つい手に取ってページをめくって見てみたくなる装いになったのではないかと自負しています。肝心の中身はどうか、ですが、形式を統一化し、年号を全てふせて左右において比較検討するとします。すると、おそらく、どちらが第2回（2007年）のものでどちらが新しいものかを言い当てることは何人にも難しいのではないかと容易に想像させるくらい保存性が高いことに気がつきました。何かに気がつくことは良いことです。頑張って報告書を完成させた甲斐があったといえます。ただ、男女共同参画に関する、科学者コミュニティーのこれまでの活動の費用対（あるいはATP対）効果を考えると、もう少し改善された部分があっても然りなのでは、というのが私の、まことに個人的な率直な感想です。我が国で意識的に男女共同参画が唱われるようになって10年余りの年月が過ぎました。参考になるお手本が身近にあったわけでもなく、手探り状態でここまで来たというのが正直なところでしょう。即効性がみられなくても仕方がない、という意見もありだと思ひます。が、女性の

活躍推進が国家レベルで重点化された今、効率よく成果を生み出す、より洗練された戦略が欲されつつあることは言うまでもありません。女性の当事者意識の向上も重要な課題だともわれます。数年後の第4回目の報告書にどのような変化がみられるか。今から楽しみでもあります。

昨年横浜年会でのランチョン企画のテーマは「キャリアパス」と「研究倫理」に絡んだものでした。研究倫理、そして研究不正。私の2014年は文字通りこれらのキーワードと共に始まり、そして終わりました。実に奇妙な一年でした。この狂気を帯びた喧噪はどのように収束するのか。答えを知る由もなく、よって考えるだけ無駄だと判っていてもくりかえし自問する毎日でした。が、素知らぬ顔で2015年は始まり、研究不正問題も何とはなしに幕が閉じられようとしています。そしてこの現状に少なからぬ戸惑いを感じたりもしています。理研16億円予算削減というネット上の文字に‘ほほー’と声にならぬ声を上げ、僅減と知れば、まあ世の中そんなものだよね、と変に納得しつつ、タレントデビューらしい、と聞けば、御慕い申す御師匠様の有り難き御言葉はどこへいったのか、赤い靴は疾うの昔に魔力を失ったか、と余計なことを考えたり。。静電気を帯びた安物のスカートのように嫌な感じでまとわりつき、なかなかすっきりと消え去ってはいけません。

50数年も生きてくると、いろいろな理不尽に出会います。自分をfoolするやり方もそれなりに習得し、多くはやり過ごすことも出来るようになりました。が、最近‘思うこと’がひとつあります。それは、長年まじめに、そして真摯に研究をしてきた我々に課せられた、理解し難い連帯責任のようなもの、つまり、5年間だか7年間だか知りませんが、膨大な、全ての生データを、屑同然であろうとなんでであろうと、なけなしの研究資金を費やしてまでも温存すべし、とか、博士論文は全て嘘発見器にかけるべし、とか、そういった諸々のこと、ですが、これは御上に従って実行しなくてはならないのでしょうか、ということです。当の本人たちはいいですよね。それくらいの義務が課せられたってどうってことはありません。が、私達も？何も悪いことしてないのに？全く理不尽だとしか言いようがありません。

それでなくても研究・教育に忙しいのに余計な仕事を増やしてくれるな、というのが正直なところ。真面目に研究に没頭してきた人たちは、そういった新しいルールも大事だから皆で守らなくてはね、と真面目に受け止め、真面目に実行しようとしています。一方、平気で不正をするような人たちは、まるで他人様の様に振る舞い、他人を訴えることしか頭にないようです。

長年まじめに、そして真摯に研究を続けてきた人たちは、これまで通りまじめに、そして真摯に研究をすれば

いいのではないのでしょうか。日々行う実験はノートに記載し、データは手元に保存する、コピー発見器を専攻で購入する必要もありません。それより大事なことは多々あって、例えば、学生の研究環境を整える、この方がよっぽど重要です。古い建物の1階の端にある私の研究室には、毎年春先になると“訪問客”がやってきます。廊下では小さな団体が甘いものを求めて行進をし、ショウジョウバエを夕食にしたいしっぽをもった生物とベンチで思わず目が合ったりします。その横でpiRNAを扱う学生の手には、RNA分解を避けるためのディスポの手袋、そして白衣もまとっています。

我々にとって本当に大事なことは何なのか。それを考えることが大事なのだとあらためて学べたことは収穫だったと思う今日このごろです。

最後になりましたが、事務局の福田さんをはじめ、並木さん、山口さん、丸田さんに心より感謝致します。彼らのサポート無くしてキャリアパス委員長としての役を成し得ることは出来ませんでした。2年間大変お世話になりました、有り難うございました。

キャリアパス委員会
委員長 塩見美喜子

【博士の多様なキャリアパスを切り開く】

●日 時：2014年11月26日(水) 11:45～13:00

●会 場：パシフィコ横浜 会議センター3階
301(第2会場)

●講 演：

「博士号は民間企業でも有用か？～大学のキャリア支援を活用したPh.D.からの報告～」

谷澤 欣則(日本イーライリリー株式会社 研究開発/医学科学本部)

「博士が社会で多彩に活躍！～大学で博士人材のキャリア支援をしてきた立場から～」

森 典華(名古屋大学社会貢献人材育成本部
ビジネス人材育成センター)

本年度のキャリアパス委員会主催企画の第一は、年会二日目に開催したランチョンセミナー「博士の多様なキャリアパスを切り開く」でした。キャリアパス委員会は若手・女性研究者を取り巻く問題について広い観点から議論することを目的として第18期より組織されましたが、その中でも本テーマは委員会名にもなっている「キャリアパス」について正面から扱ったものとなりました。当日は学生や若手研究者を中心に多くの方に興味を持っていただき、定員286名の会場に超満員となる約310名の参加がありました。

本ランチョンセミナーでは、二つの異なる視点からの講演の後に、恒例となったケータイアナライズシス

テムによる双方向パネルディスカッションを行いました。谷澤氏による一つ目の講演では、海外ポスドクを経て民間企業に就職し、複数の企業にわたってキャリアを構築してきた“主観的な”観点から経験をお話いただきました。さらに、森氏による二つ目の講演では、多くの博士のキャリアパスに関するサポートを活発に行ってきた“戦略的な”観点から講演をいただきました。両講演は参加者アンケートでも非常に好評で、キャリアパスに対する意識が大きく変わったという意見が多数ありました。当日参加できなかった方も、書き起こしが分子生物学会のウェブサイトに掲載される予定ですので、是非そちらをご覧ください (<http://www.mbsj.jp/admins/committee/careerpath/index.html>)。博士として培ってきた能力をどのように活かすか、そして自分が何をやりたいのかを改めて見定め、主体的に動きつつ幅広く考えていくこと。そして、その過程では色々な人の助力を得ていくことが可能であるとともに、そうすることが実際に極めて重要であること。キャリアパスの切り開き方に関する本質的なメッセージが伝わる素晴らしい講演でした。

続いて、講演をいただいた谷澤氏、森氏のほか、キャリアパス委員から塩見、井関、佐藤、東山、柳田、岩崎が登壇し、会場との双方向パネルディスカッションを行いました。選択式の設問は「設問1：将来のキャリアパスに不安を感じていますか?」「設問2：アカデミアでの就職へのこだわりの強さは?」「設問3：博士として国や職場（会社／研究機関）を変えつつキャリアアップしていくことをどう思いますか?」「設問4：自分のキャリアパスについて相談できる人は誰ですか?」「設問5：キャリアパスを切り開くために、あなた自身がこれから伸ばす必要があると思う力は?」で、回答を短くまとめると、「キャリアパスには不安を抱えているが、職場や国をキャリアの過程で変えることはポジティブに捉えている。アカデミアへのこだわりは強くなく、相談は友人や先輩にすることが多く、様々な能力を高める必要があると考えている」となりました。なお、参加者属性は学部生と大学院生を合わせて6割超、ポスドクまたは非研究室主宰者（非PI）の任期付き職がおよそ2割でした（詳細なデータは本会報の後のページに記載されています）。

キャリアパスに不安を持つことはいつの時代も変

わらないことだとは思いますが、少し驚きだったのは、安定志向というよりは職場や国を変えることをポジティブに捉えている意見がかなり多かったことでした。谷澤氏と森氏の講演にもあったように、そういったキャリアパスを構築する上では、博士号というのは少なからず役に立ってくる資格と言えるでしょう。また登壇者一同やや気になったのは、キャリアパスについて指導教員やPIに相談できるとした割合が高くなかったことでした。指導教員やPIの多くはメンバーが多様なキャリアパスで活躍することを応援してくれると思いますし、一方で、指導教員やPIの側も多様なキャリアパスについて相談を受けやすい雰囲気を出すことが必要でしょう。もちろん、実際にはどうしても相談が難しいケースもありますので、その場合には、大学の相談室などを積極的に活用していただければと思います。最後の設問の「これから伸ばす必要がある力」については満遍なく回答がありましたが、中でも、プロジェクトマネジメント・文章執筆力・プレゼンテーションスキルについては比較的票数が少ない結果となりました。いずれも、アカデミアに限らず創造的・指導的な職で活躍する上で必須な力ではないかと思いますが、あまり重要ではないと考えられているのか、あるいは既に十分に身に付いていると考えられているのか、これもやはり少し気になる場所でした。また自由記述のコメントからは、キャリアパスに関する率直な不安のほか、企業所属の方からの有用な博士人材像に関するコメントなど、様々なご意見をお寄せいただきました。今回のランチョンセミナーでは扱えませんが、結婚や出産も男女を問わず学生・若手研究者にとっては気になるトピックでしょう。当日は時間に限りもあり全てを取り上げることはできませんでしたが、いずれも今後も検討していくべきトピックだと考えています。

博士号というものは一人ひとりが未知の問題を設定し、それを解決して得られるものであることを考えれば、博士のキャリアパスに一般的な答えがないということはある意味で自然なことでもあります。そういった中でも、本ランチョンセミナーを通じて一人でも多くの方が前向きな展望を抱き、具体的な行動へとつながっていったならば、望外の喜びです。

（文責：座長・岩崎 渉）

〈アンケート〉 集計結果（四捨五入しています）

【問1】 あなたの年齢は？

① 24歳以下	74	31.9%
② 25～29歳	64	27.6%
③ 30～34歳	29	12.5%
④ 35～39歳	30	12.9%
⑤ 40～49歳	17	7.3%
⑥ 50～59歳	15	6.5%
⑦ 60歳以上	0	0.0%
※ 未記入	3	1.3%
計	232	100.0%

【問2】 あなたの身分・職階は？

① 学部学生	28	12.1%
② 大学院生（修士）	47	20.3%
③ 大学院生（博士）	56	24.1%
④ ポスドク	23	9.9%
⑤ 大学教員（助教・講師・准教授）	34	14.7%
⑥ 大学教員（教授）	13	5.6%
⑦ 研究員	7	3.0%
⑧ 主任研究員・チームリーダー・室長以上	2	0.9%
⑨ 企業	12	5.2%
⑩ その他	8	3.4%
※ 未記入	2	0.9%
計	232	100.0%

【問3】 このセッションを何で知りましたか？（※複数回答可）

① 学会ホームページ	47	16.9%
② 年会ホームページ	47	16.9%
③ 会報	8	2.9%
④ プログラム集	115	41.4%
⑤ ポスター	9	3.2%
⑥ 会場内の広告	43	15.5%
⑦ フェイスブック	0	0.0%
⑧ クチコミ	7	2.5%
⑨ その他（年会アプリ）	1	0.4%
※ 未記入	1	0.4%
計	278	100.0%

【問4】 このセッションを開催した時間帯はどうでしたか？

① ランチョン形式でよかった	222	95.7%
② ランチョン以外の時間帯がよかった	8	3.4%
※ 未記入	2	0.9%
計	232	100.0%

【問5】前半の講演はいかがでしたか？

① とても面白かった	91	39.2%
② まあまあ面白かった	86	37.1%
③ 普通	38	16.4%
④ あまり面白くなかった	5	2.2%
⑤ つまらなかった	2	0.9%
※ 未記入	10	4.3%
計	232	100.0%

【問6】後半のディスカッションはいかがでしたか？

① とても面白かった	76	32.8%
② まあまあ面白かった	81	34.9%
③ 普通	30	12.9%
④ あまり面白くなかった	10	4.3%
⑤ つまらなかった	1	0.4%
※ 未記入	34	14.7%
計	232	100.0%

【問7】今後このような試み続けるべきだと思いますか？

① 是非続けるべき	186	80.2%
② 続けるべきだが方法を変えた方がよい	31	13.4%
③ やめた方がよい	1	0.4%
④ わからない	5	2.2%
※ 未記入	9	3.9%
計	232	100.0%

【問8】このセッションに関する感想をお聞かせください。

- ・博士課程の人の就職の多様な道が今後は開かれていく可能性もあるのだと知ることができて良かった。
- ・博士に不安を感じている人が多いことが分かって良かった。調べるのが大事だと思った。
- ・多様な話が聞けて参考になった。
- ・若い人達がポジティブになるセッションだったと思う。
- ・行動が大切だと感じた。
- ・現在、院に進学するかも迷っていたので将来のビジョンができてよかった。会場に来ている方達の意見や立ち場を聞くこともでき、とても良かった。
- ・色々な進路があることがよくわかった。
- ・非常に参考になるものばかりだった。参加して良かった。
- ・博士のキャリアについて視野がとても広くなったと思う。自分もキャリアセンターなど多くの人と関わりをもってキャリアについて考えたいと思う。
- ・キャリア選択には非常に役立つと思う。
- ・Ph.Dをとるまでに身につけた能力をどう生かしたらいいか、何が生かされるのか、自分の中であいまいだったので、講演を聞いて少しクリアになった。
- ・博士課程後の将来について深く考えることができた。
- ・具体例と共にキャリアパスの説明を聴けたので、分かりやすかった。
- ・支援側の方からのお話が聞けたのはとても良い経験になった。
- ・いろいろな人の意見や悩みが聞けて楽しかった。参考になった。
- ・色々な立場の人の話が聞けてよかった。
- ・普段からこの問題は考えてきたのでためになった。
- ・博士過程に進むことについて漠然とした不安を感じていたが、少し光がさしたような気がした。
- ・自分の強みを考えてみようと思った。
- ・ただ研究を続けるばかりでなく、幅広く行動すると共に、多くの人の意見を取り入れていこうと感じた。
- ・多くの人の意見や具体的なキャリアパスについて知ることができた。
- ・大変参考になった。ありがとうございました。今後も是非このような企画をお願いします。

- ・視野が広がってとても良かった。
- ・具体的な内容で参考になった。
- ・企業のニーズが分かってとてもよかった。
- ・自分自身、いまだにキャリアパスについて迷いがあるので、とても役立った。
- ・多様なキャリアパスについて知る機会の重要性を認識した。周りのサポートや相談することはもちろん大切だが、自ら行動すること、考えることがやはり一番大切であると思い直した。
- ・多くの有識者の方の様々な意見が聞けてよかった。
- ・大学外（研究系以外）への就職の実例、数字等に実際に触れる初めての機会だったので興味深く思った。改めて自分のキャリアパスを見直してみようと思う。
- ・がんばれそうな気がした。
- ・内容は正直目新しいものではなかったが、まとめてこういう話をする場を作るのはとても良いことだと思う（誰かが動き出すチャンスになるので）。
- ・将来について考えるきっかけになった。
- ・博士に対する見方が変わった。
- ・このような機会が増えるといいなと思った。
- ・自分を知るってことが大切だなと思った。
- ・状況を変化させてみるということに積極的・支援的な意見がほとんどで驚いた。アカデミックな道でもそのような考えが多いと可能性が広がり魅力的に思えた。
- ・とても有意義だった。ポスドクのあとでも次のキャリアを考えて調べる方法など知ることができてよかった。
- ・自分と同じような悩みをもつ人が沢山いることに少し安心した。もっと自分から行動を起こして、キャリアを切り開いていきたい。
- ・知っていること、わかっていることもあったが、大切なことを再確認できた。
- ・具体的な解決策はないが、話し合いや考え続けることが大事であると感じた。
- ・D1なのでまだ就職まで意識がいかないのが現状だが、今後、動くときの方法が少し具体化したと思う。
- ・修士の私にとって大変満足の内容だった。キャリアを考える時期で不安に思っている。何とか切り開きたいと思った。
- ・今回のセミナーで多くの人が自分と同じような疑問、不安を持っていることがわかって良かったし、キャリアについて考えてくれる人が多くいることがわかって良かった。
- ・変化への耐力・体力、人間力のメッセージ、大事にします。
- ・「わらしべ長者」の考え方で、気が楽になった。自分の働く場に条件を求めたり、今の自分の足りない所で諦めたりするのではなく、後からでも経験を積んで成長していこうと思う。
- ・参考になったと思う。今後博士課程に進んだ際に生かしたいと思う。（講演）
- ・とても参考になるセッションだった。ただ、博士へ行くことのメリットばかり強調するのではなく、そもそも進むことへの不安を持つ人も多いので、デメリットへの対策にも言及してほしい（年齢など）。
- ・博士のキャリアパス…？博士は企業には必要とされていないのかと思っていましたが、最近雇用があることがわかった。
- ・いつもの変わりばえしない内容だった。キャリアパスを聞いていると、ポスドク→ベンチャーの流れしか感じないが、他に普通の企業に普通の就職をしたケースなども含めたらよいのでは？
- ・企業ノンリサーチの分野では博士卒は修士卒以上のメリットが、企業にとっては実情ないと感じられていると思う。博士課程中の人材教育の充実に力をかけてほしいと思う。
- ・自身の今後のキャリアについての話の参考になった点は良かった。（講演）具体性に欠けることが多いためあまり参考にならなかった。（ディスカッション）多くの人の意見を聞けたという意味では有意義だったと思う。
- ・もっと具体的な話をしたほうがいい。海外ポスドクから就職された例はよかったが、もっと深く Discussion をして掘り下げたかった。
- ・あまり参考にならなかった。アカデミアで成功した人も呼ばないとフェアではない。
- ・アカデミアに対するキャリアパスの説明がないので残念だった。この形式では企業への就職が「逃げ」のように見えてしまう。
- ・考え方が選択肢の一つとして参考になるが、大々的に不安が取り除かれるみたいな安心感にはつながらないと言うか、漠然としている気がする。
- ・個人の努力には限界があるので Dr. の活動できる場を公的な機関が広げる努力をしてほしい。
- ・実際にキャリアパスを実現された方のご発表をもっと増やして欲しい。
- ・具体的な不安解消法などに言及がなかった。「このような進路がある」ということより、どの程度の能力がある、どんな強みがある人はどこに行くことが多いといったことを見せてほしいと思った。
- ・ためになる話もあったが、もっと博士やポスドクになるのを迷って、結局企業に行った人、もっと言えば研究職以外に行った人とか来てほしい。同じ様な道筋を来た人ばかりではつまらない。
- ・海外のデータばかりで国内のデータが少ないのが残念。
- ・自分は希望していたのではないのにアカデミア職に就いた。研究ができなくて（能力がなくて）悩んでいる。みんな研究したい人なのか。職は望んだようにいかない。タイミングで何が起るかかわからない、と思う。
- ・一番問題なのは受け皿が小さいことだと思う。
- ・学生の立場からも教員の立場からも典型的形や方法はなく、常にそれぞれが考え意識づけることが大事。しかし、悩んでいる立場にある人にとっては、具体例を示して欲しいと常に思っていると思う。また、指導教員も同じ悩みを抱えているだろう。終わりのない課題である。
- ・どんな PI の下に就くかで大きく変わってくるかも。

- ・個別事例の話がもう少しあればなお良かったと思う。
- ・PhD 取得後数年分のビジョンのみ提示され、あとは他職への誘導という未来を示すのであれば、研究を続けようというモチベーションが得られない内容だと感じた。
- ・そもそもアカデミアと企業というくくり分けが古いように思う。
- ・どこか新参者が入りにくい、風土はあるのかなと。
- ・私が所属する弱小大学の大学院では、余裕がなく、学生のキャリア支援に立った大学院教育の実現に困難さを感じている。どのような指導を学生に与えるのが望ましいのか？
- ・参加できない人にも内容を HP で知らせたい。ロールモデルの実例をたくさん HP 等で公開してほしい。
- ・理系大学生（1～4 回生、学部生）向けに、修士、博士取得後の進路がどのようなものなのかをオープンにしていくような本・Web ページなどを作ってほしい。
- ・司会の岩崎さんが、とても語り口がスマートでかっこよかったです！
- ・塩見先生のご意見がとても印象的だった。同じ女性として参考になる。
- ・森先生の講演はとても面白かった。
- ・森先生の話しが、楽しく、またためになった。
- ・森先生のお話しがとてもよかった。森先生自身が、アカデミアからどのように転身したのかとても興味がある。自分は、(PI に特になりたくはないが) PI になるべき年齢と立場。森先生のお話の「実現したいことは何なのか」「優先順位をつける」というのを自分なりに考えてみようと思う。
- ・相談室を訪ねてみようと思った。
- ・私の大学はキャリア支援課があるので今後利用しようと思った。
- ・大学の進路支援室の対象が学部生～修士までということもまま有るので、大きなくくりのそれが有れば、というの（講演内容）は非常に共感した。
- ・名古屋大学、進んでますね。すばらしいと思う。
- ・名大生なのでまたいつかお世話になりたいと思った。
- ・名大の取り組みは、名大に限らず、他大学の人も対象にしている点が良いと思った。
- ・キャリアパス支援プログラムを、全国の大学や他の学会でも広く発信して下さい！
- ・名古屋大のようにキャリアパスをサポートしてくれるようなシステムがもっといろいろな大学にできてほしいと思う。
- ・キャリアパスをサポートする機関があることを知って良かった。
- ・キャリアパスを就職のタイミングより早く具体的に考えることが大切だと感じる。母校の学生の話聞く、対話する中で感じる。
- ・様々な支援機関を知れて良かった。
- ・職場の若手にアドバイスする参考になった。私自身にもためになった。
- ・学部生、修士学生への情報発信をしたいと思う。是非いろいろな仕組みをお考え下さい。
- ・学生と接する事でどのように学生を指導すればよいかが参考になった。
- ・大変よかった。学生のキャリアをサポートする立場としてとても参考になった。
- ・年々重要性が増してきていると思う。
- ・男女共同参画からよい方向へ発展されている。
- ・前半なしでも良いと思う。
- ・会場との交流が良い。
- ・自分自身が参加している実感が得られて良い。企業などキャリアについても知れて良い。
- ・ディスカッションがとても良かった。企業の研究者としても、考えさせられる事が多かった。
- ・前回のディスカッションが活発でとてもおもしろかった。
- ・Web を使ったアンケートが良かった。
- ・会場の意見をリアルタイムで拾うシステムを採用しているのは面白いと思います。
- ・メッセージを送る形式はおもしろいと思った。
- ・メールを使った双方向ディスカッションは大変良いと思う。
- ・リアルタイムでコメントを読めるのが良かった。
- ・その場でアンケート結果が見えるのはよかった。
- ・匿名なので腹をわったコメントができてよい。
- ・リアルタイムで意見・感想を発信できるのはとても良いと思った。
- ・オンラインでアンケートをとって、その場でそのデータをもとにディスカッションする形式は良いと思った。自由に書かれた質問にもっと答えられると良いと思った。
- ・とてもおもしろい企画だったので、会場からの質問、コメントを拾う時間をとってほしかった。
- ・せっくなのでもう少しコメントを拾っても良いと思った。
- ・コメントに対して答えて頂く時間をもっと長くしてほしい。
- ・コメント側を中心に話を広げるべきでは…？
- ・リアルタイムで意見を反映するシステムは面白かった。
- ・会場からのコメントを拾う時間がもう少し長くても良いかと思った。
- ・アンケートの回答をもう少し効果的にとり上げてほしかった。司会の方が漠然と拾いすぎている印象。
- ・もう少しコメントに関して話してもらえるとよりよくなるのではと感じた。

- ・メールでリアルタイムに寄せられたコメントについて全く拾ってもらえなかった種の質問があったことは非常に残念だった。最悪の結末（行方不明など）を迎えてしまう人達の割合など、ドクター進学を考えている人達が究極的に不安であると感じていることについてもう少し具体的な言及がほしかった。「アカデミックポストに就けないのではないかな…」よりも、「十年、二十年後の生活があるのか…」を多くの方は気にしていると思う。
- ・せっかくコメントを入れても、それを生かしきれてない気がする。
- ・コメントメールの文字数制限はない方がいいと思った。あと解決できたコメントは消去する機能があると見やすいかもと思った。
- ・ケータイの質問（設問）のコメントよりも、会場からのコメントに言及する時間をとった方がよい。
- ・もう少し盛り上がるような雰囲気作りが必要だと思った。参加型だけど ROM が大半。
- ・モデレーターの方が進行を上手くマネジメントできていないと感じた。フロアーからの質問を独り言のようにつぶやくのではなく、質問からもっとパネリストの意見を引き出す事に集中した方が良かったと思う。
- ・質問とディスカッションが形式的で、内容があまりないように感じた。
- ・もっと自由記述に対するコメントが聞きたかった。
- ・パネルディスカッションがテンポが遅く、用意されていた質問の内容も一般的すぎて、先生方からの返答もどこでも聞けるような意見しか聞けなかった。パネリストの数が多いのも意味がない。
- ・パネルディスカッションを行うのであれば、事前に（学会の HP などで）アンケートをとったり、質問を募集した方がいいのではないかなと思う。HP での事前予約などにしたらいいかな。
- ・去年同様、こちら側のコメントを拾ってくださる時間が少なかったのが残念。こちらが一番聞きたいのはそこだと思う。
- ・パネラーの方々が自分の言いたい事を言ってるだけで、質問に全く答えていなかった気がする。考えてきたカンペをそのまま読んでる気がした。
- ・PhD キャリアの多様性を伝えるのであれば、実際に PhD を取得後にアカデミア以外の職種に就いた方をパネラーとして起用しても良いと思った。
- ・後半の方で、悩みを抱えているものについて経験談を聞くことは参考になりやすい。
- ・パネラーに、失敗例の立場で意見を述べる方がいらっしやなかったのが残念。どうやったらダメ、失敗するかという（成功事例ではない）視点が、必要かも。
- ・企業からも複数人パネリストがほしい。
- ・パネリストの発言を要約でスクリーンに表示して頂けると、耳の聞こえない人がとても助かります。
- ・講演→まとめる方向が若干強引？
- ・あらかじめ質問を受け付けておく方が時間の節約ができてよいのではないかな。
- ・ディスカッションの場に同席する機会だけでもとても貴重だった。参加してみると意外に時間が足りなくなり、もっと聞いてみたいと思った。
- ・後半、もっと多くの質問に答えるようにしてほしかったし、研究者の方々に質問に積極的に答えてほしかった。
- ・大変楽しませていただき、勉強になった。もう少し時間が長ければと思う。
- ・パネリストにもっと積極的に意見を出してほしかった。
- ・時間が短いせいか、演者のせいか、早口な人が何人かいると感じた。
- ・もっと内容を絞るべきだと思う。聞きに来た方の不安とか、ちゃんと答えてほしい。
- ・もう少し先生方のディスカッションが聞きたかった。
- ・もっと後半のディスカッションに時間をとるべきだったと思った。
- ・後半のディスカッションの時間が短く、もう少し話を聞きたかった。
- ・もっとパネルディスカッションの時間を延ばしてほしい。
- ・大きなテーマを扱っているため、もう少し時間をとった方がいいと思った。
- ・時間が短いせいか、やはり抽象的なと思った。
- ・質（設）問が多すぎたかもしれない。もう少し論点を絞って深く議論できればと思った。
- ・おもしろかった。もっと長くても良い。
- ・非常に有意義だった。時間が短く、質問の全てに対する回答が聞けなかったのが残念。
- ・毎回時間が少ない。
- ・もう少し時間があれば、もう少し充実する。
- ・興味深い内容が多かったので、またもう少しゆっくり時間をかけてこういう場を設けていただけると嬉しい。
- ・もう少し時間が欲しかった気がする。
- ・もっと長い時間やって欲しい。
- ・非常に面白かった。
- ・すごく良い機会だった。
- ・とても面白かった。
- ・よかったと思う。
- ・今後の参考にする。
- ・参考になった。
- ・最高。

【問9】 来年以降のセッションで取り上げて欲しいテーマがあれば教えてください。

- ・（今回と）同じようなテーマ
- ・似たテーマ
- ・修士の就職について
- ・博士号を持つ人のキャリアチャンス、キャリア支援をどうやって本格的に取り組むかについて、社会全体が認識するようにアピールする
- ・企業にいる博士のキャリアパス
- ・就職活動の際に博士がどのように動いたか
- ・学部・修士のために博士の魅力を教えてもらえるようなテーマ
- ・ポストドク、助教から次のステップが狭き門となっているが、アカデミアでチャンスを求めている人がうまく残っていくポイントは何か
- ・修士卒と博士卒の違い
- ・博士、ポストドクがキャリアパスした後、どの程度の人々が happy に生活しているか
- ・アカデミアへのキャリアパス
- ・アカデミアに対するキャリアパスの説明
- ・アカデミアにこだわる理由（研究の先駆者になりたい、ロマン etc）についても議論して欲しい
- ・多様な進路に進まれた方の話（研究以外）
- ・研究者以外への転職や職の安定と研究者のそれを比較すること
- ・「キャリアの選び方」から「多様なキャリアで活躍する姿を紹介」に重心を移すといい
- ・30～40代でPI職を目指している人向けのテーマ
- ・オーバードクター問題について我々（アカデミックで研究している者）が国へ訴えることができることは何なのか
- ・博士が持っているべき具体的に必要なスキル等
- ・日本に関するデータ（就職等）
- ・デメリットへの対策
- ・失敗例
- ・就職先の例
- ・博士やポストドクを積極的に採用している企業の人事部長クラスの方の話や講演
- ・普通の企業に普通の就職をしたケースなども含めたテーマ
- ・企業内での経験談を主体にしたもの
- ・経済的な話題について（博士号を取るまで・取ってから）
- ・中小企業側の話
- ・大企業、ベンチャーの人にも話してもらおう
- ・ノンアカデミアの人を呼んで意見交換
- ・企業など、採用する側のパネラーや講演者も欲しい
- ・社長（CEO）が外国人の会社 / 研究所における Ph.D. の採用に関する話を話せる人を講師と呼ぶ
- ・技術員など
- ・何らかのハンディキャップを持っている人達について
- ・企業で活躍している PhD、谷澤さんの例のようなケーススタディ
- ・モラトリアムで Dr に入った学生のモチベーションをどう上げるか
- ・大学の相談室での対応例
- ・学生相談カウンセラーとの連携
- ・学生のキャリア支援に役立つ大学院教育とはどういうものか？
- ・海外の研究機関の情報
- ・留学のススメ
- ・海外留学について
- ・博士からの海外留学について
- ・海外ポストドクをやることについての不安
- ・海外ポストドクに行くべきか否か
- ・海外ポストドクについて（同コメント計2件）
- ・海外ポストドク→企業、国内ポストドク→企業、博士取得後すぐに企業、という例や割合、その場合どのような企業に就職しているのか、就職後にアカデミアへ戻る例
- ・研究者のワークライフバランス
- ・女性の博士後について（出産、結婚）etc…
- ・女性で Ph.D をとった方の話（キャリアパスとライフバランス）
- ・子供を持つ女性研究者のキャリアパスについて
- ・結婚
- ・男女格差や子育て支援
- ・ライフイベントで少しキャリアのペースダウンをしたいときに、選択肢が無いように思える研究職ではどうしたらよいか

- ・ロールモデルをもっと（本人が）提示してほしい
- ・キャリアパスに対する国の動きの違い（日本と欧米を比較したときなど）

【問 10】 本年会での属性調査（添付資料）をご覧になった感想をお聞かせください。

- ・多様な人がいると思った。
- ・しっかりしてれば男女関係ないと思う。
- ・そこまで気にする必要はないのではと思った。
- ・女性比率を上げることが大事というわけではないのではないか（本質的じゃない）。
- ・一般演題は自発的なのか？ PI から半ば強制的という人も中にはいるかと思う。
- ・これも毎回変わりばえしない。女性比率を無理に上げる流れの結果、今は女性＝男性と同等に働かなくてはならなくなって
いる→その結果、子育てしながら男性と同等に働かなくてはならないようになって、現場からは悲鳴しか聞こえてこない。
特に女性限定ポストに就いた人はその後のキャリアパスもなく大変。この問題はどうするのか？
- ・この資料では、無理に女性を増やすことを目的としていると感じる。順番が逆では？ 女性が働きやすい環境作りが、女性研
究者の本質的な能力底上げにつながるはず。人数が少ないのは結果であって原因ではないと思う。
- ・女性研究者が活躍する社会（職場）環境を整える必要がある。
- ・予想通りだと思う。よい研究者を国として育てたいなら、もっとフォローが必要だと思う。
- ・男女共同参画やワークライフバランスについてもっと掘り下げて考えた方が良かったと思った。
- ・女性研究者へのサポートが必要である事を感じた。
- ・より女性が進出して、男社会な現状を変えていけるとよい。
- ・男女比が 1:1 になるといい。
- ・女性の活躍が少ない。
- ・もっと女性を。
- ・自分も女性研究者なので頑張りたいと思う。
- ・皆、同じような不安や心配を抱えているのだと感じた。
- ・オーガナイザーが女性の比率が少ない？ となっているが、職階で教授が多いので、教授の男女比を考えるとこのくらいにな
るのかと思う。
- ・オーガナイザー、スピーカーとも、女性の参画という点については本質的にはあまり大きくは改善していないと感じている。
- ・シンポジウムオーガナイザーの年齢層（ワークショップの分かもしれないが）が予想より幅広かった。
- ・学生会員から正会員になる男女比をみると女性が減っている。研究職に就く女性の少なさを痛感した。
- ・学生会員の女性率が高くて良いと思った。
- ・学生会員で女性は結構いるが、正会員になると少なくなってしまうと思う。
- ・別の所で聞いた話だが、アカデミアにおいてキャリアが上がるほど女性の割合が減っていく。添付資料の 4）でポスターか
らシンポジウム（指定）に向かって女性割合が減っていくのがそれを反映していると感じた（ポスターは学部生や修士が多
いと思うが、口頭発表はポスドク、PI の方が多いと思う）。
- ・女性 % の少なさ。若い方（学部や修士の方）が多いが、それよりあとの人数がそれ程多くない、つまり、アカデミックに残
る人（残れる人）の割合が少ないということか。
- ・学生会員と正会員（主にアカボス？）の男女比に大きな差があるのは、女子学生がアカボスへ就く、目指す体制が不十分な
のではと感じた。
- ・参加者人数・学生会員数の時系列データを出してくれるとよい。
- ・女性を既婚者かそうでないかを分けてデータを出せば、有益なデータを得られると思う。
- ・子供を持つ研究者の割合を知りたい（男性の割合も）。
- ・技術員の演者が少ないと思う。テクニシヤンの地位（？）ももっと上がるべきだと思う。
- ・もっと企業参加者を増やし、求職者とのコミュニケーションを図ってもよいのではと思う。
- ・日本の研究分野で女性研究者が活躍している気がする。
- ・今後ぜひ継続してほしい（1 回だけでは判断できない）。
- ・毎年属性調査を続けていて資料を目にしているが、本来この資料は「全員」が目を通すべきものなので、すべての口頭発表
のセッションの椅子の上に置いておくなどもっと広報すべき。
- ・ある程度想像通りだった。
- ・このくらいの比率が現実かなと思う。
- ・学生の指導の参考になる。
- ・非常に分かりやすかった。
- ・分かりやすくて良かった。
- ・わかりやすかった。
- ・興味深いデータだと思う。
- ・おもしろいと思う。
- ・良かった。
- ・見やすく、具体的に記述されているので良いと思う。
- ・6）が最も参考になった。
- ・6）のグラフが少し見にくい気がした。

- ・ 6) の年齢・職階カテゴリーの男性、女性のバーが色別が見にくい。
- ・ 男女の色分けが見づらかった。
- ・ 白黒でグラフ等が分かりづらい部分がある。
- ・ グラフの色付けがコントラストが小さく見にくい。
- ・ カラーの方が見やすいと思う。
- ・ カラーにしてほしい。
- ・ 字や図が小さくて見づらかった。
- ・ 特になし（同コメント計3件）

【問 11】 その他、ご自由にどうぞ。

- ・（本アンケートの選択肢について）まあまあを付けられると選びづらい。5段階の数字の方が良いのでは？
- ・（本アンケート【問 2】の選択肢について）「⑨企業」とひとくくりにされるのが少し寂しい。アカデミアは企業を下に見ているように感じてしまう。
- ・ スマホをもっていない人もいる。あたりまえのようにスマホでセッションを進められるのはちょっと困った。
- ・ ぜひこのアンケートも Web で…
- ・ 公式アプリ（年会アプリ）があるので、回答などはそっちでできるとよかった。
- ・ 参加整理券に QR コードがあるのに気づかないまま回収されてしまった。このアンケート用紙等に QR コードを載せていただけたら良かった。
- ・ 専用ホームページのアドレスを配布して欲しかった。
- ・ 毎年、アンケートの結果もしっかりまとめて下さり、回答している甲斐がある。
- ・ セミナーと関係ないことだが、いただいたクリアファイルが面白い（笑）（名古屋出身なので…）
- ・ Wi-Fi がつながるとメールや回答しやすいので…。
- ・ Wi-Fi があれば良かった。
- ・ Wi-Fi が弱いのがいけない。
- ・ 食べながらは辛かった。
- ・ お弁当おいしかった。ごちそう様でした。
- ・ 弁当おいしかった
- ・ ごちそうさまでした。
- ・ ありがとうございます。
- ・ 今年も準備・運営お疲れ様でした。来年度も宜しくお願いします。

〈ケータイアナライズシステム〉 集計結果（四捨五入しています）

設問 0. 皆さんの属性について教えてください。

・ 学部・修士課程在学……………	62	40.8%
・ 博士（後期）課程在学……………	34	22.4%
・ ポスドクまたは非 PI の任期付き職 ……………	31	20.4%
・ PI 職または任期無し職 ……………	9	5.9%
・ 企業……………	14	9.2%
・ その他……………	2	1.3%
計	152	100.0%

設問 1. 将来のキャリアパスに不安を感じていますか？

・ 不安を感じている……………	105	69.5%
・ 不安を感じていないわけではないが、気にしていない……………	35	23.2%
・ 不安は感じていない……………	11	7.3%
計	151	100.0%

設問2. アカデミアでの就職へのこだわりの強さは？

・アカデミア以外は考えていない	15	10.1%
・アカデミア外もぼんやりと考えている	67	45.0%
・アカデミア外も具体的に考えている	38	25.5%
・アカデミア外をメインに考えている	29	19.5%
計	149	100.0%

設問3. 博士として国や職場（会社／研究機関）を変えつつキャリアアップしていくことをどう思いますか？

・魅力あるキャリアパスとして捉えている	94	63.5%
・経験を積めるのは良いが、海外に出るのは避けたい	23	15.5%
・国は問わないが、一つの職場でキャリアを重ねたい	17	11.5%
・国内の一つの職場でキャリアを重ねたい	14	9.5%
計	148	100.0%

設問4. 自分のキャリアパスについて相談できる人は誰ですか？（複数回答可）

・親や家族など	68	24.8%
・指導教員・PI	73	26.6%
・先輩や友達など	93	33.9%
・大学の相談室など	15	5.5%
・特にいない	25	9.1%
計	274	100.0%

設問5. キャリアパスを切り開くために、あなた自身がこれから伸ばす必要があると思う力は？（複数回答可）

・専門的知識・技術	86	17.6%
・多様な課題の分析や提案	79	16.2%
・コミュニケーション	75	15.4%
・プロジェクトマネジメント	46	9.4%
・語学力・国際的な交流経験	93	19.1%
・文章執筆力	52	10.7%
・プレゼンテーションスキル	57	11.7%
計	488	100.0%

コメント一覧

No	ハンドルネーム	コメント
1	Ohara	アカデミーの具体的な仕事内容について知りたいです。 iPhone から送信
2	halim	私は博士課程進学予定ですが教員免許を持っており、学位取得後はアカデミックに残るか教員になろうと考えています。保険があるからこそ研究に打ち込むことができていると思います。
3		企業がどのような専門技術を求めているのか、具体的に知りたいです。
4	来年度就活の博士二年	博士課程に上がり、様々な知識やスキルを身につけた方のに、むしろ企業に就職しにくいこの現状をどう考えますか とてもじゃないけど、ポストクの選択肢が選べません。iPhone から送信
5	sukn	博士課程に進むに当たり、その後の就職や将来に不安があります。どのような機会、場所で博士号が活かされるのか知りたいです。
6	halim	バイオベンチャーの業界はどれくらい将来が安定しているのでしょうか。

No	ハンドルネーム	コ メ ン ト
7	ドラゴンズ	こういう場なので良いことしか話さないと思うのですが、ポスドク全体の内何割が就職先が見つかるのですか ポスドクになった何割が失踪や自殺するという話もよく聞くのですが、マイナス面も話すべきだと思います。iPhone から送信
8	MIRAI	森先生のご発表、とても良かったです。私は企業で働く研究者ですが、社会の中で、自分が実現したいことを具体的に提案し、チームで実現できる人材は企業にも多くはいません。そういう能力を在学中、ポスドクで身に付けることは、難しいかもしれませんが、世の中の様々なことに興味を持ち続けて頑張ってください。
9	Vet	アメリカのポスドクの統計じゃなくて日本のポスドクの進路の統計はないのかなあ
10		現在、博士後期課程に所属しており、来年度から就職します。企業で留学させてもらい、その後いずれはアカデミアに戻りたいと考えています。企業就職からアカデミアに戻ることはどれぐらい難しいのでしょうか？
11		このディスカッションのためだけに来ました。海外と日本の比較について聞きたいです
12		出産、結婚のタイミングが難しいです。不安…
13	Vet	結婚とか出産とかのタイミングが難しいのが不安
14		学会で人脈を築きたいのですが、なかなかきっかけがわかりません。先生方はどのように人脈を築いていますか？
15		博士卒業の場合、年齢や社会経験不足が原因で企業は雇いたがらないという噂や懸念があります。これは本当なのでしょうか？
16		ノンアカデミアの非研究職に就職するとアカデミアに戻れないのが、不安の要因の一つだと思います。実際戻れないものなのでしょうか？
17	HIGO	パネラーの先生方はご自身の学生、ポスドク、助教のキャリア形成をどのように指導あるいは支援していらっしゃいますか？具体的なノウハウはありますか？
18	kinase	博士号取得者は年齢や専門的過ぎて企業に就職しにくいと聞くのですが、実際はどうなのですか？
19		不安を感じていない博士学生です。アカデミア以外でもアカデミア就職でも、自分の強みを認識するべき。修士の人間にできることしかできないなら、博士へ行った意味ない。自分の強みを見いだせないなら、どこの業界へ行っても同じ。自分の強みを知るには、多様な環境にでること。つまり、研究する日としない日をつくり、研究者以外と交流の場をつくる
20		日頃学生を見ていてアカデミック向き、企業向きあるいは研究以外に向いていると感じることはありますか？どんな部分にそう感じますか？
21	Rt	修士卒の製薬企業研究者です。以前の日本企業では修士卒を採用して育てるというやり方が多かったようですが、海外研究者とすぐに渡り合える博士卒を採る比率が上がっていると思います。修士卒の研究者は会社の研究で学位を得られれば幸せですが、実際はどうやって学位をとるかで苦労している人が多いです。
22	tanaka	自分がアカデミ、もしくは企業に向いているって何で決めるんですかね
23		修士課程までで身につけられる能力と博士課程で身につけられる能力はどのように違うのか、先生方の考えを聞きたいと思います。
24	Vet	ポスドクになって研究テーマに今より愛着が湧いたら、企業よりアカデミアを志望しそう。
25		キャリアパスがうまくいかなかった人達がどうしているかの統計等がありますか？
26	おやじ	企業に親しみがなくよく判らない
27		大学教員になっても学生の指導などでなかなか研究ばかりはできないという話を聞きました
28		男性です。正直、結婚したいけど、学生だと結婚してもらえないと思う。早く結婚したい場合は博士課程に行かない方がいいのか？
29		年齢についてはどのように考えるべき？
30	おやじ	就職にゴールがあるわけではないので、すこしでもやる気がでる職場にキャリアを変えていくことはいいことでは。
31	Vet	学会から帰ったら相談室覗いてみようかな
32	おやじ	普段からコミュニケーションをとれる人がいるといいですね。

No	ハンドルネーム	コ メ ン ト
33		PIが研究大好きだと、進路相談してもいい答えが来なそうです
34	mame	私は大学の相談室（面談者が企業経験や人事経験あり）に相談して希望する仕事につけました。家族や先輩よりも客観的意見がもらえてとても頼りになり、自信もつきました。
35		企業で研究員をしている者です。社内では、社会人ドクターとして博士号をとるのが当たり前です。これは企業として珍しいのでしょうか？また、現在、就職せずに博士過程に進学している方は、社会人ドクターは考えていなかったのでしょうか？
36		大きい企業は、長期のプロジェクトが多く秘密情報も多い。日本の企業ではキャリアチェンジが多すぎはマイナスかもしれません。年齢も大切です。
37	おやじ	ライフイベントは先送りできないので、優先すべきです。
38	おやじ	ラボのボスに進路相談しても、研究しろとしか言われない
39		先生方は研究室のマネジメントで大変だと考える点がありますか？
40	Vet	もう最後か…NHKでこの企画やってくれたら毎週参加します！！
41	おやじ	広い視野。いろんなことに興味が持てる感性が重要では。
42	私大教員	アカデミアと言っても、色々なレベルがあり、これからは無くなる大学も出てくる。安泰ではない。
43	おやじ	森先生、谷澤先生、非常にいいお話ありがとうございました。
44	おやじ	ライフイベントが優先されるような研究者社会を作っていきましょう！！
45		企業は博士だからとらない、というのはスキルと同じくらい人物重視だから。博士課程は自己アピールやコミュニケーション力が同年代に比べて低いから企業はなかなか魅力に感じられない。逆にそれを感じさせない人や、それを認識して頑張っている人は採用される。
46	おやき	もっと時間があっても良かった。ためになりました iPhone から送信
47		地方私立大学の学部生です。今後の進路の参考にさせていただきます。

【池上彰と考える—これでいいのか日本の生命科学研究—】

●日 時：2014 年 11 月 27 日(木) 11：45 ～ 13：00

●会 場：パシフィコ横浜 会議センター 1 階
メインホール（第 1 会場）

●コーディネーター：

池上 彰

（東京工業大学リベラルアーツセンター 教授）

私の知る限り、ほとんどの研究者「個人」は、誠実で、努力家で、しかも優秀です。しかし昨今の STAP 騒動をはじめ相次ぐ「不正問題」、そして対策が遅れている「ポストドク問題」など、テレビのバラエティー番組のネタにされてしまうほど、研究者の「社会」は一般社会から奇異な目で見られています。特に不正問題は研究者「個人」が防ごうと思えば防げる問題です。それでも繰り返して起こってしまう原因は一体なんなのでしょうか？

1 つには研究者社会の持つ閉鎖性があると思います。個人レベル、研究室レベル、研究所・大学レベル、研究者社会レベルでの閉じた人間関係が「個人」を間違った方向に誘導してしまうのでしょうか。そしていつの間にか世間の常識からかけ離れた“ケンキュウシャ社会”を形成してしまうのかも知れません（カタカナで書いた理

由は「研究する者」の社会ではもはやなくなりつつあり、別種の「固有名詞」化しつつあるという意味です）。軽度の閉鎖性が競争意識と国民性からきているとすれば仕方のない面もありますが、度が過ぎた閉鎖性は、もはや周りからのチェックが届かず、不正を未然に防ぐことができなくなる「害」以外の何者でもありません。「私は不正などしません。関係ありません。」という方がほとんどだと思いますが、ひとたび問題が起これば、多くの人が巻き込まれ、新たな規則ができ、全員が被害を受けます。これはやはりみんなで考えていかなければならない問題です。

状況打破の第一歩として、研究者以外の外部の方から客観的な評価あるいは「おしかり」を受けることは大切だと思います。今回の企画はそのような立ち位置からスタートしました。それで、「しかって」頂く方はどなたが適任かと考えたところ、まず頭に浮かんだのは、様々なテーマに詳しく、ズバットおっしゃる池上彰先生をおいていないのではということになりました。大変お忙しい方なので、断られるのを覚悟でお願いしたところ、「それは面白い、私も研究者の方にお聞きしたいことがたくさんあります。是非やりましょう。」とスーパーポジティブなお返事を頂きました。コーディネーターもお

引き受け下さり、「台本なし、会の流れはパネリストと聴衆の反応を見ながら進めていきます。」とのことでした。私は何回かパネリストをやらせて頂きましたが、今回ほど緊張したことはありません。

当日は予想通り、1,000名を収容するパシフィコ横浜の大ホールが一瞬にして満員になりました。最初に池上先生から「本日は容赦なく突っ込ませてもらいます！」との先制パンチが繰り出され、実際にかなり突っ込まれ返答に困るシーンがいくつもありました。パネリストの苦しみ姿をご覧になりたい方は、近々公開される予定の録画ビデオをご覧下さい。それ以外は、私たちの知るテレビ番組と同じように、池上先生の判りやすい解説とテ

ンポのいい進行で、理系と文系の発想の違い、研究所と一般企業のガバナンスの違い、マスコミ報道の危うさ、ポストク問題の重要性など、多岐にわたり意見が交換されました。新たな発見もあり大変有意義な会でした。終了後のアンケート調査でも約90%の方に面白かったと言って頂き、委員一同冷や汗をかきながら頑張った甲斐がありました。私としては、今回のシンポジウムで池上先生と分子生物学会に太いパイプができた！と思っており、これをきっかけに研究者社会がより開かれた、そして若者が魅力を感じて参加できるような、「大志を抱き研究する人の社会」になってくれると信じています。

(文責：座長・小林武彦)

〈アンケート〉 集計結果 (四捨五入しています)

【問1】 あなたの年齢は？

① 24歳以下	118	29.4%
② 25～29歳	69	17.2%
③ 30～34歳	36	9.0%
④ 35～39歳	40	10.0%
⑤ 40～49歳	76	18.9%
⑥ 50～59歳	49	12.2%
⑦ 60歳以上	8	2.0%
※ 未記入	6	1.5%
計	402	100.0%

【問2】 あなたの身分・職階は？

① 学部学生	52	12.9%
② 大学院生 (修士)	81	20.1%
③ 大学院生 (博士)	35	8.7%
④ ポスドク	27	6.7%
⑤ 大学教員 (助教・講師・准教授)	84	20.9%
⑥ 大学教員 (教授)	30	7.5%
⑦ 研究員	23	5.7%
⑧ 主任研究員・チームリーダー・室長以上	11	2.7%
⑨ 企業	43	10.7%
⑩ その他	13	3.2%
※ 未記入	3	0.7%
計	402	100.0%

【問3】このセッションを何で知りましたか？（※複数回答可）

① 学会ホームページ	85	16.2%
② 年会ホームページ	76	14.4%
③ 会報	20	3.8%
④ プログラム集	167	31.7%
⑤ ポスター	62	11.8%
⑥ 会場内の広告	70	13.3%
⑦ フェイスブック	0	0.0%
⑧ クチコミ	36	6.8%
⑨ その他（年会アプリ）	2	0.4%
⑨ その他（通り掛かり）	2	0.4%
⑨ その他（記述なし）	5	1.0%
※ 未記入	1	0.2%
計	526	100.0%

【問4】このセッションはいかがでしたか？

① とても面白かった	195	48.5%
② まあまあ面白かった	161	40.0%
③ 普通	22	5.5%
④ あまり面白くなかった	9	2.2%
⑤ つまらなかった	4	1.0%
※ 未記入	11	2.7%
計	402	100.0%

【問5】今後このような試み続けるべきだと思いますか？

① 是非続けるべき	307	76.4%
② 続けるべきだが方法を変えた方がよい	64	15.9%
③ やめた方がよい	5	1.2%
④ わからない	11	2.7%
※ 未記入	15	3.7%
計	402	100.0%

【問6】このセッションに関する感想をお聞かせください。

- ・最後の15分だけキャリアパスの話だったが、この議論の時間がもっと多くあるべきではないかと思った。
- ・時間の制約があり少し深みが足りなかった。
- ・時間が短いと感じた。
- ・時間が短い。
- ・もっと時間を長くしてほしい。
- ・もっと長時間聞いていたいくらいだった。次回はもっと長い時間講演していただきたい。
- ・STAPに時間とりすぎ（面白いけど）。
- ・キャリアパスを考える会になっていない（残り10分のみ討論）。STAPに時間取りすぎ。
- ・STAPより取り上げるべき問題があるはずで、キャリアパス委員会として題材を提示して議論を始めても良かったのではないか。
- ・STAP問題に時間をかけすぎ。もう済んだこと。こだわりすぎ。時間をかけても本質的な議論にならなかった。不正・嘘・勘違い・サイエンスコミュニティにコンプライアンスが欠けていると思う。
- ・STAP問題に関しては文系（一般人）の代表としての池上さん vs 研究者という構図が明らかで少し面白い部分もあったが、既に言われていることの塗り返しのようでやや冗長に感じた。教育に関して等、もっと強い意見のあるパネリストがいたら良いと思った。
- ・パネリストの先生方は立場等があって自由に発言ができないのかなと思った。もしかしたら名前などをふせて匿名にすればより腹の割った議論ができたのかもしれない。
- ・パネリストは話せる人でないもったいない。

- ・パネリストの人は重要かと。もっと破天荒な人を入れてほしい。
- ・パネリストをもっとアクティブな人にすべき（小林先生レベルをもう一人くらい）。あともっと突っ込んだことを言える人。
- ・パネリストが差しさわりのない答えばかりなので、昨年のガチ議論のように twitter を活用して意見を取り上げてほしい。Ustream で流すのも良いと思う。
- ・パネリストさんたちのバランスがちょっと悪いかと思った。
- ・パネリストの選に疑問。きちんと今回のために準備してきたのか？ 普段から問題意識をもって自分の意見をもっていない人がキャリアパス委員をやっているの？ はずかしい。
- ・パネリストの選は？
- ・パネリストの選をもっと考えてほしかった。
- ・パネリストが消極的でまともな議論になっていない。立場があるから会場からヤジを入れた方が“本音”の議論になるような。
- ・パネリストにもう少し女性がいた方がよかった。あと、発言しそうな人を選ぶべき。少しおとなしすぎる人もいた。
- ・パネリストが全員アカデミアというのはいかがなものか？
- ・パネラーは様々な立場の人を選ぶべき。年齢（20、30、40、50、60 代）、ポジション（学生～教授、ポスドク、助教、アカデミック外）、性別。
- ・パネラーに企業人も入れた方が良いのでは？
- ・パネラーをアカデミック分野からだけでなく民間からも選ぶと良いと感じる。コメントが画一的に感じた。
- ・パネラーは女性が少なすぎだったのでは？
- ・パネラーにもっとアクティブになってほしかった。
- ・パネラーの発言が貧しい。パネラーの立場の多様性が低い。
- ・パネラーの先生方にはもう少し歯切れよく話してもらいたかった。
- ・パネラーの発言が少ない。
- ・パネラーの発言者が意見を発言する機会がやや多いと感じた。もっと積極的に発言できるパネラーを選出してほしい。
- ・パネラーをもっと率直に意見できる人が立つべき。
- ・パネラーの方の中にほとんど話されなかった人がいたのはちょっとどうかなと思ってしまった。自分はまだ受動的であると感じられたので、問題意識を持ちつつ、自主的に動けるように努力していきたいと感じた。
- ・何故パネリストとしてこの方がおられるのだらうと少し思うってしまうような方もいた。ズバズバ自由に意見を言う方がパネリストに選ばれてほしい。
- ・しゃべれないパネリスト、問題意識の低いパネリストは困る。
- ・せっかくの機会なのでパネリストの本音の意見が聞きたかったが、うやむやにしている方もいたのが少し残念だった。
- ・ひどいと思う。なぜこのパネリストの面々を選出したのか。池上さんと呼んだのは面白いと思った。そして池上さんはすごかった。だけどパネリストの先生方が自分を守りすぎて面白くなかった。しかも、先生方はおそらく頭がよすぎて、相手に“分かるように”話をしていない。だから話が噛み合わず話が盛り上がらない。
- ・すぐに解決しない問題を discussion することはおもしろいと思ったが、もう少しパネラーの方が発言して頂けた方が良かったと思う。
- ・もう少しパネリストを話す人を選択すべきだったと思う。
- ・委員の選抜方法が不透明のように思う。可能なら全会員から立候補＋選挙で選ぶべきと思う。頼まれて、断れなくて…などはあってはならないと思う。
- ・人選に問題（パネリスト）、ツッコミが足りなかった。
- ・コメンテーターは身内であるのでなかなか立場上言いにくいこともあるのでなかなか本音しんなつなコメントが出ない感じ。
- ・皆様立場のある方々なためかまだまだ本音が出ていなかったように思う。立場のないポスドク等に声をかけて自由に発言してもらっても良かったかと思った。
- ・なかなか本音を言うのが難しそうだった。
- ・先生方はより積極的に発言すべきだと思う。もっと本音で discussion をしても良いと思う。
- ・立場のある先生方なのであまり思い切った意見（個人的な意見）を聞くことができず残念だった。もう少し話の好きな人がパネリストに並んで頂けたらと思った。
- ・6 人の回答者をどのように選んだのか分からないが、あまり積極的に発言されない方は選ぶべきではないのでは。
- ・先生方からもっとはっきりとした考えを開けるとよかった。あまり激しい意見は避けている感じがした。
- ・コメンテーターがポジションのある人ばかりなので、ポスドクの方やドクターの方の生の声で discussion してほしい。
- ・若い先生方の発言がもっと聞きたかった。
- ・もう少し議題を整理して話をできる人をパネラーに。助手、ポスドクレベルの方もパネラーに入れてほしい。
- ・楽しかった。しっかり自分の意見、話、質問に対して答えられる人を全員においてほしかった。
- ・ディスカッサーの歯切れが悪い。
- ・みなさん他人ごと。
- ・「STAP があるのかないのか？」との問いに「（自然科学の立場としては）論文が撤回された以上ない。」と明快に回答しなかったパネリストがいたことにたいく失望した。「責任の所在」について。「論文の責任は責任著者にあり、雇用機関には人事を行った責任がある。」と明言したパネリストがいなかったことに失望した。
- ・研究者なら不正に怒らなければ。コミュニケーションの難しさを言いながら、「ない」とも言えない“先生”に驚いた。証拠がないなら科学的には「ない」でいいと思う。どういう“立場の難しさ”があるのか奥の闇を感じた。それでは若者に魅力がなくても仕方ないよね。

- ・おじさんの話が多いので、討論する人こそ男女のバランスが大切だと思う。
- ・理事長と年会長がパネリストでないのはなぜ？
- ・あけすけトークはしない／できないのでは議論は深くなりづらい。表層的でありおもしろくない。
- ・何がやりたいのか良くわからなかった。不正の問題を取り上げるのかキャリアパスをやりたいのか焦点がclearではないかと。事前に打ち合わせを行うべきでは？
- ・話し合うテーマをもう少しつめて各パネリストの意見をあらかじめまとめておく方よい。パネリストの人選。
- ・先生方の質問内容は予め用意しておいた方が効率よく進行できたと思う。
- ・事前にお題を練って回答してないように感じた（全体に。一部の回答はさすがにうなるものがあった）。
- ・発想は面白いが話のつながりが悪い。多少の事前打ち合わせは必要ではないかと思う。
- ・もう少し発表内容を事前に用意した方がよい。
- ・論点を絞って討論して欲しかった。前半部（不正）の議論がもう少し深めて欲しかった。
- ・問題点が散漫になってしまった感があった。流動性を高めても生活や待遇の改善がされないとポストドク問題は解決しないと思った。
- ・正直期待はずれだった。
- ・内容がない。
- ・キャリアパスの問題が総括されたのはよいがもう少し踏み込みが足りない。
- ・池上さんの漫談状態であり、研究者側に自己の考え方をきちんと表明できないことを露呈してしまっていた。（五島さん、小林さんを除く）結局、池上さんの言う「政策の失敗が科学の発展をさまたげる」現実を打破しない限り、日本の将来はないと思う。長期的視点を持った生命科学者を政策決定現場に送り込むことを学会として考える時であると思う。
- ・池上さんが具体的に示してくれたのに対して研究者代表者があいまいにしか話さなかった点について、それがSTAP問題のうまく解決できなかった原因と思った。残念。
- ・池上さんがキャリアパスの話をもってくるまでは、キャリアパスの話ではなかったので少し残念（時間として短かった）。でも、研究者としてのあり方、一般社会との差異について改めて考えさせていただいた。
- ・池上氏のみが問題点をclearに提示。
- ・真面目な議題なのに司会者がちゃかしてしまい不快。発表者の意見が一般論にすぎない。
- ・少し内容に偏りがあったように思う。STAP以外の話もディスカッションして欲しかった。
- ・研究者とそれ以外の人たちの意見から問題が強く浮き彫りになったと思うが、解決の糸口になるような意見がほとんどなかった。
- ・前半の話では具体的な話で本音を引き出すのは難しいと感じた。もう少し一般的な話をした方がよかった。ある程度の事前の打ち合わせがあった方がよかったのでは？後半の話をもっと突っ込んで話しを聞いたかった。
- ・興味深い話だったが、時間が短いのと、結局深いところまで話せないのだなと思った。
- ・STAPにしてもpostdoc問題にしても、今非常に重要な問題。もう少し時間を長くして、会場の意見も聞けるようにした方がよいと思った。
- ・「生命科学の論文の何割かは再現できない」という話を聞いたことがあります、もう少し広く問題を取り上げてほしいかと思う。STAP細胞の問題は特殊すぎるのでは。
- ・もっと具体的な話を聞ければと思った。聴衆からからのコメントか意見をもらえば良かったのでは。
- ・新しい取り組みで興味深かった。ただし議論が深まらなかったのが残念。
- ・話の展開が遅かった。しかし時間的に仕方がないのかもしれない。
- ・もう少し科学に突っ込んだ話もほしかった。
- ・2013年の際の公開討論を受けて、その後学会としてどういったアクションをとるべきか議論するような内容がほしい。（大学）構成員の考えを文科省やその他政治家へ伝えることから改善が始まるという結論だったはず。今年は一昨年までと同じくガス抜きで終わってしまった印象。
- ・言いたいことをもっとしっかり発言してほしい。社会に発信すべき学会であるべき。
- ・パネリスト以外にも発言の機会を。
- ・会場からの発言もあった方がおもしろくなったかもしれません。
- ・参加者全員で言いたい放題。Discussionすればよいかも。
- ・学生の意見も交ぜたら面白くなるのではないかな？
- ・色々なお話が聞けて面白かったが、生命科学の専門外の池上彰さんと呼んで話を展開していたが、このセッション自体に来ている人（研究者等）は専門内の人が多く、もっと多くの専門外の人々に今回の話を池上さんにしてもらえればと思う。（他人任せになってしまいますが）
- ・もっとaudienceをinvolveすべきであった。real timeでアンケートとれるなど…。コメンテーターは年齢、背景、立場など異なる人を集めた方がよいかも。STAPのdiscussionをしてもあまり意味がない。何も新しいことはでてない！もっと本質に迫るdiscussionをすべきであった。池上さんの司会の上手さ故最後の方でようやく盛り上がってきた。
- ・事前に“話題として取り扱ってほしいこと”などのアンケートをとっておくべきだと感じた。
- ・今回のセッションの人以外にもクリッカー等で会場全体の考えがわかるようにしてほしい。
- ・学界内のみでなく民間や政界関係者とのdiscussionの機会を設けることが必要ではないかと思う。
- ・フロアとのディスカッションを増やした方がよい。
- ・会場との交流があるとよいかと。
- ・日本の科学レベルの維持が重要。
- ・人材育成の改革を考えるべし。

- ・研究者の未来は明るくないと感じた。
- ・将来の身のふり方に悩むようになった。
- ・博士の学生やポストを貴重な人材と考えているのが間違いだと思う。珍しいが貴重ではないと思う。
- ・流動性→任期付→保障なし→魅力ないだと思います。流動性でなぜ解決するのですか。そもそもの枠を増やさないとうしようもない。
- ・企業の立場から、取りたいポストがあれば中途でも取る。なかなかそういう人はいない。
- ・ポスト問題の扱いが少なかった。
- ・あまりまとまりがなかった。話自体は面白かった。キャリアパスの話がそこまで多くなかった。STAPはわりとどうでもよかったが、社会の視点が知れてよかった。
- ・学問レベルがポストで上がったらしいが論文数はどんどん減ってるのに…。
- ・リーダークラスの demand は大きくない。テクニシャンの需要が最も大きいため高給として採用することになるポストの需要は少ないと思う。また企業のマネジメントクラスのポストも大きくなく、数年成果を上げたテクニシャンの人達のポストも必要。この分野の予算が大きくならない限り、なかなか現在の問題は解決できないと思う。もちろん能力があるなら別だと思うが…。
- ・他のテーマについても聞きたかった。
- ・流動性で解決できるのか？そうではないだろう。需要が社会にあることが前提ではないのか。流動性で需要は生み出せない。
- ・少し STAP のことが多すぎたように感じる。もっと一般的なこと、例えば大学院重点化の是非、ポスト大増員の罪悪などについて広く意見を聴きたかった。池上さんは流石に話をまとめるのがうまくていらっしゃいましたが、今ひとつ突っ込めていない気がした（最後の5分くらいはとても良かった）。
- ・もちろん STAP に関する今回の騒動も大きな問題ですが、これをどのように解決するかというのは様々な要素が絡まりすぎていて、正直外野の研究機関にいる者としては、これに関してはセッションで時間を取らなくてもよいかと思う。何らかの議論が1～2hで出るとは思えない…。後半での、トップに立つ研究者のマネジメント能力についての議論は思うところがあって、非常に面白いものであった。研究者の働く環境、ポスト、教育について、次回も取り扱っていただけると嬉しい。更には、匿名でも良いですから、若手や学生の意見も拾っていただけると、つまり現場の声をもう少し拾っていただけると、より面白くなると思う。
- ・ポストに対する企業の demand について。
- ・問題点はわかったが解決法がわからない。
- ・特に生命科学分野の谷間に生れたなと感じた。教育システムをしっかりと見直してほしい。
- ・無能な教育者が無能な研究者を育てていることがわかった。
- ・昨年より良い企画だと思う。
- ・メディアで取り上げられるような有名人を招くことがとても新鮮だった。
- ・オーガナイザーの人選がやはり良かったと思う。当事者意識を持って話を聞くことができた。STAPの件がなくとも池上さんのような実力も人気もある方とコラボレーション？できたら良いなと思う。あと、学会以外でもやってほしい。
- ・有名人を招へいして参加者を増やすのはよいアイデアだった。テーマがやや総花的だった。
- ・とにかく池上氏であったことが一番。
- ・著名な先生方が、緊張しながらも回答しているところが新鮮だった。池上さんの回答を噛み砕いてくり返して説明するのが良かった。池上さん自身のご意見ももっと聞きたかった（質問するばかりでなく）。
- ・池上先生の前で萎縮される先生方が印象的だった。
- ・池上先生を含めた7人の先生方の考え方や哲学のようなものに触れることができ興味深かった。本題以外の問題についても時おり触れられており参考になった。「イントロが書けない学生」というのは興味深かった。
- ・池上氏の力はすばらしかった。是非続けてほしい。若い学部生、修士学生に雰囲気伝えるしくみを是非考えて下さい。
- ・池上彰さんの進行能力がとても高く、チョイスしたことがポイントだったと思う。
- ・池上さんの起用が問題点をはっきりとさせている。
- ・池上さんの鋭い指摘がかっこよかった。研究者の世界と一般の世間ではだいぶ考え方が違うんだということがわかってよかった。
- ・池上さんからの視点と理系の視点で生命分野の問題をきけて良かった。
- ・池上さんの考えをもっともっと聞きたかった。司会者としてはやはりすばらしいと思った。
- ・池上さんの話の進め方がとても聞きやすくおもしろかった。
- ・池上さんからの突っ込みが厳しく聞き応えがあった。
- ・池上先生の「つつ込み」はなかなかすどく興味深かった。
- ・池上彰さんの鋭いコメントが面白かった。
- ・池上さんがズバッと聞いてくれて世の中の意見が聞けて参考になった。
- ・池上先生のパネリストの方の意見をまとめ上げ発展させていく能力がすばらしいと思った。
- ・池上さんの痛いところを突いていく発言がとても痛快だった。本音を引き出していくトーク力は流石だった。
- ・池上さんの引き出し方に感心した。
- ・池上さんの引き出す力がすごい。
- ・池上さんのまとめおもしろかった。行政に訴える道筋考えなきゃと思った。
- ・池上彰先生がよかった。
- ・池上さんはテレビのままだった。
- ・池上先生はじめ多くの研究機関、大学の先生方のお考えを聞けたことが良かった。

- ・池上さんが話を拾ってつなげ整理しつつ進めて下さったので頭の中で整理しやすく楽しむことができた。
- ・池上さんのお話が聞けてよかった。
- ・池上さんの言葉の拾い方、問題提起への展開があざやかだったため飽きることがなかった。ただ、問題点は露わになったが対策となると得策がでるまでには至らなかったようである。
- ・池上さんの力を感じた。
- ・池上氏がコーディネーターするというそれだけで議論が閉じた印象から開いた印象に変わってよかったと思う。
- ・池上先生の司会は流石というか、私たち（学生）はまだどちらかという一般人に感覚が近いですから、普段研究生生活をしていて疑問に思うこと、不満であること等ご質問して下さり面白いものだった。ですが、池上先生もしくは私たちが望むような議論が必ずしも起こらなかったというのが今日の印象です。先生方の立場上、意見の表現が難しいのは理解できますが、個人的な感想としては、新たに得るものは特になかった様に思う（池上先生を生で見られたのは嬉しかったです）。
- ・池上さんからのいわゆる「文系」からの意見を聞く機会をもてて良かった。実在ケースには発言しにくそうだったので、仮想問題ケースを取り上げて（つくって）受け取り方の違いを論じるなどしてほしい。
- ・池上さんのお話が聞けてよかった。
- ・池上先生が科学をどう捉えてどのように発信していくのか気になった。
- ・池上さんのおかげで時事がいっぱいからんで楽しかった。
- ・池上さんは流石に頑張って突っ込みまともにしていた。対して研究者たちは、せっかくの機会であるのに掘り下げる方向にならず、言い訳的な発言が多かった様に思う。しかし後半は池上さんの突っ込みにより、研究者側から本音を引き出す事に成功していた。研究を始める時、目標をしっかりと見つけてからスタートすべき事。英語ではなく論理構成能力に問題アリ。マスコミの立場、組織の上層部が事態を收拾する手順がまずい事、文科省の思いつきで誤った政策が多く、その尻拭いもできていない事など、有用なコメントも出た。
- ・池上氏のようにまとめる力のある学界外の方を発掘し、お招きする試みを続けて下さい。
- ・池上さんの問題提起が核心をついていておもしろかった。
- ・池上さんと同じサイドに立つ人間がもう1人いても良かったように思う。
- ・池上さん。お忙しい中ありがとうございました。プライドをもって研究がんばります!!
- ・歯に衣させぬ池上先生のご意見はこれまでのこういった会にはない展開で大変面白かった。
- ・来年も池上先生のさまざまな意見を聞きたい。
- ・非常に面白かった。池上氏の進行は退屈させなかった。
- ・研究者と池上さんのやりとりがすごくためになった。
- ・このセッションは全国に放送すべき。
- ・とても参考になった。TV（民放）で放送してほしい。
- ・参加者の多くは研究者であり、STAP問題などに対する意見、姿勢は共通に思える。もっと一般向けに（放送するなど）広く伝えるべきだと思う。
- ・もっと文系、一般の方にも見てもらえばより良い。
- ・文系の人（池上さん）も話すことは新鮮で非常によかった。池上さんでも理系の理解していない部分があるのは驚いた。
- ・文系側からの疑問という視点はおもしろいと思った。
- ・理系陣営 vs 池上先生（文系）という図がそんなに文系理系区別できるのかと思ったが、やはり結局組織のマネージメントという一般的な話になった。研究界の特殊な事情を掘り下げたわりには意見が一般的すぎて全く解決への見通しが見つからない。このようなキャリアを考えるセミナーは多くあるがいつも同じようなオチになるのが不満。
- ・理系の分野の人と文系の人の感覚の違いにあらためて新鮮だった。
- ・文系の人々の疑問がどこにあるのか、どこがズレているのか予想外な面が多かった。
- ・テーマに関する内容を文系と理系の違いから聴くことができた。
- ・文系と理系のコミュニケーションエラーという話題が印象に残った。文系の方からすれば理系の技術や実験というものは具体的なもので「あるとは言えないがないとも言えない」という不明瞭な回答を研究者がするというのは納得がいかないのではないかと考えた。もっと相互理解のために歩み寄ることが大事だと感じた。
- ・非常に面白かった。特に研究者と一般の認識の違いを改めて認識することができた。このような認識のズレを一般の方にも理解してもらう機会があると良いと思う。STAPの事に関してもポストドク問題に関しても、根本には安易に大学院へ進む学生の増加があるのではないと思う。もっと少数精鋭でやった方が良い教育ができるのではないと思う。
- ・世間の考え方と研究者の考え方の違いを噛み砕いてわかりやすく聞くことができた。ぶっちゃけ話も多くて楽しかった。
- ・研究者と世間の考え方の違いがわかって新たな発見だった。
- ・科学におけるコミュニケーションギャップなど興味深いお話を多く聞くことができて良かった。
- ・興味深い話が多く今まで考えたことがなかった社会との関係を考えるいい機会になった。
- ・科学者側のサイドの話を聞いて同じような考えを持っていたり、自分とは違う考えを持っていたりしてその意見が聞けておもしろかった。逆に社会にも問題があると思うのでそっちも聞きたいと思った。
- ・科学研究者の共通の問題と一般人への成果報告の難しさ。
- ・博士修士者の活躍の場として研究者と一般の方との間をつなぐ様なポジションも重要だなと思った。
- ・社会からみた研究のあり方について新しい切り口からお話いただけた。
- ・一般と研究者の差がわかりやすかった。特に会社のトップのあり方などすごく理解できた。
- ・科学者と一般の人の考え方の違いを浮き彫りに出来た事が今日のセッションの良かった事だと思う。
- ・文系と理系、大学と企業の違いを知れて楽しかった。しかし、問題提起の話だけでなく解決策（個人で取り組めるもの）を挙げるというののもよかった。

- ・アカデミアの人は議論が好きだけで何のための議論なのか目的がないまま進んでいる。今回の議論された内容も1ヶ月後には忘れられるだろう。アクションを踏まえた議論をした方が良い。研究の議論とこういった体系的な問題は議論のやり方を変えるべき。
- ・研究者の常識と社会の常識の違いを改めて知れて良かった。
- ・研究の先端を担っていらっしゃる先生方、文系の方両者の意見を知れてよかった。
- ・一般社会の認識と研究者の立場からの認識の違いが明確であったと思った。
- ・研究者と一般の人との考え方の違いがわかった。普通テレビや新聞などではわからないような事も話してもらえたので、とてもよかったと思う。
- ・理系 vs 文系的な趣きがあったので、そうなら文系の方がもう少し多くいてもよかった。
- ・東大の先生が本音で話して良かった。
- ・白髭さん面白い。
- ・小林先生のような対話が上手な方、白髭先生のような自身の意見を言ってお話の方は非常に面白かった。
- ・小林先生と池上さんの対話（1対1）という形式でも良かったと思う。（あるいは斎藤先生と小林先生と池上さんの3人）途中から、白髭先生が色々発言され面白かった。
- ・斎藤先生の話が分かり易かった。
- ・先生方が本音を語って下さってよかった。話を引き出す池上さんの手腕はおみごと！
- ・試みは面白いと思う。何が変わっていくか見ていきたい。
- ・異分野の人を取り込んでいるのはとても良いと思う（去年の文科省の人を呼んだのもとても良かった）。
- ・非常に興味深い話ばかりで参加して良かった。
- ・改めて科学と社会の関係を考えるきっかけになった。
- ・予想以上に面白かった。なかなか聞けないようなエピソードもたくさんあったのでとても勉強になった。
- ・個人の論理構成力の話からポストク問題まで広く興味深く聞いた。
- ・経営・マネジメント力の自覚が必要と感じた。
- ・教育ということであれば、「いついかなる場合にもウソはだめ」以外に言うべきことはない。研究技術の伝承はまた別。金の多い少ないに関わらず、やりたい研究したらいい。
- ・修士卒業後は企業研究者になる予定だが、今後のキャリアパスを考えさせられるセッションだった。家庭の経済的余裕、雇用の先の見通しの明確さ、自分の意気込みがあればキャリアは変わっていたかもしれないと思うと共に今からでも色々やりようがあるのではないかと感じた。
- ・現場の方たちの様々な率直なお話が大変興味深かった。
- ・根本的な問題の1つは大学院教育の不備にあると思う。
- ・打ち合わせのないやりとりでおもしろかった。
- ・後半のアカデミックキャリアのテーマは具体的でとてもおもしろかった。一般化、具体化して話すことの難しさをセッションでも感じた。
- ・いろんな先生方の考え方を知れた。自分の考え方の刺激になりためになった。
- ・何が問題なのか今までになかった見方が入ってきて興味深かった。
- ・生命科学分野の抱える問題を改めて整理し考えることができた。
- ・問題がわかりやすく議論されていてよかった。
- ・イメージはあるがハッキリした言語で表現できないサイエンスの問題点を、池上さんがビシッとまとめて言語化して皆と共有できたのはよかった。こうした、文系と理系の強みを tool としての関わりはもっとした方がよい。
- ・理研等の個人を指す話題は話しにくそうだったが、ある程度幅広い話については参考になった。
- ・今回は STAP ネットがあったが次回は地味目になるだろう。
- ・STAP についてのマスコミ報道について、米国の Science Friday という（元 NPR の番組）Podcast では発表直後に科学者のゲストコメンテーターが「こういう驚くべき論文発表については、2つめの再現性をみた論文が発表されることが大事なんだ」という冷静な発言をしていた。科学研究には発表内容に誤りが含まれる（不正は許されないが）ことを報道側も是非理解し、一般に啓蒙していただきたいと思う。
- ・STAP 細胞の報道以来、サイエンスの研究のあり方を見直す必要性が出てきた。本日のセッションでは様々な立場からの意見が飛び交い、自身の考えを見直すきっかけとなった。
- ・STAP 問題を中心に外部から見た生命科学研究について論じられていたが、まだ学部生の立場でもすぐに取り入れたいと思うような内容が多くとても為になる話だった。研究に打ち込んでいるうちに文系の方や世間の感覚からどんどん離れていってしまうのはやむを得ないことだと思うが、だからこそ今日の様な機会を増やし世間の風を取り入れるべきなのだと考えた。
- ・今回 STAP 細胞についての議題だったので大変興味深かった。
- ・非常に興味深く聞かせて頂いた。STAP 騒動や不正問題等池上さんの的確な質問に深く切り込んだお話が聞けて来てよかったと思った。
- ・生命科学研究、アカデミックキャリアについて良くも悪くも現実を知ることができたと思う。社会のあり方、見方を傍観するだけではなく働きかけをしていくことの必要性を感じた。
- ・今から自分が進む分野の問題を認識できた。
- ・研究室のあり方を考えさせていただける機会となった。
- ・普段聞けない話が聞けて面白かった。
- ・キャリアパスは重要なので続けてほしい。
- ・視点が社会の流れに合っているし実際に議論するのが必要な問題で学会という場でやったのがとてもよかった。

- ・もう一度生命科学分野に関して考えることができた。多くのパネリストの意見を聞いて面白かった。
- ・今まで着目していなかった考えを聞くことができて非常に有意義な時間だった。
- ・興味深い内容だった。一般と研究者との認識の違いがあることや研究界における問題点を改めて理解することが出来た。
- ・素晴らしい刺激となった。
- ・素晴らしい企画だった。
- ・内容は暗かったけれど、立派な先生方の意見を聞ける機会は貴重だと思った。
- ・学生への教育について見直そうと思うきっかけになった。研究者の常識≠学生にとってのあたりまえに行う事。
- ・研究者たるは文理を問わず哲学がなければならない。
- ・むしろパネラーの方々の考え方を知ることができて大変ためになった。
- ・Topが責任を取るという発想が一般的には当然で、STAPの件ではそのような対応を取らなかったのが批判的になっているという考えは新鮮だった。
- ・以前から思っていた問題点について様々な意見が聞けて興味深かった。
- ・とても良かった。もっと時間をとってdiscussionしたい。もっと多くの方がdiscussionに参加できればよいと思う。
- ・本分野における様々な問題点に関する議論を深く掘り下げて非常に興味深かった。
- ・より具体的に問題点を考えること。
- ・非常に考えることが多く有意義だった。
- ・常識のある研究者を入れての議論なのでまともだった。世間の反応には嫌気がさしていたので少しすっきりした。池上さんはやはり進行上手でよかった。
- ・普段聞けない意見を聞けて非常にためになった。
- ・研究はおもしろい仕事だと思う。とは言え若い人は現実を見ている。論点がズレてるなあってのが印象。
- ・同一労働、同一賃金にすれば？キャリアは評価できるので!! 評価システムのため日本での論文雑誌の充実。それを評価対象にする。
- ・研究者や政治家だけでなく多くの日本人が目先のことにとらわれすぎているのではと思う。もっと先を見て行動することが大事なのではないか。
- ・日本は勤務地を転々とにくいというのは本当にそうだった。都心部以外が住みにくいというのもあるのではと感じた。
- ・新しい視点で理系社会を見直すことができた。
- ・日頃メディア目線の話に違和感を持っていたが、私と同じような考えが今日の話題になっていたので安心した。
- ・理系の責任論に対する理解が池上氏に伝わっていただければいいと思う。今年の実省として広まってほしい所。
- ・普段では聞けない様な（メディア等などで）セッションが聞けてとてもためになった。
- ・科学に携わる者としての視点だけではダメなんだと改めて思った。
- ・あらためていろいろな人が発言をしてコミュニケーションをとることが重要だと思った。
- ・日本の生命科学研究について、先生方のお話を聞きながらよく考える良い機会になりました。
- ・自分の立ち位置を外から見ると考えるいい機会になった。
- ・ズバリな意見に普段感じていることをこの場で共有できたのかなと思う。
- ・違う分野の人の意見を聞きながら専門的な知識・情報を互いに共有できたのでとても勉強になった。池上先生のするどい質問に対するパネラーの先生方の反応もおもしろかった。
- ・生命科学分野のキャリアについてたくさんさんの問題があるためいろいろな意見を聞けてよかった。
- ・ポストドク・ポジションの問題、不正問題、研究者として必要なマネジメントとは？など今この分野としても社会としても「学問」という閉鎖されたものを「社会」に広げていく上で必要なものを学べたと思う。
- ・今まで表面化をしようとしなかった問題を考えるきっかけと色々な考えを知ることができた。とても面白い企画だったと思う。ありがとうございました。
- ・ドクターに進学した場合の苦労については知らなかったので驚いた。
- ・学ぶ←まねぶ≠コピー。教育には時間、手間、コストがかかる。小林さんは池上さんに負けないうらい話し上手。
- ・医学教育では、医療事故や医療安全の講義があった。今回のセッションで基礎研究ではこのような教育がないことを認識した。
- ・他の立場（文系、メディア）からの意見を聞く機会でありとても面白かった。
- ・修士1年の私にとって科学の世界の全体像を把握でき、その中で浮き上がる問題を認識するよい機会であった。若手の研究者にとって科学の世界における「当たり前」を知らない問題を早期につぶすためにも是非継続してほしい。Ex) 責任問題のトークは興味深かった。
- ・このような機会に参加することができてとても良かった。ありがとうございました。
- ・分野が異なる人とのセッションは興味深いと思う。
- ・大学での講演等、学会以外でもこのようなセミナーやセッションを行ってほしいと思った。
- ・研究者が職を得て成果を出し税金を納めることが社会の為になるし、国民の税金を使って育てた研究者の社会への恩返しになると思う。
- ・分子生物学会も曲がり角に来ていると思う。生化学会等も巻き込み、企業セクターも入れて発展を考えるべき。
- ・実験や研究のうまさやマネジメントや教育のうまさは違うという事はどこでもある事なのだなと思う。
- ・自分自身がまだまだ未熟な身にも関わらず辛口を書いてしまってますすみません（アンケートなので、匿名ということをも最大限に生かしました）。分生は会員数も多く大きな力があると思う。去年の近藤滋年会長が行ったように、“本質”を得た学会へと進化して欲しいと思っている。自分も若手の1人としてがんばる。

- ・研究者にマネジメント能力は必須。
- ・文化的、社会的な背景のある人を呼んでもらえるとうれしい（ただし logical な話がいい）。
- ・“トップの責任”についてだったり“STAP あるなし”については、どの部分が考えの違いに関与しているのかという点が自分の中で明らかになって良かった。ポストドク問題は特に自分も今学生で考えている部分なので興味深かった。
- ・私もまだまだがんばらないといけない立場なので、好きなことに夢中になり、その過程でさまざまな能力を身につけていけるよう学び続けたい。
- ・研究者としてのあり方を考えさせられた。
- ・能力が必ず生かされると思うのでやはりやりたいことを続けるべし。
- ・様々な意見やコメントを聞くことができてとても参考になった。
- ・なかなかおもしろいセッションだった。
- ・なかなかスリリングな討論で面白かった。
- ・パネラーの先生方の顔が大きく映し出されたのが良かった。
- ・若手には希望をもって頑張ってもらいたい。
- ・最後の景気づけが一番良かった。
- ・今やっている研究は面白いんだよと学生に伝えていかなければならないと再認識した。池上さん、ありがとう！
- ・もっと長く聞きたかったくらい。おつかれさまでした。
- ・内容は興味深かったです。
- ・興味深かった。
- ・勉強になった。感謝している。
- ・勉強になった。
- ・よかった。司会者大事。
- ・よかった。
- ・とても参考になった。
- ・ものすごくおもしろかった。
- ・大変勉強になった。
- ・人間っていいなと思った。

【問7】 来年以降のセッションで取り上げて欲しいテーマがあれば教えてください。

- ・生命科学の将来性について（今回の総括に関わる内容で）
- ・池上彰第2弾キャリアパスを本当に考える
- ・PD 問題→キャリアパスの多様性
- ・ポストドク後のキャリアパスについて（問題点）
- ・ポストドクのキャリアパスについて
- ・ポストドクのキャリアパス、科学立国を目指すなら体系的なキャリアパスを作らないと良い人材も集まらなくなるだろう
- ・若手研究者に向けたキャリアパスと社会の問題
- ・博士取得者の日本での研究ポストについて
- ・ポストドクという高学歴フリーター増加の問題
- ・ポストドクの現実
- ・ポストドク問題（同コメント計3件）
- ・（特に学生向けの）ポストドク問題について
- ・ポストドクに行きたい人を対象に焦点を絞ったテーマ（ポストドクを繰り返す人、就職する人、助教になる人、何が違ってこのような分岐ができるのか、またPIが採用する際に見る所とかも知りたい）
- ・ポストドク etc のポジションを作るためには？
- ・Dr、PhD の問題
- ・学位取得後の進路の例など
- ・院生・博士が研究の道に進むメリット・デメリットなど
- ・講師が変われば同じテーマでも質が変わると思う
- ・同様のテーマを取り上げてもらえると、実際に自分が疑問に思っていることの解決策を見出せるような気がする
- ・同じテーマでもまだまだ議論すべきことがある
- ・今回と同じテーマは繰り返すべき
- ・同じ試みをやって欲しい
- ・基本的に同じでよい
- ・テーマを固定？
- ・元気の出るテーマなら何でも
- ・ポジティブな方向のテーマを取り上げて欲しい
- ・STAP その後
- ・STAP Cell のその後
- ・研究不正をもっと取り上げてほしい

- ・不正経理について
- ・研究費獲得の問題
- ・研究費のありかた
- ・公的研究費の平等性
- ・研究の本質と現在の研究システムの問題点（科研費、ポスト…が全て？）
- ・ブラック研究室問題
- ・ブラック研究室について
- ・現在の評価システムについて
- ・業績至上主義でよいのか？
- ・業績（論文、研究費）ばかりが問われている、オリジナリティーを育てるにはどうすれば良いか、ビッグデータ、ビッグサイエンスが国策として進められている問題
- ・国のキャリアパスに対する方策について
- ・科学政策について
- ・日本の研究支援
- ・新技術の展望、特に基礎研からの…
- ・企業 vs 象牙の塔みたいなもの、研究と応用の間
- ・工学とライフサイエンスの関わり方
- ・再生医療について
- ・がん治療について
- ・哲学、科学哲学
- ・異分野からの交流はなんでもやって下さい、法科大学院とのセッションもいいのでは？
- ・企業や異業種の方とのセッション
- ・企業とアカデミアの関係
- ・企業、ベンチャーの現実について
- ・企業の視点からみたキャリアパス
- ・企業のトップの人と研究者
- ・理系の職難について外部の意見を聞きたい
- ・アカデミアと企業の理系の人々の話し合い
- ・生命科学ベンチャーの社長をパネラーとしたセッション
- ・海外に行けない場合、どのように英語を上達させるか
- ・英語論文の執筆、論文の効果的なまとめ方
- ・研究者は海外の研究経験は必要か？
- ・new post の公募は日本と欧米でどう違うのか？
- ・海外での研究環境の現状など
- ・グローバル化、流動化など重要だと思うが、その一方で研究の深さがなくなっている or 継続性がなくなっていると思う、この2つは一部相反していると思うが、それをどう解決していくのか？
- ・研究者の流動性とは何か？
- ・研究者が政治、社会にどのように声を発していくべきか？
- ・研究をいかに社会に還元するか？
- ・社会が生命科学をどう考えているか、またどう対応していくべきか
- ・社会におけるサイエンスのあり方、ひとの財産であるところのサイエンスについて（サイエンスをもたなかったら、文化人ではないのではないかとということ）
- ・生命科学に対して「これは何の役に立つのか？」という質問が意味することを議論してほしい
- ・理系の考え方と一般の考え方のギャップを埋める方法について
- ・一般の方とのギャップについてまた取り上げてほしい、研究者が当たり前だと思っていることが、社会では当たり前でないこともまだ多くあるのではと思う
- ・何故人は人のことばかり責めるのか？他人のふりみて我がふり直そう
- ・科学と市民のつながりかた、ここのギャップは何があるのか、どんなことに市民は興味があって（こういうところに池上さんは最適だと思う）研究者はどのように科学の魅力を伝えていくべきか（市民に迎合するわけではないがお互いのギャップを埋める糸口をみつめる、海外でのアウトリサーチを参考にしたり…）
- ・文系と理系をガチバトルさせてほしい
- ・もう少し文系理系の認識差について話が聞いてみたい、理系からの「文転」的転職の事なども？
- ・本日セッションでお話のあった一般社会とのコミュニケーションエラーについて掘り下げていただきたい
- ・科学コミュニケーションについて引き続き取り上げてほしい
- ・一般の人から見た生命科学の魅力、生命科学をいかに魅力ある分野にしていけるか（学生が“研究者になりたい！”と思うような）、他分野と比べてどうか
- ・博士として研究者が若手にとって「魅力」ある職業にするにはどうすればよいのか（多くの学生にとっては、一流企業に行くことが勝ち組で、研究や博士を目指す人々がほとんどいないという問題がある）
- ・研究者として今後必要なマネジメントは？

- ・ 学生教育について今まで所属した研究室内でのことしか分からない為、他研究室で工夫している所などを取り上げたテーマで行って頂きたい
- ・ 理科系の人の教養の劣化
- ・ 研究室間（大学、企業、国や独の研究所等）の協力体制（共同研究室等）の現状と今後の課題、展望について
- ・ 教育の仕方について話題にあがったので、尾木先生に研究者育成教育の在り方をお話いただきたい
- ・ 研究者の教育
- ・ 雇用問題と教育問題、今回のパネラーはある程度成功している人達なので問題の実害を感じていない、パネラーの内容を変えるべき
- ・ 若手育成のための（テーマ）
- ・ 生命科学分野の人材をどのように育成すべきか
- ・ 大学院生の教育
- ・ 科学発展の未来等より若い研究者の育成
- ・ 大学のカリキュラムを考えよう
- ・ 大学の現状を世に知らせる
- ・ 大学院重点化やめるべきか
- ・ 大学統合
- ・ 50代の研究者による「これまでの私の研究者としての歩み」をテーマにしたシンポジウム
- ・ 中学、高校教育での生命科学の取り上げ方
- ・ リスクコミュニケーション
- ・ サイエンスコミュニケーション
- ・ 女性研究者のキャリアパス
- ・ 女性のキャリアパスについて
- ・ 女性研究者のライフイベントについて
- ・ 女性がテニユアを取るまでの社会問題（家庭か研究か）
- ・ （自分が女だからかもしれないが）添付資料の様な内容
- ・ 企業で働く研究者について、女性が研究員で働くことがやはり難しいので（企業、大学含め）そのような内容を取り上げていただきたい

【問8】 本年会での属性調査（添付資料）をご覧になった感想をお聞かせください。

- ・ 女性が少ないといって増やす必要はない。“女性だからだめ”という意識さえなければ良い。やりすぎは女性の過大評価につながり男性差別となり得る。私は女性ですが、女性だからとちやほやせず能力でみてほしい。女性を調子に乗らせないで。
- ・ 自分の周りでは女性であるからという理由で業績を出すのが難しいとか活発な活動が否定されるというようなことはないと感じているので、各男女比率の違いが環境に起因するということは今は考えていない。ワークショップを主催できるポジションにつく難しさについてはわからない。
- ・ 無理に女性比率を上げようとしなくても良いのでは。
- ・ 男女比なんて気にする必要はないと思う。
- ・ 女性が増える事に何のメリットがあるのか？
- ・ 発表したい人が発表すればいいと思う。ある特定の人達（女性をとか、この年代をとか）を増やそうとすると無理が生じてしまうのではと思う。
- ・ 無理な affirmative program につなげない様にしてほしい。
- ・ バランスのとれた研究環境というのは男女比に限ったことなのか疑問に思う。
- ・ 性別を理由に機会を失われるのは問題だが、そもそもの人数や割合が違うので差があっても特に問題はないと思う。
- ・ 女性の割合が意外と高いと感じた。無理に女性を増やそうとせず、教育や、その人の実力の向上もしっかり考えてほしい。
- ・ 「機会の平等」と「結果の平等」を混同してる印象を受ける。
- ・ 属性ではなく優秀な人が前に出られるか否かが問題。
- ・ 私は女性研究者だがすばらしい研究に性差は関係ないと思う。
- ・ 公平に選んだ結果このような比率ならば特に問題ないと思う。
- ・ 男女比＝差別に取れるような表現に見える。
- ・ 男女で分けてデータを示すことに意味はないと思う。
- ・ 調査結果が意味があるかわからない。
- ・ どの程度バランスがとれた状態を理想としているのかよくわからない。
- ・ 自発的に申し込んだ女性の採択率はいかがだったでしょうか。
- ・ 女性比を論じる前にその理由を調査すべきだし、そうでなければ改善にはつながらないのではないかな？
- ・ 女性発表者の採択率だけが上がっても女性研究者の労働に関する根本解析にはならない。何のために女性比率を上げようとしているのか？
- ・ 女性が少ないのはわかるが、数を増やすためだけでは意味がないと思う。「社会のあり方」的な事ではなく、「研究」に性差は必要ないのではないのでしょうか。
- ・ 女性の比率を数だけで判断するのはあまり正しくないと思う。ただし、女性がやっていけない研究職のあり方を問い直すのは重要だと思った。

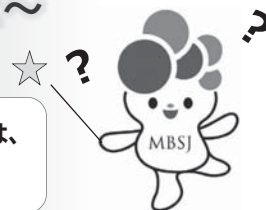
- ・一般社会の縮図だと思った。女性学会員の研究環境（保障など）まで言及があれば良かった。
- ・女性比率にこだわらなくても良いのでは。その人がその発表方法やポストに満足しているかが重要。
- ・たしかに女性の割合が少ないと思う。しかし何が原因なのか明確にはわからない。研究者として一本でやるなら、人生の全てをそれに掛ける気持ちがないとやっていけないと Boss に言われているので、Life-work バランス、ライフイベントを大切にしたいと考える女性会員が少ないのは当然のことかもしれない。
- ・ドクターコースに行く女性が少ないと思うので当然だと思う。職を得るまで異動の多いこと、研究室スタッフが少なくポストが激務であることから、家庭と研究職獲得が成立しにくいことを女性を増やしたいなら認識してほしい。
- ・女性がやはり少ないということを痛感した。ただ女性を優先的にとる（能力が同じなら）という募集が最近多いが、現在研究所にいて感じるのには特にシニアのポスト（男性の）が女性 PI に対する非難が激しい。一連の STAP 問題も、本質とずれた問題がマスコミに流れたのは小保方さんに対する周りの男性研究者のねたみをすごく感じた。上に立っても（PI になって）女性に対する目はとても厳しいと感じている。
- ・そもそも分母が少ないので。
- ・女性ががんばっていると思う。
- ・思っていたよりも女性が活躍されていると思った。
- ・女性が多くなってきていて女性がんばれる分野である。
- ・思っていたよりも女性が多い。
- ・生命科学分野は比較的女性が多い。
- ・一般演題発表に大学院生が多いことがわかった。
- ・大学院生の演者が多いという印象を受けた。
- ・学生、院生の人が意外と多いと思った。
- ・学部生が予想以上に人数がいた。
- ・女性が少ない。
- ・女性研究者が思ったよりも少なかったことが気になった。
- ・まだまだ女性が少ないと思った。
- ・まだまだ女性が少ない。
- ・女性研究員が少ない。大学院までで企業の総合職（研究分野）で働き続けたいが、研究という特性上残業も多く、家庭をもって働き続けるのは非常に難しいと自分自身感じるところがある。
- ・思ったよりも若いと思った。
- ・総数に占める女性の割合がそもそも少ないと思うので、年會での調査についてはあまり驚きは無い。参加者を研究者での男 / 女性数 etc で比を出した上で、データがあると良いかと思う。（それでも女性の割合が少なければ問題かと思う）研究というよりか、女性の働き方全体的な方にフォーカスしても結果に大差ないのでは？というか差があるのかは知りたいところ。
- ・スピーカー、オーガナイザーの女性比率は年代を反映して上がってきていると感じた。ピア（peer）の目で能力のある人を登用するようにしていけば自然とそうなると思いますが、特に男性の方にはぜひ、常に「色眼鏡でみていないか」negative にも positive にも、自身への問いかけを忘れないようにすることは必要かと思う。
- ・若手の女性研究者が増えている。今後、その研究者たちがベテランとして活躍し、オーガナイザー、スピーカーの女性率が上がっていけばよいと思う。上げていかなければいけないと思う。
- ・（ポスターの）スピーカーは院生、ポストの方々でもたくさん発表されているが、オーガナイザーはキャリアを積んでいる方がされるという印象。やはりその点で、結婚などでどうしてもブランクが空いてしまうことが多い女性は敬遠されるのではと思う。
- ・以前に比べると女性の比率が増えてきているように感じたがそれでもシンポジストやオーガナイザーのレベルで男女比に差があると思った。
- ・シンポジウムオーガナイザーの名前を冠したシンポジウムにおいて、女性のオーガナイザーが多かったのしみにしていたが、発表者はやはり片寄りが強い。
- ・学生時点での男女比が正会員とでかなり変化しているのが興味深い。ポストになる男女の意識差とかありそう。
- ・学生会員比率やポスター発表比率を見て、今後の女性研究者の活躍が期待できると思った。
- ・結果は興味深い問題は参加者側？主催側？対策が変わってくるかと。
- ・この分野に対して男女比率に着眼していたが、発表者に対して企業関係者が少ないという事が今回のディスカッションの中での問題としてあると思った。
- ・確かに会員の女性数に比べて、オーガナイザー・口頭発表者における女性比率が少ないと思った。しかし、学会において発表するのはためになることを発表できる人がすべきだと思う。そのため性を対象とした調査は目的を違えると無意味なものとなるのではないかと思う。
- ・パネリストの選別が全てを示してる。男女差別ではないが、女性研究者にそれだけの能力がある人がいないだけでは。ただ若い研究者は増えているので今後は期待できる。
- ・上の世代に女性研究者が少ないのは当たり前なので、今後を見ていかなければなんとも言えないと思った。
- ・現在のところ、中核をなす立場の女性研究者が十分に育っていないので、シンポジウムオーガナイザー（SO）&発表者における女性比率が少ないのは当然。逆にこれを過剰に問題視して、能力のない女性を無理矢理 SO にしないで下さい。十分に育ってから登用することが大事。
- ・抜本的に女性を積極的に採用するシステムをつくらないと変わらない。
- ・女性研究者の養成支援は社会的に行動、本格的にやる必要がある。
- ・女性の比率が上がれば本分野の社会的認知度も上がるだろう。

- ・この属性調査を急に渡されても、ただ情報を見せられただけで感想を述べづらい。「あー、女性数は少ないけど徐々に増えてるんだなー」くらいしか感じられない。「バランスのとれた研究環境」って何？
- ・調査の結果どうアクションするのか（しないのか）の方が気になる。
- ・調査結果の活かした方を知りたい。
- ・おもしろい。次回のテーマにしてもらいたい。原因を追求して解決方法を提案してほしい。
- ・学会に参加する人の構成がわかって良かった。
- ・気になっていたことだったので知ることができてよかった。
- ・学生会員の割合が高い貴重な学会で学生の勉強になる機会となる良い学会だと思った。
- ・全体の話だけでなく個人個人の考えも載せてほしいと思った。
- ・若い人が年を重ねると drop out していく世界だとわかった。
- ・若い視聴者がまだまだ少ないなと思った。もっと学部生も来て自分の研究に生かしたりしてほしい。
- ・生命科学は出口を意識した学問であるというのであれば、もっと企業からの参加があって良いと思う。
- ・企業参加者がもっと増えるような工夫をしてほしい。
- ・オーガナイザーの男女比は今後の推移を見ないと。
- ・女性比率は以前から大きく改善している感じはしない。年ごとの推移も知りたい。
- ・たまに行くと学会の構成がわかってよい。
- ・会員の割合（男女）と結構合っているなど。
- ・継続的变化を見てみたい。
- ・予想通りの結果。シンポジウム等での女性比率は少しずつではあるが上昇しているのでは？
- ・納得。
- ・ある程度予想通り。
- ・こんなものかなと感じた。
- ・まとめが分かりやすかった。
- ・内容は良くわかった。
- ・だから何だ。
- ・特に問題ないと思う。
- ・参考になった。
- ・よい。
- ・大変労力のかかっている力作だと思う。ただ、このような資料を一部の委員に委せてしまうのは、あまりに負担が大きいのと思うので、専門の人員を雇うか外注すべきだと思う。
- ・一部だけなぜ under represented という英語表記にしたのか？
- ・6) がおかしいグラフずれ。学会なんだからしっかりしてほしい。
- ・6) のグラフが一番下のものしかラベルされていないため見にくい。
- ・モノクロなのでグラフの色分けが見にくい。
- ・図や字が小さくて見づらい。
- ・字が小さく、わかりにくいので、工夫して下さい。
- ・図が見にくいと思う。
- ・見にくい。
- ・見づらい。何がしたいのかがわからない。
- ・白黒印刷だと見にくいと思う。まだ大きな変化、進展はないように思う。
- ・白黒でわかりにくい。
- ・カラーの印刷にしてほしい。
- ・特になし（同コメント2件）

【問9】 その他、ご自由にどうぞ。

- ・年会の2つの枠をキャリアパスで使う必要はない。
- ・前枠でセッションを入れない方がいい。
- ・昼食の時間をつぶすようなプログラムの組み方は止めて欲しい。
- ・時間帯がお昼なのでランチョンにするか時間をずらしてほしい。
- ・前後のシンポジウムとワークショップの時間を考えるとランチョンにするべき。
- ・今回の年会は discussor の導入もあり、発表者にとって有意義だった。その一方で、ワークショップでの口頭発表で「これからこんなことをやります」という意味不明、意義不明なものがあり残念に思う。
- ・人気があるためか並びが長すぎたのが気になった。
- ・会場への入場をもう少し早く始めて定刻通りにスタートすべきでは。

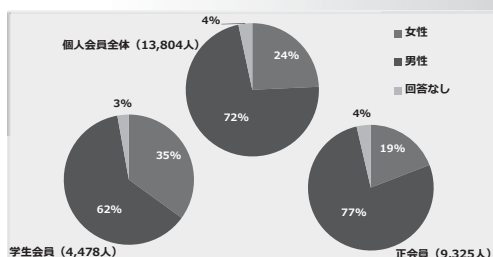
！疑問！



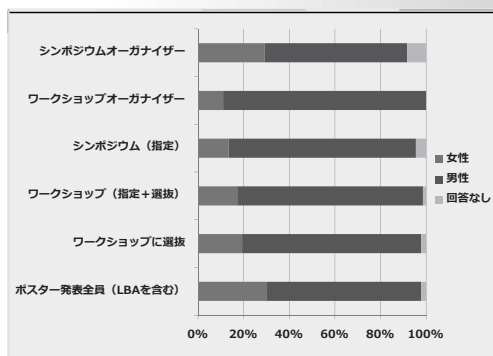
シンポジウム・ワークショップなどのオーガナイザー・口頭発表者における女性比率は、
学会員全体における女性比率と比べて低いのではないのでしょうか？

大学や研究機関での男女共同参画を推進するために、学術研究発表の場である学会の大切な役割の一つは、優れた研究に対して、性差などに関係なく、より積極的に発表し、評価される機会を創出することだと言える。上記の疑問をもとに、日本分子生物学会男女共同参画委員会（現：キャリアパス委員会）は、年会発表者が属する性（属性）について、2009年度から継続調査を行っている。

1) 日本分子生物学会会員の男女比率 (2014年10月31日 現在)



4) 各カテゴリーにおける属性分布の比較

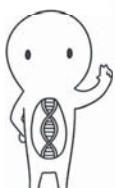


5) 発表者が決まるプロセスの違い

- シンポジウムオーガナイザー・スピーカー：
年会プログラム委員会で検討し、依頼する
- ワークショップ
オーガナイザー：自薦の中から選抜される
スピーカー：オーガナイザーが検討・依頼する
(一般演題発表者からの選抜を含む)
- 一般演題発表者：自発的な申し込み

お願い！

本当にバランスのとれた状態を実現するためには、継続的な属性調査を行い、現状把握と取り組みの方向性を検討していくことが大切です。どうぞ協力をお願いいたします。



まとめ

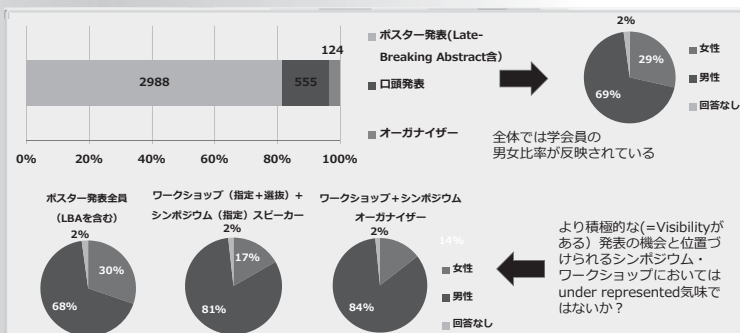
1. 一般演題発表者の男女比：学会員の男女比をほぼ反映しており、調査開始以来大きな変化はみられないが、緩やかに上昇している*。
2. ワークショップ・シンポジウムにおける男女比：スピーカー全体における女性比率は、正会員の女性比率(19%)を下回るものの、過去最高となっている。個別には、一般演題より採択されたスピーカーにおいて女性比率が最も高かった。シンポジウムオーガナイザーでは、ワークショップオーガナイザーよりも女性比率が高く、候補者における男女比の影響を検討する必要がある。
3. 発表者の年齢層分布及び職階分布：一般演題発表者→スピーカー→オーガナイザーの順に、中核をなす年齢層及び職階が上昇する。このシフトにおいて女性比率が低下する傾向がある。

*、過去データについては2013年属性調査を参照(http://www.mbsj.jp/admins/committee/careerpath/doc/2013_zokusei_chosa.pdf)

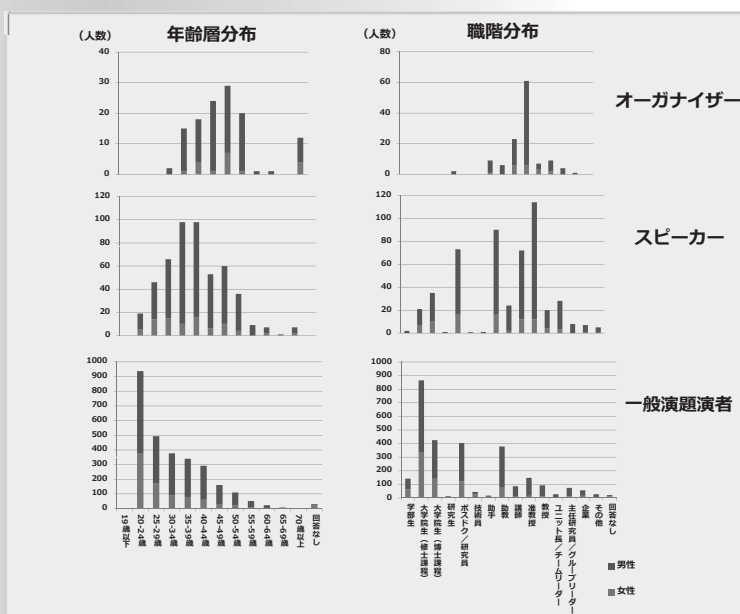
2) 2014年 第37回日本分子生物学会年会における属性調査

年会事前登録システムや学会事務局からの依頼によるアンケートを行った（回答は任意）。参加形態、性別、年齢、所属、身分について、発表者の実態データ収集に協力して頂いた。のべ発表者数3,667名、対象者3,243名）。

3) 学会発表にはどのような参加の仕方があるのか



6) 年齢・職階と発表カテゴリーとの関係は？



キャリアパス対談 第6回：斎藤通紀×石井 優

委員：斎藤通紀（京大・医）、石井 優（阪大・医）

日時：2014年9月22日(月) 18:00～20:15

場所：京都大学大学院医学研究科C棟208号室

【斎藤】今回の対談が第18期の最終回ということですので、キャリアパス委員会の活動を通じて感じたこと、そして次世代への想いを、イメージング研究の一翼を担う石井先生とお話ししてみたいと思います。石井先生、今日はよろしくお願いします。

【石井】斎藤先生、こちらこそお願いします。

昨年のキャリアパス委員会企画でも取り上げましたように、若手研究者が自身の研究テーマをどう見据えるかということは、将来のキャリアパスを考えるうえで避けては通れません。斎藤先生はどのような経緯で現在のテーマに辿り着いたのですか？

【斎藤】医学部の場合、記憶や意識のメカニズムなど、まずは神経の分野に興味を持たれる学生さんが多いと思います。実は私もそのひとりだったのですが、講義があまり面白くなかったのか、自身の頭脳が追いつかなかったのか、前者はもちろん冗談ですけども（笑）、最先端の技術を駆使して切り込むとしたらどの分野かなということを考え、興味を抱き始めていた分子生物学を勉強するようになりました。それに当時の研究環境では、神経科学の大きな進歩はもう少し先であるように感じていたこともありました。

【石井】おっしゃるとおりですね。どのような機器や試薬を使えるか、ハード面での研究環境も分野選択の幅を決める要因となっているでしょう。とは言っても、ラボを主宰するボスの影響が大きいのが現実的なところだと思います。

【斎藤】はい、私も多くの先生方から愛情豊かな指導を受けて研究というものにふれてきたわけですが、月田承一郎先生による形態学のセミナーで、美しい形態がいかに美しい機能と couple しているか、これを切り口に分子を identify していこうというスタイルとにかく感動して、心を打ち貫かれたのを今でも鮮明に覚えています。まだカタチを構成する分子が明らかにされていない時代でしたから、こんな面白いサイエンスができるんだったら将来を考えずにとりあえず研究してみたいという気持ちになり、大学院へ進学してすぐ月田研究室に入りました。

形態学的な分子生物学とはどんなものか、研究がどの



ように進められているのか、コツコツと勉強しました。ただ、当時から私がひねくれていたからかもしれませんが（笑）、恩師である月田先生と同じ路線ではなくて、やはり自分自身が生涯の研究テーマとするものを考えなければいけないと思い、同じような scope だけれども、かつ哲学的なテーマは無いかと勉強し、大学院卒業後は生殖細胞を扱うようになりました。

【石井】すごく目的論的に勉強されていたことがわかりますが、テーマを決めてからも不安や悩みは尽きないものですね。

【斎藤】そうですね。私はちょうどその時期に英国へ留学していたのですが、ゲノムインプリンティングというノーベル賞級の発見をしたアジム・スラニー教授が「生物学者にとって細胞は体細胞と生殖細胞の2種類しかない、この二つの違いは essential だよ」そんなことをおっしゃるので、ビビらずにやろうと思いましたよ（苦笑）。

石井先生がイメージング研究に至ったきっかけはどのようなものでしたか？

【石井】私が研究を始めた頃は、免疫学の世界でも分子生物学が全盛でしたが、私も天邪鬼なところがありまし





て（笑）、周囲と同じではどうも面白くないなと、人とは違った独自のニッチを見つけて研究をしたいなと思っていました。「この人は〇〇（研究）の人」と覚えてもらえるのが、研究者にとってはひとつの目標のようなところがありますよね。ですから、もともとのカメラ好きが顕微鏡への興味につながったこともあり、これを免疫研究に役立てたいと考え、実際に起こっている免疫現象を顕微鏡で観たいと思ったのが大きな動機になりました。

そして、留学先のラボで顕微鏡と格闘することになったわけですが、苦労の末、ついに骨組織内で生きた細胞の動きと場所を捉えることができたんです。最初にぼんやりと見えた微弱なイメージが、いくつかの条件を改良することで鮮明に見えるようになってきたのも、さきほどお話に出た研究環境、技術の進歩が自分に味方してくれたと思っています。

いつもご指導を頂いている岸本忠三先生も厳しい先生ですが、留学中のボスの研究指導も別次元の厳しさがありました。今となれば懐かしい思い出ですが、新しいデータが出たといってボスに持っていくと、四方八方から観察して、「ホンマっぼいけど、ホンマかどうかかわらん」と言われるんですよ（苦笑）。しかしこれがいい経験になったのは確かで、今では私もラボでやるようにしています。

【斎藤】それは研究者としてすごく大事なことですよね。常日頃からそういった習慣があると、疑わしき研究は見破られるはずですし、何度か批判されたとしても、自分のデータに自信があるなら跳ね返せばいい。

【石井】そうなんです。私たちが positive だと思って持っていくと、ボスは negative な見方をする。逆に、私たちがへこんでいるときは励ましてくれる。ボスとスタッフがいつも同じ視点ではいけないということですよね。

同じに観えそうなことでも、観る人によっては何か違いを感じたりすることがあると思います。観るには心も必要ですし、研究に携わる者としての姿勢を持ち合わせていなければいけない。だからこそ、ラボメンバーの仕事を理解できるだけの日常的なコミュニケーションが重要です。

【斎藤】特に若手のなかには、同じ実験をするのも楽しくて、しっかりしたデータを出し続けている人はたくさんいます。ラボでそういう人をパーマメントに雇えると、ものすごいパワーになるんですよね。

ですから、5年ごとに任期を区切って評価するような仕組みを血眼になってつくるのではなく、マネージメントを必要としないポジションを拡充するなど、国の施策としてそういうキャリアパスがあるべきと思います。真面目に研究しているんですから、実際に汗をかいた人が働きやすい環境が必要でしょう。面白い研究は自然と裾野が広がります。落ち着いた生命科学というか、そういうなかで仕事をしたいですし、次世代にもそういうなかで頑張っ

【石井】研究テーマひとつをとっても、いろいろと迷いながら自分の生きる道を探求してきた人の仕事って面白いんですよね。時間と研究費は有限ですから、悩んだり苦しんだりしても、何をすべきで何をすべきでないか、その両方を考えておき、自分を信じて前に進むことを楽しむ余裕も欲しいところです。

【斎藤】研究のスタイルにもよるでしょうが、やはり続けること、そういった頑固さみたいな部分は欠かせないと思います。生物学は奥が深くて複雑ですからね。一つずつデータを積み上げ、粘り強く正攻法で研究を進めていきたいです。

地道なライブ活動でファンを獲得した浜田省吾さんが、最近のライブでこんなことを言っておられたように記憶しています。「始めた頃は30歳までロックを続けられるとは思っていなかった、それが今は60歳になった」これですよ！私も、まだまだ長い道のりの先ですが、最終講義でそんなことが言えるようこれからも努力したいと思います（笑）。

【石井】拝聴できるのはだいぶ先ですが、ここでネタをバラしてよかったんでしょうか…



「女子中高生夏の学校 2015」実行委員募集のお知らせ

キャリアパス委員会 委員長 小林 武彦

「女子中高生夏の学校」(以下、「夏学」)は、女子中高生が科学技術の世界の楽しさを「体験」し、そこで活躍する女性たちと「交流」し、科学技術に関心のある仲間や先輩と「知り合う」機会として、2005年度より開催されています。

これから進路について考える中高生に、分子生物学への興味を持ってもらうことを重要と考え、本学会では第1回より毎回協力を続けてきました。

例年に引き続き、今年も「夏学」に分子生物学会のスタッフとしてご参加、ご協力くださる方を募集いたします。学生さんのご参加も大歓迎です。

どうぞよろしくお願いいたします。

女子中高生夏の学校 2015 開催概要

- ・主 催：独立行政法人 国立女性教育会館
- ・日 程：2015年8月6日(木)～8日(土) (2泊3日) (予定)
- ・会 場：独立行政法人 国立女性教育会館 (埼玉県比企郡嵐山)

〈募集内容〉「実験・実習」(参加生徒のうち10名程度対象)または「ポスターセッション(ミニ実験付)・キャリア相談ブース」をご担当くださる方。いずれも夏学2日目(予定)のプログラムです。

〈応募方法〉ご協力くださる方、ご興味のある方は、学会事務局宛 (info@mbsj.jp) にメールにて、お名前、ご所属先をご連絡ください。

〈募集締切〉2015年3月20日(金)

〈ご 参 考〉「女子中高生夏の学校 2014 参加報告」(日本分子生物学会ホームページ)

http://www.mbsj.jp/gender_eq/doc/2014_natsugaku.pdf

「女子中高生夏の学校 2014」募集要項・実施報告(国立女性教育会館ホームページ)

<http://www.nwec.jp/jp/program/invite/2014/page02.html>

新しい会員種別と休会制度に関するお知らせ(予告)

2015年2月

特定非営利活動法人 日本分子生物学会

2014年11月26日に開催されました平成27年度(第37回)通常総会において、新しい会員種別(シニア会員・次世代教育会員)ならびに休会制度の新設が承認されました。ここにその概要をお知らせいたします。

実際の運用は、本学会の法人認証・所管先である東京都の認証がおりてからの施行となります(2015年4月頃の予定)。

新しい会員種別への変更や休会のための申請書式は、2015年2月下旬から学会ホームページよりダウンロード可能とし、あらかじめ提出いただいた申請書は、施行までの間、事務局にてお預かりいたします。

手続きの詳細は学会ホームページをご覧ください。

.....

■シニア会員

以下の条件に該当する正会員は、ご本人による申請が受理された次年度よりシニア会員となります(学会の会計年度は10月1日～翌年9月30日です)。

◎シニア会員の条件

- 1) 申請の時点で65歳以上かつ会員歴通算20年以上の正会員であること
- 2) 常勤職に就いていないこと

- 3) 申請する年度までの会費が完納されていること

◎シニア会員になると

- 1) 年度会費が3,000円となります。
- 2) 年会に無料で参加できます。※
- 3) 学会誌「Genes to Cells」(オンラインジャーナル)を引き続き無料で閲覧できます。
- 4) 総会での議決権は継続されます。
- 5) 理事選挙の選挙権も継続されます。

※ 2015年9月末日までにシニア会員への申請が受理されると、次年度(2015年10月～2016年9月)よりシニア会員の年度会費が適用され、2015年12月の年会にはシニア会員として無料で参加することができます。

■次世代教育会員

次世代教育会員は、小・中・高等学校の教員またはこれに準ずる方を対象としています。高等専門学校の教員の方も対象に含まれます。

- 1) 新規入会の際には入会金1,000円を申し受けます。
- 2) 年度会費は正会員と同額(6,500円)です。
- 3) 年会に無料で参加できます。
- 4) 年会で一般演題の発表ができます。
- 5) 学会誌「Genes to Cells」(オンラインジャーナル)を無料で閲覧できます。
- 6) 総会での議決権があります。
- 7) 理事選挙の選挙権と被選挙権があります。

■休会制度

海外留学(ポスドクを含む)や出産・育児等を理由に学会活動を一定のあいだ休止される正会員・学生会員を対象として設置いたします。休会期間中は、学会年度会費が免除となります。

◎休会期間

学会の会計年度に合わせ、休会期間は年度単位(10月1日～翌年9月30日)とし、申請した次年度から最長で3年度まで適用することが可能です。

◎休会の条件

- 1) 正会員あるいは学生会員であること
- 2) 申請する年度までの会費が完納されていること

◎休会中は、以下の会員資格が停止されます。

- 1) 会報・年会プログラム集、会員メールの受取
- 2) ・正会員の場合は、総会での議決権、ならびに理事選挙の選挙権と被選挙権
・学生会員の場合は、理事選挙の選挙権
- 3) 会員区分での年会参加
- 4) 年会における一般演題の発表

休会を解消して復会する場合は、学会事務局にその旨を連絡のうえ、復会を希望する当該年度の会費を納入いただくこととなります。

特定非営利活動法人 日本分子生物学会 第19期新理事会準備会議記録

日 時：2014年9月20日(土) 14:00～16:10

場 所：フクラシア東京ステーション6階会議室

出席者：第18期

大隅典子（第18期理事長）、石野史敏（第18期庶務幹事）

第19期

荒木弘之、上村 匡、大隅良典、岡田清孝、影山龍一郎、小林武彦、小安重夫、相賀裕美子、塩見春彦、塩見美喜子、篠原 彰、白髭克彦、眞貝洋一、杉本亜砂子、田畑哲之、仲野 徹、長田重一、林 茂生、水島 昇、山本正幸、吉田 稔、吉村昭彦、渡邊嘉典 第19期理事 以上23名

委任状：一條秀憲、貝淵弘三、糸 昭苑、斎藤通紀、佐々木裕之、高橋淑子、深水昭吉 以上7名

事務局：福田 博（記録）、並木孝憲、山口恵子、金子香奈里

本会議成立について：

石野史敏庶務幹事より、本会議の開催の位置付け・成立につき、定款（抜粋）の説明がなされた。第19期理事会任期に入る前の準備会議ではあるが、その取り扱いが理事会に準ずることが確認された。19期理事23名が出席し、委任状7名を受理しており、本会議は細則第4章第8条により成立する旨、報告された。

議事録署名人の選任について：

大隅典子第18期理事長より、議事録署名人として、杉本亜砂子19期理事と水島昇19期理事が指名され、承認された。

議 事：

1. 第19期理事長（任期：2015年1月より2年間）の選出

議事に先立ち、大隅理事長より、フランクな意見交換をするために本学会に関係する一言を副えて自己紹介をしてはどうかとの提案がなされ、出席者全員より自己紹介がなされた。

第18期理事会の大きな課題として、17期より持ち越しとなった研究倫理対応があり、その活動概要につき大隅理事長より報告がなされた。出席者より、STAP細胞論文問題等への理事会对応、ならびに声明等の公式見解を学会ホームページに掲載する際のプロセスについて質問が出され、議論がなされた。

研究倫理問題だけでなく、学会のあり方、社会との関わりと情報発信の仕方、そのような様々な課題に対して、今後、理事会（理事長）はどのようなスタンス

で臨むのか、等々を考慮して理事長を選任することが重要であろうとの意見が提出された。

その後、事務局より理事長選出に関する細則（第2章第3条）の説明が行われ、再度、意見交換が行われた後、19期理事により投票が行われ、第19期理事長として荒木弘之氏が選出された。

2. 第19期副理事長の件

事務局より細則第4条（副理事長の設置）の説明がなされた。荒木第19期理事長より、設置する副理事長の人数の検討を含め少し時間をいただきたい、との申し出があり、本件については次回の定例理事会（11/24開催予定、18期19期合同理事会）の議案とし、あらためて選任手続きを取ることもとなった。

3. その他

1) 第38回年会（BMB2015）準備状況報告

影山龍一郎第38回年会長（19期理事兼）より、開催企画の概要（会期、会場、組織委員、プログラム案、会計体制（生化学会との合同開催のため、会計案分は分生6:生化4とする））の報告がなされた。

引き続き、『年会発表オンライン要旨のWeb保管・運用』について、説明がなされた。本学会は2009年より年会の印刷版要旨集を取りやめ、オンライン要旨システムに切り替えてきた。従来、このオンライン要旨の公開（システム運用）は年会終了後の翌年3月末を期限としてきたが、第38回年会（BMB2015）においては、オンライン要旨の継続的保管の観点を考慮し、年会要旨Webシステムを翌年3月末で閉鎖せず、そのまま継続的にWeb運用を行っていくことを提案したいとの説明がなされた（これにより、生化学会側のオンライン要旨公開条件とも同様となる）。

過去に採用したいくつかのシステム会社と異なり、第37回年会より採用しているアトラス社においては、年会終了後の翌年4月以降、同Webシステムを継続利用しても、システムの運用費/サーバ費用が一切かからないことを事務局にて確認している（*今後、同システムは複数年の横断検索も可能となる予定である。アクセス出来るのは年会参加登録者に限られており、従来どおりの公開制限はかかっている）。

影山年会長からの提案に対して、いくつかの意見が提出された。本件については、次回の定例理事会にて再度検討を行った上で決定することとなった。

2) 生物科学学会連合・次期代表候補者の推薦について
過日、第18期理事会にて標記候補者の推薦依頼
を行った結果、候補者2名の推薦があり、執行部による検討の結果、山本正幸会員(19期理事兼)を次期の生科連代表候補者として推薦することとした旨、大隅理事長より報告がなされた。同代表は10月11日に予定されている生科連会議で決定される予定である。

なお、現理事長、18期庶務幹事ともに都合により同日の生科連会議へ出席出来ないため、話し合いの結果、理事長代理として小林武彦19期理事が出席することとなった(小林19期理事は、現在、分

子生物学会からの派遣で、生科連ポストク問題検討委員長を担当している)。

上記、第19期新理事会準備会議の議決および確認事項を明確にするため、この議事録を作成し、議事録署名人はここに記名押印する。

2014年9月20日

特定非営利活動法人 日本分子生物学会
第19期新理事会準備会議
議長 大隅典子 (印)
議事録署名人 杉本亜砂子 (印)
議事録署名人 水島昇 (印)

特定非営利活動法人 日本分子生物学会 第18期・第19期 合同理事会記録

日時: 2014年11月24日(月) 13:30~18:30

場所: パシフィコ横浜会議センター5階「511+512」

出席者: 第18期

大隅典子(18期理事長)、小原雄治(18期副理事長)、中山敬一(18期副理事長)、阿形清和、荒木弘之[○](19期理事長、広報幹事兼)、一條秀憲[○](第39回年会長兼)、上村 匡[○](編集幹事兼)、岡田清孝[○]、後藤由季子(会計幹事兼)、塩見美喜子[○](集会幹事兼)、篠原 彰[○]、月田早智子、花岡文雄、町田泰則、山本正幸[○]、渡邊嘉典[○]、永田恭介(監事)、石野史敏(庶務幹事)、本間美和子(庶務幹事)、金井正美(広報幹事)

([○]印は19期継続理事)

第19期

影山龍一郎(第38回年会長兼)、小林武彦、小安重夫(第37回年会長兼)、塩見春彦、眞貝洋一、杉本亜砂子、田畑哲之、仲野 徹、林 茂生、深水昭吉、水島 昇、以上31名

欠席者: 第18期

五十嵐和彦、石川冬木、上田泰己、大隅良典[○]、近藤 滋、相賀裕美子[○]、佐々木裕之[○]、高橋淑子[○]、田中啓二、長田重一[○]、西田栄介、三浦正幸、山本雅之、郷 通子(監事)、武田洋幸(集会幹事)

([○]印は19期継続理事)

第19期

貝淵弘三、糸 昭苑、斎藤通紀、白髭克彦、吉田 稔、吉村昭彦、以上21名

事務局: 福田 博(記録)、並木孝憲、山口恵子、金子香奈里

本理事会成立について:

本間美和子庶務幹事より、理事27名、監事1名、幹事3名が出席し、委任状15名(理事)を受理しており、本理事会は細則第4章第8条により成立する旨、報告された。

議事録署名人の選任について:

大隅典子理事長より、議事録署名人として、影山龍一郎理事と杉本亜砂子理事が指名され、承認された。

議 事:

1. 報告事項

1) 18期執行部報告(理事長、庶務幹事、広報幹事)

①第18期活動報告(全般)

大隅理事長より、総会資料(2頁:2014年度事業報告)に基づき、第18期の活動概要全般につき報告が行われた。

(i) 18期(2013年1月)より、旧男女共同参画委員会と旧若手教育問題ワーキンググループ(研究倫理全般)の活動を発展的に統合し、キャリアパス全体を広い視野で見渡す趣旨でキャリアパス委員会を設置した。塩見美喜子キャリアパス委員長ならびに委員の方々のご尽力に感謝したい。

(ii) 第18期理事会の大きな課題として、17期より持ち越しとなった研究倫理対応(論文不正問題/東京大学)があった。昨年の神戸年会では6セッションの理事会企画フォーラムを開催し、その全文はすべて学会HPで公開しているが、東京大学からの最終報告はまだ公開されていない状況である。さらに本年はSTAP細胞論文問題が生じ、それへの学会対応もあり、当初予定していた研究倫理活動

をすべて終えるには至らなかったが、18 期理事長としては、学会としての倫理規程を整備することも検討として 19 期理事会に申し送りたいと考えている。

(iii) アドボカシーに類することでは、理事長就任時、理事会内に生命倫理について検討する作業部会を考えていたが、他の懸案事項が多く、残念ながら本件については着手することが出来なかった。

(iv) 正式には 11 月 26 日の総会に諮ることとなるが、今期、新しい会員種別（シニア会員、次世代教育会員）の設定を進めることが出来た。所管庁承認後は、ぜひ積極的に広報してほしい。

②会員現況

本間庶務幹事より、2014 年 11 月 10 日現在の会員数につき以下のとおりに報告がなされた。

名誉会員	1 名
正 会 員	9,324 名（海外在住 188 含む）
学生会員	4,444 名（海外在住 29 含む）
賛助会員	28 社
合 計	13,797 名（前年 12 月対比、－ 244）

③生物科学学会連合について

10 月 11 日、東大で開催された生科連定例会議において、次期（2015-2016）生科連代表に中野明彦氏が選出されたことが本間庶務幹事より報告された（同会議には小林武彦 19 期理事長が理事長代理で出席）。

④ホームページについて

金井正美広報幹事より学会 HP の運用状況についての報告が行われた。HP のコンセプト、2013 年 1 月から現在までの月間アクセス統計、さらに昨年 2 月から運用を開始している Facebook への記事投稿状況につき説明がなされた。

⑤キャラクターデザインについて

会報 107 号（2014.2）、学会 HP、一般のデザイン関連公募情報サイトにて学会キャラクターデザインを公募した結果、総計 259 点の応募があった。36 回年会アートを担当された組織委員にも一次審査に協力いただき、会員による Web 投票（2 次審査）を実施し、さらに SSH 生徒研究発表会（2014.8）の学会ブースにおいて高校生にも投票をしてもらい、その結果、最終的に 2 点の学会公式キャラクターを決定した旨、金井広報幹事より報告された。選考委員は次のとおりであった。

〈選考委員〉大隅理事長、荒木広報幹事、金井広報幹事、本間庶務幹事、篠原生命科学教育担当理事

2）第 37 回（2014 年）年会について

小安重夫第 37 回年会会長より、配布資料に基づき準備状況の報告がなされた。一般演題投稿数は Late-breaking を含め 2986 題、そのうち 290 演題はワークショップに採択された。事前参加登録は 4588 名となり、企業展示は 444 小間（NBRP、NBDC 含む）、バイテクセミナーは 13 枠となり、順調に準備が進んだ。

本年会は『サイエンスを楽しむ』というコンセプトのもと、皆がデータを前にとことんサイエンスの議論ができる学会を目指し、組織委員一同、準備に当たった。本年会の特色として、以下の点につき詳細説明がなされた。

- ・ポスターディスカッサー
- ・シンポジウム（プログラム委員の名前を冠したシンポジウム 12 企画、テーマ指定によるシンポジウム 6 企画）
- ・ワークショップ（公募 47 企画、テーマ指定 3 企画、指定演者の人数は 1 企画につき 3 名までを基本として、一般演題から 290 演題を採択）
- ・海外若手研究者招聘企画（応募者 44 名に対し 42 名を採択。欧米豪在住者に 15 万円アジア在住者に 10 万円を旅費補助）
- ・会期短縮（会場費値上げと消費増税による予算への影響、および参加者の便宜を考慮し、会期を 3 日間とした）
- ・制作物（システム、印刷物）
各種制作物の仕様を検討・刷新し、参加者の利便性向上に努めた。

3）第 38 回（2015 年）年会準備状況

影山龍一郎第 38 回年会会長より、2015 年の年会開催企画案につき報告がなされた。

○BMB2015（第 38 回日本分子生物学会年会・第 88 回日本生化学会大会 合同大会）

○会期：2015 年 12 月 1 日(火)～ 4 日(金)の 4 日間

○会場：神戸ポートアイランド

【組織委員】第 38 回日本分子生物学会年会

年会長	影山龍一郎
プログラム幹事	中山 和久
庶務幹事	仲野 徹
第 88 回日本生化学会大会	
会頭	遠藤斗志也
プログラム幹事	田口 英樹
庶務幹事	吉森 保

【プログラム案】

①プレナリーレクチャー

1日1名で3日間（会期4日目はプレナリーレクチャーは行わない）とし、講演者は海外の研究者2名（うち1名は女性）、国内の研究者1名の予定。

②パイオニアズレクチャー

プレナリーレクチャーと併行して開催。

③シンポジウム

プログラム委員会企画シンポジウム20テーマを開催予定。

④ワークショップ

80テーマ程度を会員から公募予定。（*後日、会場を調整し、95テーマを募集する予定）

⑤一般演題（口頭発表、ポスター発表）

ポスター発表は3日間。これまでのBMB（合同大会）では、ポスター発表日と一般口頭発表日が連動していたが、本大会ではポスター発表がない会期4日目にも一般口頭発表を行う予定。

⑥市民公開講座

年会4日目に開催予定。

⑦高校生発表

会期4日目の市民公開講座前の時間帯に開催予定。

⑧フォーラム、特別企画（創薬シンポジウム、ガチ議論、男女共同参画企画、研究倫理）についても開催する方向で検討中である。

引き続き、『年会発表オンライン要旨のWeb保管・運用』について影山年会長より説明がなされた。分子生物学会は2009年より年会の印刷版要旨集を取りやめ、オンライン要旨システムに切り替えてきた。従来、このオンライン要旨の公開（システム運用）は年会終了後の翌年3月末までを期限としてきたが、第38回年会（BMB2015）においては、オンライン要旨の今後の継続的保管の観点も考慮し、年会要旨Webシステムを翌年3月末で閉鎖せず、そのまま継続的にWeb運用を行っていくことを提案したいとの説明がなされた（これにより、生化学会側のオンライン要旨公開条件とも同条件となる）。現在使用しているシステム会社（アトラス社/第37回年会より採用）においては、年会終了後の翌4月以降、同Webシステムを継続利用してもシステム運用費・サーバ費用がかからないことが報告された。

討議の結果、本提案は承認された。

4) 第39回（2016年）年会準備状況

一條秀憲第39回年会長より、2016年の年会開

催概要につき報告がなされた。充実したプログラムとなるよう、鋭意準備中である。

○会期：2016年11月30日(水)～12月2日(金)の3日間

○会場：パシフィコ横浜

○組織委員：

年会長 一條 秀憲（東大・薬・細胞情報学）

組織委員長 三浦 正幸（東大・薬・遺伝学）

プログラム委員長 村田 茂穂（東大・薬・蛋白質代謝学）

組織委員 新井 洋由（東大・薬・衛生化学）

後藤由季子（東大・薬・分子生物学）

富田 泰輔（東大・薬・臨床薬学）

（*今後、産業界から組織委員1名が参画する予定）

5) 理事選挙結果報告

金井選挙管理委員長より第19期理事選挙結果の報告がなされた。また、2014年9月20日に東京で開催された第19期新理事会準備会議において、荒木弘之氏が第19期理事長に選出されたことが報告された。

6) 上村匡編集幹事より、配布資料に基づき、学会誌『Genes to Cells』の編集報告が行われた。

①『Genes to Cells』は、インターネットなどの新たな情報媒体の普及を受け、2015年1月からは電子版のみを刊行することとなった（印刷版の廃止）。これまで冊子版を支えていただいた購読者、執筆者の方々に御礼を申し上げたい。

②新たな投稿規定が浸透してきた効果もあり、2014年上半期で一時的に減少していた投稿数も夏には持ち直してきた。ただ、安定的な水準を維持するためにも理事各位にはself-citationなどさらなる協力をお願いしたい。幅広い分野の研究者から投稿してもらえよう、実験や理論、方法論等の論文も歓迎している旨、引き続き、周知を続けていきたい。

③論文掲載時にオープンアクセスとなる「Online Open」については、2012年9月からは総説にかぎりその費用を学会が負担している。1論文あたり3,000ドルの費用がかかるため、年間何報程度の総説を受け入れるかなどに留意しながら運用していきたい。

④冊子版は廃止となるが、2011年に一新した本誌の表紙デザインは、2015年も制作を継続する。伝統絵画のなかに生命科学の遊び心を加えたこのデザインは、丸4年となる今日でも高い評価を得ている。本年会においても、本誌の表紙ができるまでの裏話を盛り込んだタペストリー36作品（3年分）を展示するので、ぜひご覧いただきたい。

7) 各種学術賞、研究助成候補への学会推薦状況について

①一條秀憲賞推薦委員長より、2014年に本学会より推薦した各種学術賞について報告がなされた。引き続き、月田早智子研究助成選考委員長より、2014年の研究助成推薦状況と結果等について報告が行われた。

②各種学術賞への学会推薦に関する取扱いについて
一條賞推薦委員長より各種学術賞の現状の本学会推薦手続き（推薦審査の手順）について説明がなされた。現在、応募要項では自薦・他薦いずれでも可となっているが（*実際の応募は自薦が多い）、この度、委員の一人より、専門外の場合は審査が困難であるケースもあり、第3者からの推薦にルールを切り替えたらどうか（もしくは第3者からの推薦書を添付してもらうことを条件にしたらどうか）とのコメントを受けたことが報告された。対応（案）としては、以下のような方法が考えられる。

(i) 自薦・他薦いずれでも応募可能であるが、自薦の場合には、本学会理事長から各財団宛での推薦書となるので、その旨を考慮して推薦書類を作成されるよう応募要項（学会HP等）に付記する。（←書類が一人称で作成されているケースへの対応）

(ii) 自薦の場合には、第3者からの推薦書添付を応募条件とする。

(iii) 原則として、会員による他薦を応募条件とする。

自由討論に入り、出席者より以下の意見が提出された。

- ・他薦を必須とすることはかなり抑制的になるのではないか。
- ・現状でも応募数はあまり多くないので学会推薦枠を積極的に利用したほうがよい。
- ・従来の取り扱い方法のままでよい。
- ・他薦にしても、現実的には推薦書の内容は被推薦者本人が作成し、推薦者が手直ししている程度のケースが多いのではないか。

討議の結果、賞推薦委員会内規の変更に着手することには至らず、基本的に現行のままとすることとなった。本日の議論の内容は、一條委員長から次期の相賀裕美子19期賞推薦委員長に報告し、来年度からの運用ならびに応募要項の記載等について、次期委員長に検討いただき、必要があればメール審議にて再度、確認を取ることとなった（*後日、新旧委員長にてやりとりがあり、結論として、応募要項の記載文章を

変更することはせず、必要に応じて推薦書類の書き直しを依頼するなど、委員会内の運用レベルで個別対応により対処することとなった）。

8) キャリアパス委員会報告

①塩見美喜子キャリアパス委員長より、配付資料に基づき、2014年の本委員会活動についての説明がなされるとともに、本年会におけるキャリアパス委員会主催の2件のセミナーへ、理事各位の積極的な参加依頼があった。

- ・年会の演題投稿者における属性調査
- ・年会託児室利用者へのアンケート
- ・大規模アンケート回答結果の解析
- ・男女共同参画学協会連絡会への参画
- ・「女子中高生夏の学校～科学・技術者のたまごたちへ～」実験・実習参加協力

②「第3回日本分子生物学会男女共同参画実態調査報告書」（2014年11月）と要望書について

塩見キャリアパス委員長より、2012年に男女共同参画学協会連絡会が行った大規模アンケート（総回答数16,314名）から分子生物学会会員データを抽出し、本委員会において独自の分析を行い、本報告書および要望書作成に至った経緯につき報告がなされた。さらに、「男女共同参画のさらなる推進を目指して～女性研究者リーダーシップ養成と充実したライフイベント環境整備に関する要望～」(平成26年)と題する要望書については、大隅理事長と塩見委員長にて、12月2日に文科省科学技術・学術政策局の川上局長および同省生涯学習局の河村局長に提出予定である旨報告があった。

9) 研究倫理委員会報告

①小原雄治研究倫理委員長より、昨年の神戸年會時には6セッションにわたる研究倫理フォーラムを開催し、その内容は全文記録として3月にHPに掲載されたことが報告された。東京大学からの中間報告「東京大学分子細胞生物学研究所・旧加藤研究室における論文不正に関する調査報告（第一次）」は本年8月1日に発表されたところであるが、その後の進展・報告がなく、学会としてのアクションが遅れてしまっている点につきお詫びしたい。

引き続き、大隅理事長よりこの間に起きた新たな論文不正問題が社会を巻き込んだ状況になったことの概要、さらにSTAP細胞論文問題の他にも研究不正問題が発生していたこともあり、学会対応に苦慮したこと、この半年間の経緯等につき以下のように説明がなされた。8月26日付で文科省の研究不正ガイドラインが

決定され、来年4月から実施されるので、研究倫理問題は新たなフェーズに入ったように考えている。ガイドラインには研究者のみならず研究機関の取るべき責任についても明示されており、大学等ではすでにその対応についても検討されていることと思われる。学会がどのように研究の公正性を保つための活動をするのかについて、さらなる検討が重要であろうと認識しているが、18期理事会として倫理問題全体の総括を完了することは難しく、19期理事会への申し送りとさせていただきたい。

続いて、篠原彰理事（18期研究倫理委員）より、提言資料（2013年分子生物学会年会フォーラムに基づく、研究公正性を守るための提言）が配付され、詳細説明がなされた。同提言は拡大研究倫理委員会（2014.4.28と2014.6.16に開催）にて検討を重ねてきた資料ではあるが、その後、8月に文科省からガイドラインが発表されたこともあり、本提言の検討は一旦、保留扱いとなっていた。

研究倫理問題全般に関して、出席者より様々な意見が活発に提出されたが、学会として取るべき対応、情報発信の仕方、今後の活動の方向性、等々につき、出席理事による意見の一致とはならなかったが、引き続き、明日開催のフォーラムにて前向きな議論を続けることが確認された。

②学会企画 研究倫理フォーラム『生命科学研究の公正性を保つために』

本年は年會初日の夜、フォーラム枠の中で標記セッションを以下のように開催することが大隅理事長より報告され、理事各位への参加依頼があった。本フォーラムも後日、全文記録をHP公開することが了承された。

ー <11月25日 研究倫理フォーラム・プログラム> ー

1. 開催趣旨説明（大隅理事長）
2. 研究倫理問題に関するこれまでの経緯など（篠原理事）
3. 文部科学省 策定（2014.8.26）
「研究活動における不正行為への対応等に関するガイドライン」について
中村征樹氏（大阪大学 全学教育推進機構）
4. フロアからのフリーディスカッション
5. まとめ

10) 富澤基金・基金運営委員会報告

①第4回富澤基金による研究助成の審査経過・結果報告

山本正幸基金運営委員長より、富澤基金による第4回（2014年）日本分子生物学会 若手研究助成の結果につき、その概要が報告された。

(i) 第4回応募の受付期間：2014年1月10日～2月10日

(ii) 応募総数：88名（男性66名、女性22名）
*性別は名前からの推定による）

(iii) 選考：

・第1次審査：書類審査（2月21日～3月17日）

・第2次審査：9名を対象に5月10日にヒアリングを実施（*ヒアリング対象者として10名が選ばれたが、うち1名は別途研究費が得られたとの理由で辞退）

(iv) 審査経過と第4回助成対象者：

審査経過詳細については、会報108号（2014年6月号）に結果報告を掲載済みであるので参照されたい。第4回若手研究助成の助成対象者は以下4名である。

○木下奈都子（筑波大学生命環境系 / 申請時の所属は The Rockefeller University）

「環境ストレス下において負の因子として機能している長鎖非コードRNA、NPC60がどのように正の鍵因子であるbZIP型転写因子ABI5を制御しているのか、その分子機構の解明」

○濱田・川口 典子（東北大学大学院生命科学研究所）

「Btk29A 非受容体型チロシンキナーゼによる卵巣腫瘍抑制機構の解明」

○水本 公大（Stanford University / 2015年1月より The University of British Columbia に赴任予定）

「動物の動きを規定する分子基盤の解明」

○宮成悠介（自然科学研究機構 岡崎統合バイオサイエンスセンター）

「核内ゲノム動態による転写制御機構の理解」

②若手研究助成制度ならびに基金運営委員会の運営に関する規程の一部改正について

山本基金運営委員長より、第1期の委員任期が本年12月31日で任期終了となることが説明され、第2期以降の任期を含めた規程改正案が配付され、承認された。

《改正箇所は下線部分のとおり》

■若手研究助成制度ならびに基金運営委員会の運営に関する規程

3. 基金運営委員会の設置、任務、構成

- 3) 基金運営委員会委員の任期は、第2期については2015年1月1日～2017年12月31日とし、第3期については2018年1月1日～2020年12月31日とする。委員については、半数を超えない限りで再任を認める。

■富澤基金若手研究助成 募集要項

3. 研究助成金の使途、ならびに会計処理

- 2) 本助成金は直接研究費以外にも自由度をもって使用できるものとする。そのために、原則、研究助成金は一時所得扱いとし、学会が源泉徴収(50万円を超える、250万円につき10% (※+若干の復興特別所得税が加算される))を行う。

6. 研究成果および会計報告

- 1) 本助成金受領者は、助成金を受領した翌々年の5月末までに、研究成果と会計報告の概要を、「日本分子生物学会 若手研究助成 富澤純一・桂子 基金」基金運営委員会あてに提出する。様式は問わない(一時所得扱いの受領者は、会計報告に際して、領収書の提出は不要。ただし使途の一覧を提出すること。研究成果報告書には、論文発表・学会発表等の情報を含めて提出すること)。

- 2) 本助成金受領者は、1)の研究成果と会計報告を提出した年に開催される年会において、研究成果発表(会期中、専用コーナーでのポスター掲示)を行うものとする。

③第2期基金運営委員会の構成について

荒木弘之 19期理事長より、山本正幸氏に第2期基金運営委員長に留任頂きたいとの要望がなされ、さらに荒木 19期理事長、山本理事より第2期基金運営委員会構成案が配付され、原案どおりに承認された。

■第2期 富澤基金・基金運営委員会(任期2015.1.1～2017.12.31)

山本正幸(委員長/留任)、小原雄治(副委員長)、上村 匡、大杉美穂、近藤 滋(留任)、塩見美喜子(留任)、東山哲也、荒木弘之(職指定委員)

11) 第3回(2015年)国際会議支援選考結果報告

岡田清孝国際会議支援選考委員(西田栄介選考委員長代理)より、第3回目となる国際会議支援については、3件の応募があり、選考委員会における慎重な審査を経て、理事長承認のもと、以下の3会議(計700万円)が採択されたことが報告

された。

〈会議名称〉

(和文) 第8回国際分裂酵母会議

(英文) The 8th International Fission Yeast Meeting

開催責任者: 平岡 泰(大阪大学大学院生命機能研究科・教授)

会 期: 2015年6月21日(日)～26日(金)

会 場: 生田神社社会館(神戸市)

助成金額: 270万円

〈会議名称〉

(和文) トランスポゾン転移とゲノム編集技術に関する国際会議2015

(英文) Conference on Transposition and Genome Engineering 2015

開催責任者: 竹田 潤二(大阪大学大学院医学系研究科・教授)

会 期: 2015年11月17日(火)～20日(金)

会 場: 奈良県新公会堂(奈良市)

助成金額: 230万円

〈会議名称〉

(和文) がん免疫療法・マクロファージ国際会議2015

(英文) International Conference of Cancer Immunotherapy and Macrophages 2015

開催責任者: 松島 綱治(東京大学大学院医学系研究科・教授)

会 期: 2015年7月9日(木)～11日(土)

会 場: 東京大学伊藤国際学術研究センター内伊藤謝恩ホール

助成金額: 200万円

12) 生命科学教育について

篠原彰生命科学教育担当理事より高校などへの講師派遣の状況(2013年6月から現在までの実績)、および、年会における高校生発表の状況(過去2回の実績と第37回年会の発表予定)について報告がなされた。

生命科学教育事業については、夏に開催されている『SSH 生徒研究発表会』に学会ブースを出展し、高校生や引率の先生に本学会の活動内容を紹介しているが、来年の生徒研究発表会では学会キャラクターデザインを用いたグッズ配付等を行い、より積極的な広報活動に努めたい旨の説明がなされた。

13) その他

本間庶務幹事より、第37回通常総会の議事進行と報告担当者の確認、さらに第4回富澤基金贈呈式の式次第の確認がなされた。

2. 審議事項

1) 平成 26 年度 (2014 年度) 決算承認の件

後藤由季子会計幹事より平成 26 年度 (2014 年度) 会計の収支について説明がなされた。2014 年度会計は、①本部からの 36 回年会特別支援支出 (海外ポスドク旅費補助)、② 2013 神戸年会時の理事会企画フォーラム (6 セッション開催によるホテル会場費、機材費、企画準備のための拡大研究倫理委員会会議費用) の 2 点の特別予算が組み込まれ、予算そのものが 1,800 万円強の赤字編成であったが、それに対して実際の決算は、前年度繰越金 1 億 9,441 万円に対し次年度繰越金 1 億 8,676 万円となり、赤字幅を△ 764 万円に収めることが出来た。

赤字幅を抑えることが出来た理由の 1 つは、『Genes to Cells』の出版社からの総利益折半の精算収入である。精算時の為替レート (円安効果) の関係もあり、約 1,765 万円が Profit Share として入金された。昨年から会員数が減少傾向にあるが、会費収入については納入率が若干上がり、予算を上回ることが出来た。支出に関しては、科目によって多少の増減はあるものの事業費、管理費共に予算に近い額となっている。引き続き、「日本分子生物学会 若手研究助成 富澤純一・桂子 基金会計」についても報告が行われた。

本年度は赤字決算であったため、消費税、地方税は合わせて約 56 万円、税務処理については顧問契約を交わしている税務専門家の指示のもと、収益事業部分の法人確定申告を行ったことが報告された。

本決算は、10 月 24 日に宮城秀敏公認会計士の監査を受け、さらに同年 11 月 11 日に郷通子監事、永田恭介監事による会計監査を受け、配付資料のとりの監査報告書が提示された。

続いて、永田監事より 11 月 11 日に実施した監査の内容につき報告がなされた。監査報告書に記載したとおり、学会が保有しているすべての金融機関の通帳類ならびに残高証明書を監事両名にて確認した。帳簿ならびに会計証憑類も正確に整えられており、同決算を認めたことが報告された。審議の結果、本決算は理事会で承認され、第 37 回通常総会に諮られることとなった。

なお、本決算の監査報告とは別に、永田監事より次の付帯意見が提出され、19 期理事会に申し送られることとなった。

(i) 分子生物学会の会計は、従来、年会収支と GTC 発行収支による剰余金で、他の事業の経費を捻出してきた側面がある。ここ数年の年会

決算の状況をみると、実質、赤字基調であるので今後の年会収支の改善を検討すべきである。

(ii) 繰越金のうちの何割かは、長期国債などの運用も含めた効率的な方法を取られたらどうかとの意見が提出され、事務局にて会計事務所の専門家に助言を求めることとなった。

(iii) 事業全般について、理事会は、是非、一會員の視点に立った学会運営・事業企画を心がけてほしい。

2) 平成 27 年度 (2015 年度) 活動予算書承認の件

後藤会計幹事より平成 27 年度 (2015 年度) から予算資料に大幅な変更があることが報告された。

分子生物学会は平成 19 年 (2007 年) 6 月に所轄庁である東京都より、特定非営利活動法人の認証決定を受けている。特定非営利活動法人いわゆる NPO 法人であるが、会計処理の方法としては、一般的な非営利法人つまり公益法人会計基準を基本として行ってきた。これは NPO 法人には、従来、NPO 法人に限定された専用会計基準がなかったためであり、所轄庁には、毎年 (事業年度終了後 3 ヶ月以内、つまり分子生物学会の場合は毎年 12 月末までに)、事業報告書と一緒に、公益法人会計ルールに基づく会計報告書を提出することで滞りない事業報告としてきた旨、事務局より報告を受けている。

その後、平成 22 年 (2010 年) に、NPO 法人会計基準協議会より「NPO 法人会計基準 (2010 年 7 月 20 日 2011 年 11 月 20 日一部改正)」が示され、順次、内閣府と全国の所轄庁 (都道府県) へ提出すべき決算 (活動計算書)・予算については、この形式に切り替えていくことが決まっている。NPO 会計方式に切り替えるに当たり、執行猶予の数年があったが、このたび、本学会顧問の会計事務所より、次年度予算より NPO 法人会計基準に切り替えるべき時期に来ているとの指導を受け、27 年度予算より新しい会計書式に切り替えることとなった。

<主な変更点>

- ・従来の、収入の部⇒経常収益
- ・従来の、支出の部⇒経常費用とし、大きく、1 事業費と 2 管理費に分ける。
- ・事務局職員の人件費は、その関わる業務によって、上記 1、2 に案分する。
- ・新会計方式では個々の業務の収支が分からないので、「活動予算 事業の内訳」を作成し、補足資料とする。
- ・年会収支については、年会科目でひとくくりに

するのではなく、事業費内訳の各科目に振り分ける。

- ・各経費の計上については、学会固有の科目名称の設置・科目振り分けをせず、NPO 法人会計基準に基づく形で該当科目から支出する。

新しい予算書は一般会員にはやや分かりにくい書式であるので、今回は参考資料として、旧書式による予算資料も作成・掲示させていただくこととした。

本年4月からの消費税値上げに伴い各種経費も増額になっており、各支出額を考慮し、約531万円赤字の固めの予算を組んでいる旨の説明がなされた。ただし、全体収支で黒字が出ない場合は租税公課が減ること、37回年会の残額精算（剰余金）を考慮していないので、年会で多少黒字が出た場合は、全体収支はプラス・マイナス0になる可能性があると考えている。

27年度活動予算書についての詳細な説明が行われ、審議の結果、同予算書は理事会で承認され、第37回通常総会に諮られることとなった。

3) 定款および細則改正の件

大隅理事長より、本件は2014年4月に18期理事会持ち回り審議にてすでに承認されているが、本理事会において総会に諮るべき、その定款条文の文面について最終確認をお願いしたい旨説明がなされた。37回通常総会に諮る定款変更の内容は以下のとおりである。

①シニア会員の新設

定年を迎えられた65歳以上の正会員（会員歴通算20年以上）で常勤職に就かれていない方を対象に、年度会費を学生会員と同額（3,000円）とし、さらに年会には無料で参加できるといった新しい会員種別『シニア会員』を新設する。運用は新年度からの適用を予定。

【申請手続と前提条件】

- 1) 申請の時点で65歳以上かつ会員歴通算20年以上の正会員であること
- 2) 常勤職に就いていないこと
- 3) 申請する年度までの会費が完納されていること

（シニア会員申請書は、学会HPに設置予定）

【内容】

- 1) 年度会費が3,000円となる。
- 2) 年会に無料で参加できる。
- 3) 学会誌「Genes to Cells」電子版を、最新号から引き続き無料で閲覧できる。
- 4) 総会での議決権がある。

5) 理事選挙の選挙権がある。

②次世代教育会員の新設

小・中・高等学校の教員またはこれに準ずる方を対象とした『次世代教育会員』を新設する。同会員は、入会金・年度会費は正会員と同額であるが、年会に無料で参加できる。高等専門学校の教員の方も対象に含まれる。

- 1) 新規入会の際には入会金1,000円を申し受ける。
- 2) 年度会費は正会員と同額（6,500円）。
- 3) 年会に無料で参加できる。
- 4) 年会で一般演題の発表ができる。
- 5) 学会誌「Genes to Cells」電子版を、最新号から引き続き無料で閲覧できる。
- 6) 総会での議決権がある。
- 7) 理事選挙の選挙権と被選挙権がある。

（正会員からの会員種別変更については、次世代教育会員変更届を学会HPに設置予定）

③休会制度について

本学会には今まで休会の制度がなく、海外留学の際は海外在住先に刊行物等を送付し会員を継続いただくか、もしくは一旦退会手続きをしてもらい帰国後に再入会いただく、といった対応を取ってきた。今後は海外留学のみならず、出産・育児等を理由に学会活動を一定のあいだ休止される会員をも考慮した休会制度（休会期間中の会費の免除）を総会に諮る予定である。

【内容】

海外留学（ポスドクを含む）や出産・育児等を理由に、学会活動を一定のあいだ休止される正会員・学生会員を対象とした休会制度の設置。休会期間中は学会年度会費が免除となる。

【休会期間】

学会の会計年度に合わせ、休会期間は年度単位（10月1日～翌年9月30日）とし、申請した次年度から最長で3年度まで適用することが可能。

【申請手続と前提条件】

- 1) 正会員あるいは学生会員であること
- 2) 申請する年度までの会費が完納されていること

（休会届は学会HPに設置予定）

【留意点】

・休会中は以下の会員資格が停止される。

- 1) 会報・年会プログラム集、会員メールの受取
- 2) 正会員の場合は、総会での議決権

- 3) 理事選挙の選挙権と被選挙権
- 4) 会員区分での年会参加
- 5) 年会における一般演題の発表
- ・休会を解消して復会する場合は、学会事務局にその旨を連絡のうえ、当該年度の会費を納入いただく。年度の途中で復会する場合も当該年度の会費を納めていただく必要がある。

④定款変更 第11条 除名について

今後、重大な事由により会員の除名を行うことが生じた場合に備え、以下の定款変更を総会に諮る予定である。

《特定非営利活動法人 日本分子生物学会 定款》

第11条（除名）

※下線部分が変更点。

□ - 現行 -

- 第11条 会員が次の各号の一に該当する場合には、総会の議決により、これを除名することができる。
- (1) この定款に違反したとき。
 - (2) この法人の名誉を傷つけ、又は目

的に反する行為をしたとき。

2 前項の規定により会員を除名しようとする場合は、議決の前に当該会員に弁明の機会を与えなければならない。

□ - 変更案 -

第11条 会員が次の各号の一に該当する場合には、理事会の議決により、これを除名することができる。

以下同文

⑤ NPO 法改正に伴う条文の一部文言の修正について

法律改正に伴う一部文言の修正箇所は、新旧対照表（下線部分）を参照されたい。

<留意事項>

（※ 37 回総会で承認された後、本会の法人所管である東京都（都知事）の認証を得るのに約 4 ヶ月を要する。よって、正式な定款変更ならびに新しい制度の運用開始は 2015 年 4 月頃を予定している。定款変更の文言等を含め、専門家（行政書士）の事前確認を取っている）

■以下が定款と細則の新旧対照表である。

**特定非営利活動法人日本分子生物学会 定款
新旧対照表**

(変更後の案)	(現行の定款)
(種 別) 第6条 この法人の会員は、次の<u>6種</u>とし、<u>正会員、名誉会員、シニア会員及び次世代教育会員</u>をもって特定非営利活動促進法（以下「法」という。）上の社員とする。 (1) 正 会 員 この法人の目的に賛同して入会した個人 (2) 名誉会員 この法人に特に功労のあった者の中から、総会の承認を受けた個人 (3) シニア会員 <u>65歳以上の正会員（会員歴通算20年以上）で常勤職に就いていない個人</u> (4) <u>次世代教育会員</u> この法人の目的に賛同して入会した小・中・高等学校の教員又はこれに準ずる個人 (5) 学生会員 この法人の目的に賛同して入会した学生 (6) 賛助会員 この法人の目的に賛同し賛助するために入会した個人及び団体	(種 別) 第6条 この法人の会員は、次の4種とし、正会員及び名誉会員をもって特定非営利活動促進法（以下「法」という。）上の社員とする。 (1) 正 会 員 この法人の目的に賛同して入会した個人 (2) 名誉会員 この法人に特に功労のあった者の中から、総会の承認を受けた個人 (3) 学生会員 この法人の目的に賛同して入会した学生 (4) 賛助会員 この法人の目的に賛同し賛助するために入会した個人及び団体
(入 会) 第7条 <u>名誉会員及びシニア会員</u>以外の会員の入会について、特に条件は定めない。 2 名誉会員以外の会員として入会しようとする者は、理事長が別に定める入会申込書により、理事長に申し込むものとする。 3 理事長は、前項の申し込みがあったとき、正当な理由がない限り、入会を認めなければならない。 4 理事長は、第2項の者の入会を認めないときは、速やかに、理由を付した書面をもって本人にその旨を通知しなければならない。 5 名誉会員は、理事会の推薦と総会の承認を経て、入会する。	(入 会) 第7条 名誉会員以外の会員の入会について、特に条件は定めない。 2 名誉会員以外の会員として入会しようとするものは、理事長が別に定める入会申込書により、理事長に申し込むものとする。 3 理事長は、前項の申し込みがあったとき、正当な理由がない限り、入会を認めなければならない。 4 理事長は、第2項のものの入会を認めないときは、速やかに、理由を付した書面をもって本人にその旨を通知しなければならない。 5 名誉会員は、理事会の推薦と総会の承認を経て、入会する。
(休会及び退会) 第10条 <u>正会員及び学生会員は、理事長が別に定める休会届を理事長に提出して、申請した次年度から最長で3年度まで休会することができる。</u> 2 <u>会員は、理事長が別に定める退会届を理事長に提出して、任意に退会することができる。</u>	(退 会) 第10条 会員は、理事長が別に定める退会届を理事長に提出して、任意に退会することができる。
(除 名) 第11条 会員が次の各号の一に該当する場合には、<u>理事会</u>の議決により、これを除名することができる。 (1) この定款に違反したとき。 (2) この法人の名誉を傷つけ、又は目的に反する行為をしたとき。 2 前項の規定により会員を除名しようとする場合は、議決の前に当該会員に弁明の機会を与えなければならない。	(除 名) 第11条 会員が次の各号の一に該当する場合には、総会の議決により、これを除名することができる。 (1) この定款に違反したとき。 (2) この法人の名誉を傷つけ、又は目的に反する行為をしたとき。 2 前項の規定により会員を除名しようとする場合は、議決の前に当該会員に弁明の機会を与えなければならない。
(選任等) 第14条 理事は、<u>正会員及び次世代教育会員</u>の中から、<u>正会員、名誉会員、シニア会員、次世代教育会員</u>及び学生会員の投票により選任される。 2 理事長及び副理事長は、理事の互選とする。 3 役員のうちには、それぞれの役員について、その配偶者若しくは三親等以内の親族が1人を超えて含まれ、又は当該役員並びにその配偶者及び三親等以内の親族が役員の総数の3分の1を超えて含まれることになってはならない。 4 法第20条各号のいずれかに該当する者は、この法人の役員になることができない。 5 監事は、正会員の中から、総会において選任する。 6 監事は、理事又はこの法人の職員を兼ねてはならない。	(選任等) 第14条 理事は、正会員の中から、正会員、名誉会員及び学生会員の投票により選任される。 2 理事長及び副理事長は、理事の互選とする。 3 役員のうちには、それぞれの役員について、その配偶者若しくは三親等以内の親族が1人を超えて含まれ、又は当該役員並びにその配偶者及び三親等以内の親族が役員の総数の3分の1を超えて含まれることになってはならない。 4 法第20条各号のいずれかに該当する者は、この法人の役員になることができない。 5 監事は、正会員の中から、総会において選任する。 6 監事は、理事又はこの法人の職員を兼ねてはならない。

(職務) 第15条 理事長は、この法人を代表し、その業務を総理する。 2 理事長以外の理事は、<u>法人の業務について、この法人を代表しない。</u> 3 副理事長は、理事長を補佐し、理事長に事故があるとき又は理事長が欠けたときは、理事長があらかじめ指名した順序によって、その職務を代行する。 4 理事は、理事会を構成し、この定款の定め及び総会又は理事会の議決に基づき、この法人の業務を執行する。 5 監事は、次に掲げる職務を行う。 (1) 理事の業務執行の状況を監査すること。 (2) この法人の財産の状況を監査すること。 (3) 前2号の規定による監査の結果、この法人の業務又は財産に関し不正の行為又は法令若しくは定款に違反する重大な事実があることを発見した場合には、これを総会又は所轄庁に報告すること。 (4) 前号の報告をするために必要がある場合には、総会を招集すること。 (5) 理事の業務執行の状況又はこの法人の財産の状況について、理事に意見を述べること。	(職務) 第15条 理事長は、この法人を代表し、その業務を総理する。 2 副理事長は、理事長を補佐し、理事長に事故があるとき又は理事長が欠けたときは、理事長があらかじめ指名した順序によって、その職務を代行する。 3 理事は、理事会を構成し、この定款の定め及び総会又は理事会の議決に基づき、この法人の業務を執行する。 4 監事は、次に掲げる職務を行う。 (1) 理事の業務執行の状況を監査すること。 (2) この法人の財産の状況を監査すること。 (3) 前2号の規定による監査の結果、この法人の業務又は財産に関し不正の行為又は法令若しくは定款に違反する重大な事実があることを発見した場合には、これを総会又は所轄庁に報告すること。 (4) 前号の報告をするために必要がある場合には、総会を招集すること。 (5) 理事の業務執行の状況又はこの法人の財産の状況について、理事に意見を述べること。
(総会の構成) 第21条 総会は、<u>正会員、名誉会員、シニア会員及び次世代教育会員</u>をもって構成する。	(総会の構成) 第21条 総会は、正会員及び名誉会員をもって構成する。
(総会の権能) 第22条 総会は、以下の事項について議決する。 (1) 定款の変更 (2) 解散及び合併 (3) 事業報告及び決算 (4) 事業計画及び予算並びにその変更 (5) 監事の選任又は解任、職務 (6) 入会金及び会費の額 (7) 解散における残余財産の帰属 (8) その他運営に関する重要事項	(総会の権能) 第22条 総会は、以下の事項について議決する。 (1) 定款の変更 (2) 解散及び合併 (3) 会員の除名 (4) 事業報告及び収支決算 (5) 事業計画及び収支予算並びにその変更 (6) 監事の選任又は解任、職務 (7) 入会金及び会費の額 (8) 解散における残余財産の帰属 (9) その他運営に関する重要事項
(総会の開催) 第23条 通常総会は、毎年1回開催する。 2 臨時総会は、次に掲げる場合に開催する。 (1) 理事会が必要と認め、招集の請求をしたとき。 (2) 正会員、名誉会員、シニア会員及び次世代教育会員総数の5分の1以上から会議の目的を記載した書面により招集の請求があったとき。 (3) 監事が第15条第5項第4号の規定に基づいて招集するとき。	(総会の開催) 第23条 通常総会は、毎年1回開催する。 2 臨時総会は、次に掲げる場合に開催する。 (1) 理事会が必要と認め、招集の請求をしたとき。 (2) 正会員及び名誉会員総数の5分の1以上から会議の目的を記載した書面により招集の請求があったとき。 (3) 監事が第15条第4項第4号の規定に基づいて招集するとき。
(総会の定足数) 第26条 総会は、<u>正会員、名誉会員、シニア会員及び次世代教育会員総数の2分の1以上の出席がなければ開会することはできない。</u>	(総会の定足数) 第26条 総会は、正会員及び名誉会員総数の2分の1以上の出席がなければ開会することはできない。
(総会の議決) 第27条 総会における議決事項は、第24条第3項の規定によってあらかじめ通知した事項とする。 2 総会の議事は、この定款に規定するもののほか、出席した<u>正会員、名誉会員、シニア会員及び次世代教育会員</u>の過半数をもって決し、可否同数のときは、議長の決するところによる。	(総会の議決) 第27条 総会における議決事項は、第24条第3項の規定によってあらかじめ通知した事項とする。 2 総会の議事は、この定款に規定するもののほか、出席した正会員及び名誉会員の過半数をもって決し、可否同数のときは、議長の決するところによる。
(総会での表決権等) 第28条 各<u>正会員、名誉会員、シニア会員及び次世代教育会員</u>の表決権は平等なものとする。 2 やむを得ない理由により総会に出席できない<u>正会員、名誉会員、シニア会員及び次世代教育会員</u>は、あらかじめ通知された事項について、書面若しくは電磁的方法をもって表決し、又は他の<u>正会員、名誉会員、シニア会員及び次世代教育会員</u>を代理人として表決を委任することができる。 3 前項の規定により表決した<u>正会員、名誉会員、シニア会員及び次世代教育会員</u>は、前2条及び次条第1項の規定の適用については出席したものとみなす。 4 総会の議決について、特別の利害関係を有する<u>正会員、名誉会員、シニア会員及び次世代教育会員</u>は、その議事の議決に加わることができない。	(総会での表決権等) 第28条 各正会員及び名誉会員の表決権は平等なものとする。 2 やむを得ない理由により総会に出席できない正会員及び名誉会員は、あらかじめ通知された事項について、書面若しくは電磁的方法をもって表決し、又は他の正会員及び名誉会員を代理人として表決を委任することができる。 3 前項の規定により表決した正会員及び名誉会員は、前2条及び次条第1項の規定の適用については出席したものとみなす。 4 総会の議決について、特別の利害関係を有する正会員及び名誉会員は、その議事の議決に加わることができない。

(総会の議事録) 第29条 総会の議事については、次の事項を記載した議事録を作成しなければならない。 (1) 日時及び場所 (2) 正会員、名誉会員、シニア会員及び次世代教育会員総数及び出席者数（書面若しくは電磁的方法による表決者又は表決委任者がある場合にあっては、その数を付記すること。） (3) 審議事項 (4) 議事の経過の概要及び議決の結果 (5) 議事録署名人の選任に関する事項 2 議事録には、議長及び総会において選任された議事録署名人2人が、記名押印又は署名しなければならない。	(総会の議事録) 第29条 総会の議事については、次の事項を記載した議事録を作成しなければならない。 (1) 日時及び場所 (2) 正会員及び名誉会員総数及び出席者数（書面若しくは電磁的方法による表決者又は表決委任者がある場合にあっては、その数を付記すること。） (3) 審議事項 (4) 議事の経過の概要及び議決の結果 (5) 議事録署名人の選任に関する事項 2 議事録には、議長及び総会において選任された議事録署名人2人が、記名押印又は署名しなければならない。
(理事会の招集) 第33条 理事会は、理事長が招集する。 2 理事長は、前条第2号の規定による請求があったときは、その日から30日以内に理事会を招集しなければならない。 3 理事会を招集するときは、会議の日時、場所、目的及び審議事項を記載した書面又は電磁的方法により、開催の日の少なくとも5日前までに通知しなければならない。	(理事会の招集) 第33条 理事会は、理事長が招集する。 2 理事長は、前条第2号の規定による請求があったときは、その日から30日以内に理事会を招集しなければならない。 3 理事会を招集するときは、会議の日時、場所、目的及び審議事項を記載した書面により、開催の日の少なくとも5日前までに通知しなければならない。
(理事会での表決権等) 第36条 各理事の表決権は、平等なものとする。 2 やむを得ない理由のため理事会に出席できない理事は、あらかじめ通知された事項について書面又は電磁的方法をもって表決することができる。 3 前項の規定により表決した理事は、前条及び次条第1項の適用については、理事会に出席したものとみなす。 4 理事会の議決について、特別の利害関係を有する理事は、その議事の議決に加わることができない。	(理事会での表決権等) 第36条 各理事の表決権は、平等なものとする。 2 やむを得ない理由のため理事会に出席できない理事は、あらかじめ通知された事項について書面をもって表決することができる。 3 前項の規定により表決した理事は、前条及び次条第1項の適用については、理事会に出席したものとみなす。 4 理事会の議決について、特別の利害関係を有する理事は、その議事の議決に加わることができない。
(理事会の議事録) 第37条 理事会の議事については、次の事項を記載した議事録を作成しなければならない。 (1) 日時及び場所 (2) 理事総数、出席者数及び出席者氏名（書面又は電磁的方法による表決者にあつては、その旨を付記すること。） (3) 審議事項 (4) 議事の経過の概要及び議決の結果 (5) 議事録署名人の選任に関する事項 2 議事録には、議長及びその会議において選任された議事録署名人2人が記名押印又は署名しなければならない。	(理事会の議事録) 第37条 理事会の議事については、次の事項を記載した議事録を作成しなければならない。 (1) 日時及び場所 (2) 理事総数、出席者数及び出席者氏名（書面表決者にあつては、その旨を付記すること。） (3) 審議事項 (4) 議事の経過の概要及び議決の結果 (5) 議事録署名人の選任に関する事項 2 議事録には、議長及びその会議において選任された議事録署名人2人が記名押印又は署名しなければならない。
(構成) 第38条 この法人の資産は、次の各号に掲げるものをもって構成する。 (1) 設立当初の財産目録に記載された資産 (2) 入会金及び会費 (3) 寄付金品 (4) 財産から生じる収益 (5) 事業に伴う収益 (6) その他の収益	(構成) 第38条 この法人の資産は、次の各号に掲げるものをもって構成する。 (1) 設立当初の財産目録に記載された資産 (2) 入会金及び会費 (3) 寄付金品 (4) 財産から生じる収入 (5) 事業に伴う収入 (6) その他の収入
(事業報告及び決算) 第44条 この法人の事業報告書、財産目録、貸借対照表及び活動計算書等決算に関する書類は、毎事業年度終了後、速やかに、理事長が作成し、監事の監査を受け、総会の議決を経なければならない。 2 決算上剰余金を生じたときは、次事業年度に繰り越すものとする。	(事業報告及び決算) 第44条 この法人の事業報告書、財産目録、貸借対照表及び収支計算書等決算に関する書類は、毎事業年度終了後、速やかに、理事長が作成し、監事の監査を受け、総会の議決を経なければならない。 2 決算上剰余金を生じたときは、次事業年度に繰り越すものとする。
(事業計画及び予算) 第45条 この法人の事業計画及びこれに伴う予算は、毎事業年度ごとに理事長が作成し、総会の議決を経なければならない。	(事業計画及び予算) 第45条 この法人の事業計画及びこれに伴う収支予算は、毎事業年度ごとに理事長が作成し、総会の議決を経なければならない。
(削除) (*NPO法人会計基準では予備費が設置できません)	(予備費) 第47条 予算超過又は予算外の支出に充てるため、予算中に予備費を設けることができる。 2 予備費を使用するときは、理事会の議決を経なければならない。
(臨機の措置) 第47条 予算をもって定めるもののほか、借入金の借入れその他新たな義務の負担をし、又は権利の放棄をしようとするときは、理事会の議決を経なければならない。	(臨機の措置) 第48条 予算をもって定めるもののほか、借入金の借入れその他新たな義務の負担をし、又は権利の放棄をしようとするときは、理事会の議決を経なければならない。

(定款の変更) 第48条 この法人が定款を変更しようとするときは、総会に出席した正会員、名誉会員、シニア会員及び次世代教育会員の4分の3以上の多数による議決を経、かつ、法第25条第3項に規定する事項については、所轄庁の認証を得なければならない。 2 この法人が定款を変更(前項の規定により所轄庁の認証を得なければならない事項を除く。)したときは、所轄庁に届け出なければならない。	(定款の変更) 第49条 この法人が定款を変更しようとするときは、総会に出席した正会員及び名誉会員の4分の3以上の多数による議決を経、かつ、法第25条第3項に規定する軽微な事項を除いて所轄庁の認証を得なければならない。
(解散) 第49条 この法人は、次に掲げる事由により解散する。 (1) 総会の決議 (2) 目的とする特定非営利活動に係る事業の成功の不能 (3) 正会員、名誉会員、シニア会員及び次世代教育会員の欠亡 (4) 合併 (5) 破産手続開始の決定 (6) 所轄庁による設立の認証の取消し 2 前項第1号の事由によりこの法人が解散するときは、正会員、名誉会員、シニア会員及び次世代教育会員総数の4分の3以上の議決を経なければならない。 3 第1項第2号の事由により解散するときは、所轄庁の認定を得なければならない。	(解散) 第50条 この法人は、次に掲げる事由により解散する。 (1) 総会の決議 (2) 目的とする特定非営利活動に係る事業の成功の不能 (3) 正会員及び名誉会員の欠亡 (4) 合併 (5) 破産手続開始の決定 (6) 所轄庁による設立の認証の取消し 2 前項第1号の事由によりこの法人が解散するときは、正会員及び名誉会員総数の4分の3以上の承諾を経なければならない。 3 第1項第2号の事由により解散するときは、所轄庁の認定を得なければならない。
(残余財産の帰属) 第50条 この法人が解散(合併又は破産手続開始の決定による解散を除く。)したときに残存する財産は、法第11条第3項に規定する法人のうちから、総会において議決したものに譲渡するものとする。	(残余財産の帰属) 第51条 この法人が解散(合併又は破産手続開始の決定による解散を除く。)したときに残存する財産は、法第11条第3項に規定する法人のうちから、総会において議決したものに譲渡するものとする。
(合併) 第51条 この法人が合併しようとするときは、総会において正会員、名誉会員、シニア会員及び次世代教育会員総数の4分の3以上の議決を経、かつ、所轄庁の認証を得なければならない。	(合併) 第52条 この法人が合併しようとするときは、総会において正会員及び名誉会員総数の4分の3以上の議決を経、かつ、所轄庁の認証を得なければならない。
(公告の方法) 第52条 この法人の公告は、この法人の掲示場に掲示するとともに、官報に掲載して行う。	(公告の方法) 第53条 この法人の公告は、この法人の掲示場に掲示するとともに、官報に掲載して行う。
(事務局の設置) 第53条 この法人に、この法人の事務を処理するため、事務局を設置する。 2 事務局には、事務局長及び必要な職員を置く。	(事務局の設置) 第54条 この法人に、この法人の事務を処理するため、事務局を設置する。 2 事務局には、事務局長及び必要な職員を置く。
(職員の任免) 第54条 事務局長及び職員の任免は、理事長が行う。	(職員の任免) 第55条 事務局長及び職員の任免は、理事長が行う。
(組織及び運営) 第55条 事務局の組織及び運営に関し必要な事項は、理事会の議決を経て、理事長が別に定める。	(組織及び運営) 第56条 事務局の組織及び運営に関し必要な事項は、理事会の議決を経て、理事長が別に定める。
(細則) 第56条 この定款の施行について必要な細則は、理事会の議決を経て、理事長がこれを定める。	(細則) 第57条 この定款の施行について必要な細則は、理事会の議決を経て、理事長がこれを定める。
附 則 この定款は、平成26年11月26日から施行する。	
附 則 この定款は、東京都知事の認証のあった日(平成 年 月 日)から施行する。	

特定非営利活動法人日本分子生物学会 細則 新旧対照表

(変更後の案)	(現行の細則)
第14条 この法人の正会員、名誉会員、シニア会員、次世代教育会員並びに学生会員は、GENES TO CELLSのオンライン版を無償で購読できるものとする。	第14条 この法人の正会員、名誉会員並びに学生会員は、GENES TO CELLSのオンライン版を無償で購読できるものとする。
附 則 付記5. 平成26年11月24日、理事会に於いて第14条を改正	

審議の結果、定款変更の条文は理事会で確認・承認され、第37回通常総会に諮られることとなった。細則については本理事会に於いて承認された（定款が変更された時点で、細則は運用される）。

4) 第19期副理事長の選任

本間庶務幹事より副理事長選出に関する細則の説明がなされ、その後、第19期出席理事により投票が行われ、副理事長として、佐々木裕之氏と塩見美喜子氏が選任された。

5) 第19期監事の選任

荒木第19期理事長から、第19期の監事として辻本賀英会員、花岡文雄会員が推薦され、承認された。監事については第37回通常総会で承認を得た後選任される。

6) 第19期理事会の体制、各幹事、各種委員会委員長・委員の委嘱について

荒木第19期理事長より、役員・幹事・各委員会名簿（案）が配付され、調整中であるキャリアパス委員会構成を除いて、原案どおりに承認された。19期のキャリアパス委員会は12月中には決定できる予定である。将来計画検討委員会については、今後しかるべき時期に立ち上げていく予定であることが説明された。

7) 第18期から第19期への申し送り（全般）について

出席者による自由討論に入り、種々の意見が提出された。

・女性理事枠（細則第2章 役員の選出5）時限特別措置）の期限が切れるので、次回選挙の前

に今後の方針を決定する必要がある。定数（女性理事枠の%）を上げる、特別措置を撤廃したほうがよい等、様々な意見が提出された。

- ・学会事業の個々の収支について、それぞれ点検が必要な時期に来ているのではないだろうか。将来計画検討委員会で取り上げてもらうのも一案ではないかとの意見が出された。
- ・研究倫理問題への今後の学会対応に関しては、様々な意見が活発に提出された。
- ・18期の研究倫理活動をぜひとも19期に継承してもらいたい。ここ数年の倫理活動に関する総括、必要があれば研究倫理に関する再度の会員アンケートなども実施してほしい。
- ・学会としての研究倫理規程、行動規範、利益相反の規則、等々についても検討すべき時期に来ているのではないか。

なお、本会議での自由討論とは別に、あらためて、大隅18期理事長から荒木次期理事長あてに文書にて「理事長申し送り事項」を引き継ぐ予定であることが報告された。

上記、第18期・第19期合同理事会の議決および確認事項を明確にするため、この議事録を作成し、議事録署名人はここに記名押印する。

2014年11月24日

特定非営利活動法人 日本分子生物学会

第18期・第19期合同理事会

議長 大隅典子 ㊟

議事録署名人 影山龍一郎 ㊟

議事録署名人 杉本亜砂子 ㊟

特定非営利活動法人 日本分子生物学会 平成27年度(第37回)通常総会記録

日 時：平成26年11月26日(水) 19:15～20:00
場 所：ポスター・展示会場内 特設会場(パシフィ
コ横浜 展示ホール)
社 員 数(正会員+名誉会員)：9,325名
出席者数：4,767名(本人出席43名、表決委任者4,724名)

議事内容：

1. 定款第25条に基づき、大隅典子理事長より本総会議長として影山龍一郎会員が指名された。さらに定款第29条に基づき、議事録署名は、小安重夫会員(第37回年会長兼)と大隅理事長が担当することが確認された。
2. 影山議長より、定款第26条(総会の定足数)に基づき、上記表決委任者(委任状)を含めて出席4,767名となり、本総会は成立する旨報告された。
3. 経過報告(事業報告)

1) 理事長報告

大隅理事長より、総会資料(2頁：2014年度事業報告)に基づき、事業活動全般と、さらに下記3点につき報告が行われた。

①キャリアパス委員会の活動について

18期より設置したキャリアパス委員会(塩見美喜子委員長)は活発な活動を行っている。会員から協力者を募り「女子中高生夏の学校」への参加を続けているほか、『第3回日本分子生物学会男女共同参画実態調査報告書』を発行し、その内容をふまえた要望書『男女共同参画のさらなる推進を目指して～女性研究者リーダーシップ養成と充実したライフイベント環境整備に関する要望～』をまとめた。また、本年会の最終日には研究倫理問題を扱った若手向けのセミナー『池上彰と考える—これでいいのか日本の生命科学研究—』を開催予定である。

②次世代教育について

本年会でも高校生発表の場を設けているが、次世代育成の重要性については理事会でも改めて話題となっている。本学会では生命科学教育事業(篠原彰担当理事)として、高校などへの講師派遣やSSH生徒研究発表会でのブース出展を行っている。この度、学会のキャラクターデザイン採用作品が決定したので、特に若い世代に向けた広報活動にも今後活用していきたい。

③研究倫理対応について

17期より研究倫理対応を引き継ぎ、18期では第36回(2013年)年会において理事会企画フォーラム6セッションを行い、その全文記録を公開した。また本年には研究倫理問題に関連して、理事

長声明、各理事ならびに元役員経験者による自主的なコメントを発表した。本年会では初日に学会企画研究倫理フォーラム『生命科学研究の公正性を保つために』を開催した。

2) 庶務報告

本間美和子庶務幹事より以下の報告が行われた。

- ・会員現況：〔2014年11月10日現在〕名誉会員1名、正会員9,324名、学生会員4,444名、賛助会員28団体、総計13,797名(前年12月対比、-244)
- ・第19期理事選挙：選挙管理委員会のもとで2014年6月～7月の間で会員による投票が行われ、第19期理事が選出された。9月には新理事会準備会議が開かれ、荒木弘之氏が第19期理事長に選出された。
- ・広報活動：2013年2月からFacebookの運用を開始し、会員向けの人材公募記事案内や年会に関する最新情報などを中心に情報発信している。また、学会キャラクターデザインの公募を行い、採用された『ブンピー』『ニラセン』は本年会でも早速活用されている。

3) 編集『Genes to Cells』報告

上村匡編集幹事より『Genes to Cells』の刊行状況につき以下の報告がなされた。

- ・会員/非会員を問わず、また実験・理論のほか方法論の投稿にも対応している。
- ・2011年より一新した表紙デザインは国内外で高い評価を得ている。引き続き日本の伝統絵画の中に生命科学の遊び心を加えた表紙デザインの制作を継続していきたい(スライド：2014年の表紙/cover art一覧)。また、本年会においてカバーアート展示が行われている。
- ・『Genes to Cells』は2015年1月号から電子版のみの刊行となる。冊子体の発行をこれまで支えていただいた購読者、執筆者の方々に御礼申し上げます。

4) 研究倫理委員会報告

小原雄治研究倫理委員長より、昨年の神戸年会時には6セッションにわたる研究倫理フォーラムを開催し、その内容は全文記録として3月にHPに掲載されたことが報告された。東京大学からの中間報告「東京大学分子細胞生物学研究所・旧加藤研究室における論文不正に関する調査報告(第一次)」は本年8月1日に発表されたところであるが、その後の進展・報告がなく、学会としてのアクションが遅れてしまったとの説明がなされ

た。

4. 議 事

1) 平成 26 年度 (2014 年度) 収支決算承認の件

後藤由季子会計幹事より総会資料 (3 ~ 11 頁) に基づき、平成 26 年度決算の収支内容につき詳細報告が行われた。本決算の監査については、以下のように報告された。

2014 年 10 月 24 日、公認会計士 宮城秀敏氏の会計監査を受け (総会資料の独立監査人の監査報告書を参照)、同年 11 月 11 日に、郷通子監事、永田恭介監事の監査を受けた。

審議の結果、本決算は異議なく承認された。

2) 平成 27 年度 (2015 年度) 活動予算書承認の件

後藤会計幹事より総会資料 (12 ~ 16 頁) に基づき、27 年度の活動予算書につき説明が行われた。平成 27 年度より「NPO 法人会計基準 (2010 年 7 月 20 日 2011 年 11 月 20 日一部改正 NPO 法人会計基準協議会)」を採用することになった経緯についても説明がなされた。

審議の結果、同活動予算書は異議なく承認された。

3) 第 19 期監事選任の件

定款第 14 条に基づき、大隅理事長より第 19 期監事として辻本賀英会員、花岡文雄会員が推薦され、承認 (選任確認) された。

4) 定款変更の件

大隅理事長より、本議案に関して報告がなされた。本総会に諮られた定款変更の内容は以下のとおりである。

①シニア会員の新設

定年を迎えられた 65 歳以上の正会員 (会員歴通算 20 年以上) で常勤職に就かれていない方を対象に、年会費を学生会員と同額 (3,000 円) とし、さらに年会には無料で参加できるといった新しい会員種別『シニア会員』を新設する。運用は新年度からの適用を予定。

【申請手続と前提条件】

- 1) 申請の時点で 65 歳以上かつ会員歴通算 20 年以上の正会員であること
- 2) 常勤職に就いていないこと
- 3) 申請する年度までの会費が完納されていること

(シニア会員申請書は、学会 HP に設置予定)

【内容】

- 1) 年会費が 3,000 円となる。
- 2) 年会に無料で参加できる。
- 3) 学会誌「Genes to Cells」電子版を、最新号から引き続き無料で閲覧できる。
- 4) 総会での議決権がある。
- 5) 理事選挙の選挙権がある。

②次世代教育会員の新設

小・中・高等学校の教員またはこれに準ずる方を対象とした『次世代教育会員』を新設する。同会員は、入会金・年会費は正会員と同額であるが、年会に無料で参加できる。高等専門学校の教員の方も対象に含まれる。

- 1) 新規入会の際には入会金 1,000 円を申し受ける。
- 2) 年会費は正会員と同額 (6,500 円)。
- 3) 年会に無料で参加できる。
- 4) 年会で一般演題の発表ができる。
- 5) 学会誌「Genes to Cells」電子版を、最新号から引き続き無料で閲覧できる。
- 6) 総会での議決権がある。
- 7) 理事選挙の選挙権と被選挙権がある。

(正会員からの会員種別変更については、次世代教育会員変更届を学会 HP に設置予定)

③休会制度について

本学会には今まで休会の制度がなく、海外留学の際は海外在住先に刊行物等を送付し会員を継続いただくか、もしくは一旦退会手続きをしてもらい帰国後に再入会いただく、といった対応を取ってきた。今後は海外留学のみならず、出産・育児等を理由に学会活動を一定のあいだ休止される会員をも考慮した休会制度 (休会期間中の会費の免除) を総会に諮る予定である。

【内容】

海外留学 (ポスドクを含む) や出産・育児等を理由に、学会活動を一定のあいだ休止される正会員・学生会員を対象とした休会制度の設置。休会期間中は学会年会費が免除となる。

【休会期間】

学会の会計年度に合わせ、休会期間は年度単位 (10 月 1 日 ~ 翌年 9 月 30 日) とし、申請した次年度から最長で 3 年度まで適用することが可能。

【申請手続と前提条件】

- 1) 正会員あるいは学生会員であること
 - 2) 申請する年度までの会費が完納されていること
- (休会届は学会 HP に設置予定)

【留意点】

・休会中は以下の会員資格が停止される。

- 1) 会報・年会プログラム集、会員メールの受取
- 2) 正会員の場合は、総会での議決権
- 3) 理事選挙の選挙権と被選挙権
- 4) 会員区分での年会参加
- 5) 年会における一般演題の発表

- ・休会を解消して復会する場合は、学会事務局にその旨を連絡のうえ、当該年度の会費を納入いただく。年度の途中で復会する場合も当該年度の会費を納めていただく必要がある。

④定款変更 第11条 除名について

今後、重大な事由により会員の除名を行うことが生じた場合に備え、以下の定款変更を総会に諮った。

《特定非営利活動法人 日本分子生物学会 定款》

第11条 (除名)

※下線部分が変更点。

□ - 現行 -

第11条 会員が次の各号の一に該当する場合には、総会の議決により、これを除名することができる。

- (1) この定款に違反したとき。
 - (2) この法人の名誉を傷つけ、又は目的に反する行為をしたとき。
- 2前項の規定により会員を除名しよ

うとする場合は、議決の前に当該会員に弁明の機会を与えなければならない。

□ - 変更案 -

第11条 会員が次の各号の一に該当する場合には、理事会の議決により、これを除名することができる。

以下同文

⑤NPO法改正に伴う条文の一部文言の修正について

法律改正に伴う一部文言の修正箇所は、新旧対照表(下線部分)を参照されたい。

<留意事項>

(※37回総会で承認された後、本会の法人所管である東京都(都知事)の認証を得るのに約4ヶ月を要する。よって、正式な定款変更ならびに新しい制度の運用開始は2015年4月頃を予定している。定款変更の文言等を含め、専門家(行政書士)の事前確認を取っている)

特定非営利活動法人日本分子生物学会 定款 新旧対照表

<定款 新旧対照表については、第18期・第19期合同理事会記録の55頁から58頁をご参照ください>

審議の結果、提示された定款変更案のすべてにつき、異議なく承認された。

5. 小安重夫第37回年会長より、年会開催状況につき報告と挨拶がなされた。

本年会は『サイエンスを楽しむ』というコンセプトのもと、皆がデータを前にとことんサイエンスの議論ができる学会を目指し、組織委員一同で準備に当たった。ディスカッサー制を取り入れた結果、ポスター会場は非常に活気があるように感じており、また、従来4日間だった会期を3日間にしたことも、集中して議論ができることに繋がったと考えている。会員各位の協力に感謝したい。

6. 影山龍一郎第38回年会長より、2015年の年会開催企画案につき報告がなされた。

○BMB2015(第38回日本分子生物学会年会・第88回日本生化学学会大会 合同大会)

○会 期: 2015年12月1日(火)~4日(金)

○会 場: 神戸ポートアイランド

BMB2015は、両学会3名ずつからなる6名の組織委員で企画を進めている。プレナリーレクチャーを3

名(海外からの講演者2名、国内1名)、併行してパイオニアズレクチャーを開催し、シンポジウムはプログラム委員会企画20テーマとし、ワークショップは95テーマを公募する予定である。本年会では一般発表に口頭発表を積極的に取り入れたいと考えている旨の報告がなされた。

7. 荒木弘之第19期理事長より、本学会の良い点である『型にはまらない自由闊達な姿』を見せていけるよう努力したいとの挨拶がなされた。

8. 影山議長より閉会の挨拶があり、第37回総会が終了した。

上記、平成27年度通常総会の議決および確認事項を明確にするため、この議事録を作成し、議事録署名人はここに記名押印する。

平成26年11月26日

特定非営利活動法人 日本分子生物学会
平成27年度通常総会

議 長	影 山 龍一郎	㊞
議事録署名人	大 隅 典 子	㊞
議事録署名人	小 安 重 夫	㊞

平成 26 年度（2014 年度）収支決算報告

平成 26 年度（2014 年度）収支決算報告書

平成 25 年 10 月 1 日から平成 26 年 9 月 30 日まで

特定非営利活動法人 日本分子生物学会

科 目	予算額	決算額	備 考
I 収入の部			
1 入会金収入	1,500,000	2,128,000	
正 会 員	500,000	611,000	
学生会員	1,000,000	1,517,000	
2 会費収入	69,370,000	69,992,500	
正 会 員（海外在住含む）	58,010,000	57,906,500	
学生会員（海外在住含む）	10,080,000	10,806,000	
賛助会員	1,280,000	1,280,000	
3 事業収入	242,110,000	253,948,485	
①分子生物学・学術研究事業	228,100,000	235,249,480	第 36 回年会（年会収入合計額－本部補助金定額 500 万円）
年会	228,100,000	235,249,480	
②普及啓発事業（H P・刊行物等）	14,010,000	18,699,005	Profit Share 17,656,725 円 2013 年分編集補助金 100 万円
Genes to Cells 出版収入	14,000,000	18,656,725	「分子生物学に魅せられた人々」印税等
その他の出版収入	10,000	42,280	
③その他の事業	0	0	
その他の事業	0	0	
4 雑収入・預金利息	200,000	121,101	利息収入、ファーマバイオ（Bioedit 英文校正）等
5 退職給付引当金戻入	0	1,540,000	
当期収入合計（A）	313,180,000	327,730,086	
前期繰越収支差額	194,412,853	194,412,853	
収入合計（B）	507,592,853	522,142,939	
II 支出の部			
1 事業費	270,500,000	275,126,785	
①分子生物学・学術研究事業	245,500,000	251,872,196	〈学術集会の開催等〉
年会	233,100,000	240,028,256	36 回年会決算（支出小計）239,524,106 円、前年開催の年会企画会議の旅費等 504,150 円
第 36 回年会・特別支援支出	5,100,000	4,700,000	海外ポスドク招聘企画・旅費補助（本部負担 10 万円× 47 名分）
年会その他	300,000	241,500	第 36 回年会終了後の Web アンケート 設定と集計
国際会議支援（補助金）	7,000,000	6,902,440	第 3 回（2015 年）国際会議支援、会議 3 件へ計 700 万円を助成
②普及啓発事業（H P・刊行物等）	15,050,000	14,729,388	第 2 回支援会議からの残金返金 97,560 円
会報刊行費	3,500,000	3,284,265	会報 106、107、108 号
Genes to Cells 編集費	5,000,000	4,838,028	編集経費については年 800 万円まで出版社負担↓
Genes to Cells オンライン費用	4,350,000	4,350,000	（実質の編集費用：約 1,283 万円）
ホームページ関係費	2,200,000	2,257,095	ホームページ 10 万円× 12 カ月＋メール配信＋
③その他の事業	9,950,000	8,525,201	理事長メッセージ英訳（HP）費用
理事会企画フォーラム関係費（第 36 回年会）	5,000,000	4,128,341	36 回年会 / 研究倫理フォーラム 6 セッション開催費（会場費・機材費、他）
各種委員会	3,800,000	2,833,486	キャリアパス委員会、男女共同参画事業、大規模アンケート解析、他
社会貢献・教育活動事業	400,000	283,856	SSH・学会ブース出展（2014.8 横浜）、キャラクターデザイン図形商標調査、
理事選挙	250,000	307,618	37 回年会・市民公開講座の準備費
事業費その他	500,000	971,900	GTC カバーアート・タペストリー 680,400 円、学会案内パンフ 241,500 円、
2 管理費	56,910,000	58,383,299	生科連会費 50,000 円
事務所賃料	3,800,000	3,750,070	賃料・共益費、更新料、光熱費
給与手当	28,000,000	30,724,879	事務局 4 名（1 名退職 / 1 名入職）、紹介派遣会社・移籍金含む
法定福利費	4,000,000	4,236,273	社会保険料・雇用保険等事業者負担分
福利厚生費	60,000	62,334	職員健康診断等
退職金	0	1,775,400	退職金規程により支払（2014.7 月 自己都合による退職 1 名）
業務委託費	1,500,000	1,396,200	公認会計士監査料、会計事務所顧問料、税務申告費用
会員管理システム運用管理費	2,500,000	2,428,200	会員管理サーバの運用・保守
印刷費	1,750,000	1,506,948	総会資料、総会委任状ハガキ、会費請求書の出力等含む
通信運搬費	9,200,000	7,528,525	年会プログラム集、会報、会費請求書、送料等
旅費交通費	3,000,000	1,866,620	
会議費	500,000	393,435	総会での軽食配布、定例理事会、他
支払手数料	250,000	180,564	
消耗品費	850,000	668,491	封筒印刷代含む
雑費	1,500,000	1,865,360	国内・海外会費クレジットカード決済手数料、外部倉庫代、その他
減価償却費	0	0	
3 租税公課	2,000,000	562,700	納税済 443,000 円 未払消費税 49,700 円 地方税 70,000 円
4 特定預金支出	1,590,000	1,304,600	退職給付引当金繰入（規程に準拠）
5 予備費	500,000	0	
当期支出合計（C）	331,500,000	335,377,384	
当期収支差額（A）－（C）	－18,320,000	－7,647,298	
次期繰越収支差額（B）－（C）	176,092,853	186,765,555	

（単位：円）

平成 26 年度（2014 年度）貸借対照表

平成 26 年 9 月 30 日現在

特定非営利活動法人 日本分子生物学会

科 目	金 額		
I 資産の部			
1 流動資産			
現金預金	276,613,786		
前払費用	4,696,875		
立替金	8,072,636		
流動資産合計		289,383,297	
2 固定資産			
工具器具備品	1		
敷金	1,802,000		
固定資産合計		1,802,001	
資産合計			291,185,298
II 負債の部			
1 流動負債			
未払金	123,687		
未払法人税等	70,000		
未払消費税	49,700		
前受会費	535,500		
前受金	1,000,000		
預り金 1 (富澤基金)	95,139,500		
預り金 2	421,756		
流動負債合計		97,340,143	
2 固定負債			
退職給付引当金	7,079,600		
固定負債合計		7,079,600	
負債合計			104,419,743
III 正味財産の部			
前期繰越正味財産		194,412,853	
当期正味財産増減額		▲ 7,647,298	
正味財産合計			186,765,555
負債及び正味財産合計			291,185,298

(単位：円)

平成 26 年度（2014 年度）財産目録

平成 26 年 9 月 30 日現在

特定非営利活動法人 日本分子生物学会

科 目	金 額	
I 資産の部		
1 流動資産		
現金預金		
現金	36,327	
郵便振替 00100-2-465016	4,776	
郵便振替 00110-1-901302	17,433,696	
普通預金 三菱東京 U F J 銀行 春日町支店	2,988,439	
普通預金 三菱東京 U F J 銀行 所沢支店	2,954,286	
普通預金 三菱 U F J 信託銀行 上野支店	219,435	
普通預金 三井住友銀行 飯田橋支店	71,303,834	
普通預金 三井住友信託銀行 芝営業部	7,227,690	
普通預金 静岡銀行 東京営業部	5,139,500	
定期預金 三菱東京 U F J 銀行 春日町支店	10,110,594	
定期預金 みずほ銀行 本郷支店	10,094,575	
定期預金 三井住友銀行 飯田橋支店	20,000,000	
定期預金 三菱 U F J 信託銀行 上野支店	10,000,000	
定期預金 三井住友信託銀行 芝営業部	10,000,000	
定期預金 三井住友信託銀行 本店営業部	19,100,634	
定期預金 静岡銀行 東京営業部	90,000,000	
前払費用 事務所家賃 10 月分	322,917	
前払費用 事務所火災保険 H26.10 - H28.9 月分	23,958	
前払費用 2014 年分 Genes to Cells オンライン費用	4,350,000	
立替金 編集経費（2014 年 1 月分以降）	8,072,636	
流動資産合計		289,383,297
2 固定資産		
工具器具備品 電話取付一式	1	
敷金 学会事務所・編集室	1,802,000	
固定資産合計		1,802,001
資産合計		291,185,298
II 負債の部		
1 流動負債		
未払金 通信運搬費	42,949	
(外部倉庫、宅急便代、N T T、メールサーバ)		
未払金 印刷費（コピー・F A X 代）	52,508	
未払金 クレジットカード決済処理手数料(G M O)	28,230	
未払法人税等	70,000	
未払消費税	49,700	
前受会費 平成 27 年度以降会費	535,500	
前受金 GTC 編集費・出版社補助金	1,000,000	
預り金 1 富澤基金	95,139,500	
預り金 2 源泉所得税	421,756	
流動負債合計		97,340,143
2 固定負債		
退職給付引当金	7,079,600	
固定負債合計		7,079,600
負債合計		104,419,743
III 正味財産の部		
前期繰越正味財産	194,412,853	
当期正味財産増減額	▲ 7,647,298	
正味財産合計		186,765,555
負債及び正味財産合計		291,185,298

(単位：円)

「日本分子生物学会 若手研究助成 富澤純一・桂子基金」

平成 26 年（2014 年度）会計報告

特定非営利活動法人 日本分子生物学会

●平成 26 年度（2014 年度）富澤基金 決算報告書

平成 25 年 10 月 1 日から平成 26 年 9 月 30 日まで

科 目	決 算 額	備 考
収入の部		
預金利息	11,921	
当期収入合計	11,921	
前期繰越金	107,717,368	
合 計	107,729,289	
支出の部		
研究助成金	12,000,000	第 4 回研究助成者は 4 名（1 人 300 万円）
選考経費 / 会場費	160,248	ヒアリング（2014.5.10）
選考経費 / 旅費	209,600	〃
事務・雑費	219,941	貸金庫使用料（静岡銀行）25,560 円、 送金手数料等 7,981 円、遠方からのヒアリング 出席者（＊不採択）旅費支払 186,400 円
当期支出合計	12,589,789	
次期繰越金	95,139,500	
合 計	107,729,289	

●平成 26 年度（2014 年度）富澤基金 貸借対照表

平成 26 年 9 月 30 日現在

借 方		貸 方	
科 目	金 額	科 目	金 額
資産の部		負債の部	
普通預金	5,139,500	流動負債	0
定期預金	90,000,000	基金会計（期首）	107,717,368
		今年度収支差額	－ 12,577,868
		基金正味財産	95,139,500
合 計	95,139,500	合 計	95,139,500

●平成 26 年度（2014 年度）富澤基金 財産目録

平成 26 年 9 月 30 日現在

科 目	摘 要	金 額
普通預金	静岡銀行 東京営業部	5,139,500
定期預金	静岡銀行 東京営業部	90,000,000
合 計		95,139,500

平成 26 年度（2014 年度）個別注記表

平成 25 年 10 月 1 日から平成 26 年 9 月 30 日まで

特定非営利活動法人 日本分子生物学会

1. 固定資産の減価償却の方法
定率法によっております。
2. 固定資産の減価償却累計額
955,846 円
3. 退職給付引当金の計上基準
職員の退職給付に備えるため、当年度末における退職給付債務の見込額に基づき、
当年度末において発生していると認められる額を計上しております。
4. 担保に供している資産はありません。
5. 保証債務はありません。

【監査報告】

平成 26 年度（2014 年度）決算に関して、平成 26 年 10 月 24 日、独立監査人 宮城秀敏公認会計士の監査を受けました。その計算書類が、我が国において一般に公正妥当と認められる会計基準に準拠して、平成 26 年度の収支及び正味財産増減の状況並びに同年度末日現在の財政状態をすべての重要な点において適正に表示しているものと認める。との監査報告書の提出を受けました。その後、同年 11 月 11 日に、学会事務所において、郷通子監事、永田恭介監事による監査を終了しました。（両監事による会計監査は、帳簿並びに関係書類の閲覧など必要と思われる監査手続きにより行われた。）ここにご報告いたします。

特定非営利活動法人 日本分子生物学会
第 18 期理事長 大 隅 典 子
理事（会計幹事）後 藤 由季子

監査報告書

特定非営利活動法人 日本分子生物学会
理事長 大隅 典子 殿

平成26年11月11日

特定非営利活動法人 日本分子生物学会

監事

郷 通子

平成26年11月11日

特定非営利活動法人 日本分子生物学会

監事

水田 米子

私たちは、日本分子生物学会の平成26年度における財産並びに収支の状況について監査を行った。帳簿並びに関係書類の閲覧など必要と思われる監査手続きを用いて、計算書類の正確性を検討した結果、計算書類は、財産並びに収支の状況を正しく示していると認める。

以上

独立監査人の監査報告書

平成26年10月24日

特定非営利活動法人 日本分子生物学会
理事長 大隅 典子 殿

宮城公認会計士事務所

公認会計士

宮城 芳文

私は、特定非営利活動法人 日本分子生物学会 の 平成25年10月1日から平成26年9月30日までの平成26年度の計算書類、すなわち、収支決算報告書、貸借対照表及び財産目録並びに平成25年10月1日から平成26年9月30日までの平成26年度の富澤基金 会計報告、すなわち、富澤基金 決算報告書、貸借対照表及び財産目録について監査を行った。この計算書類及び会計報告の作成責任は理事者であり、私の責任は独立の立場から計算書類及び会計報告に対する意見を表明することにある。

私は、我が国において一般に公正妥当と認められる監査の基準に準拠して監査を行った。監査の基準は、私に計算書類及び会計報告に重要な虚偽の表示がないかどうかの合理的な保証を得ることを求めている。監査は、試査を基礎として行われ、理事者が採用した会計方針及びその適用方法並びに理事者によって行われた見積もりの評価も含め全体としての計算書類及び会計報告の表示を検討することを含んでいる。私は、監査の結果として意見表明のための合理的な基礎を得たと判断している。

私は、上記の計算書類及び会計報告が、我が国において一般に公正妥当と認められる会計基準に準拠して、特定非営利活動法人 日本分子生物学会 の平成26年度の収支、正味財産増減の状況及び同年度末日現在の財政状態並びに 富澤基金 の平成26年度の収支及び同年度末日現在の財政状態をすべての重要な点において適正に表示しているものと認める。

特定非営利活動法人 日本分子生物学会 と私との間には、公認会計士法の規定により記載すべき利害関係はない。

以上

平成 27 年度（2015 年度）活動予算書

平成 27 年度（2015 年度）活動予算書

平成 26 年 10 月 1 日から平成 27 年 9 月 30 日まで

特定非営利活動法人 日本分子生物学会

科 目	金 額	
I 経常収益		
1 受取入会金		
正会員受取入会金	500,000	
学生会員受取入会金	1,000,000	1,500,000
2 受取会費		
正会員受取会費	58,050,000	
学生会員受取会費	10,800,000	
賛助会員受取会費	1,200,000	70,050,000
3 受取寄付金	6,000,000	6,000,000
4 受取助成金	300,000	300,000
5 事業収入		
(1) 学術集会、研究発表会、講演会の開催等による分子生物学に関する学術研究事業	206,700,000	
(2) 分子生物学に関する機関誌及び論文図書等の発行事業	15,000,000	
(3) その他目的を達成するために必要な事業	0	221,700,000
6 その他収益		
受取利息	20,000	
雑収入	190,000	210,000
経常収益計 (A)		299,760,000
II 経常費用		
1 事業費		
(1) 人件費		
給与手当	11,230,000	
法定福利費	0	
福利厚生費	0	
人件費計	11,230,000	
(2) その他経費		
事務所家賃	0	
業務委託費	116,710,000	
編集業務費	4,000,000	
会員管理システム運用管理費	0	
印刷費	20,050,000	
通信運搬費	3,000,000	
旅費交通費	17,870,000	
会議費	1,700,000	
支払手数料	1,400,000	
消耗品費	1,700,000	
会場費	50,220,000	
機材費	19,500,000	
諸会費	100,000	
広報費	700,000	
補助金	6,000,000	
雑費	1,800,000	
租税公課	0	
特定預金支出（退職給付引当金）	0	
その他経費計	244,750,000	
事業費計		255,980,000
2 管理費		
(1) 人件費		
給与手当	16,270,000	
法定福利費	4,000,000	
福利厚生費	80,000	
人件費計	20,350,000	
(2) その他経費		
事務所家賃	4,000,000	
業務委託費	1,500,000	
編集業務費	0	
会員管理システム運用管理費	2,550,000	
印刷費	1,750,000	
通信運搬費	9,000,000	
旅費交通費	3,500,000	
会議費	500,000	
支払手数料	1,250,000	
消耗品費	850,000	
会場費	0	
機材費	0	
諸会費	0	
広報費	0	
補助金	0	
雑費	500,000	
租税公課	1,800,000	
特定預金支出（退職給付引当金）	1,540,000	
その他経費計	28,740,000	
管理費計		49,090,000
経常費用計		305,070,000
当期正味財産増加額		△ 5,310,000
前期繰越正味財産額		186,770,000
次期繰越正味財産額		181,460,000

(単位：円)

平成27年度活動予算 事業費の内訳

科 目		(1) 学術集会、研究発表会、講演会の開催等による分子生物学に関する学術研究事業				(2) 分子生物学に関する機関誌及び論文図書の発行事業					(3) その他目的を達成するために必要な事業				合 計	
		年会	年会その他	国際会議支援	会報発行	Genes to cells 編集	Genes to calls オンライン	ホームページ関係	社会貢献・教育活動	各委員会(キヤリア、男女共)同参画、その他	事業費その他(研究倫理、その他)	事業費計	管理部門	合 計		
Ⅰ 経常収益	1. 受取入金金	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	1,500,000	1,500,000		
	2. 受取会費	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	70,050,000	70,050,000		
	3. 受取寄付金	6,000,000	0	0	0	0	0	0	0	0	6,000,000	0	6,000,000	6,000,000		
	4. 受取助成金	300,000	0	0	0	0	0	0	0	0	300,000	0	300,000	300,000		
	5. 事業収入	206,700,000	0	0	0	0	0	0	0	0	206,700,000	0	206,700,000	206,700,000		
	(1)学術集会、研究発表会、講演会を開催等による分子生物学に関する学術研究事業	0	0	0	0	15,000,000	0	0	0	0	15,000,000	0	15,000,000	15,000,000		
	(2)分子生物学に関する機関誌及び論文図書の発行事業	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0		
	(3)その他目的を達成するために必要な事業	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0		
	事業収入計	206,700,000	0	0	0	15,000,000	0	0	0	0	221,700,000	0	221,700,000	221,700,000		
	6. その他収益	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	210,000	0	210,000		
経常収益計	213,000,000	0	0	0	15,000,000	0	0	0	0	228,000,000	71,760,000	299,760,000	299,760,000			
Ⅱ 経常費用	人件費	3,910,000	0	0	780,000	780,000	0	1,140,000	1,350,000	2,700,000	570,000	11,230,000	16,270,000	27,500,000		
	給与手当	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0		
	法定福利費	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0		
	福利厚生費	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	80,000	80,000		
	人件費計	3,910,000	0	0	780,000	780,000	0	1,140,000	1,350,000	2,700,000	570,000	11,230,000	20,350,000	31,580,000		
	その他経費	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	4,000,000	4,000,000		
	事務所家賃	109,000,000	300,000	0	0	0	4,350,000	2,200,000	600,000	60,000	200,000	116,710,000	1,500,000	118,210,000		
	編集業務費	0	0	0	0	4,000,000	0	0	0	0	0	4,000,000	0	4,000,000		
	会員管理システム運用管理費	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	2,550,000	2,550,000		
	印刷費	16,000,000	0	0	3,400,000	0	0	0	0	300,000	350,000	20,050,000	1,750,000	21,800,000		
通信運搬費	3,000,000	0	0	0	0	0	0	0	0	0	3,000,000	9,000,000	12,000,000			
旅費交通費	16,500,000	0	0	0	0	0	0	600,000	470,000	300,000	17,870,000	3,500,000	21,370,000			
会議費	550,000	0	0	0	0	0	0	0	1,050,000	100,000	1,700,000	500,000	2,200,000			
支払手数料	1,400,000	0	0	0	0	0	0	0	0	0	1,400,000	1,250,000	2,650,000			
消耗品費	1,700,000	0	0	0	0	0	0	0	0	0	1,700,000	850,000	2,550,000			
会議費	50,000,000	0	0	0	0	0	0	200,000	20,000	0	50,220,000	0	50,220,000			
機材費	19,000,000	0	0	0	0	0	0	0	500,000	0	19,500,000	0	19,500,000			
諸会費	0	0	0	0	0	0	0	0	0	50,000	50,000	100,000	100,000			
広報費	0	0	0	0	0	0	0	0	500,000	100,000	700,000	0	700,000			
補助金	0	0	6,000,000	0	0	0	0	0	0	0	6,000,000	0	6,000,000			
雑費	850,000	0	0	0	0	0	0	0	100,000	450,000	1,800,000	500,000	2,300,000			
租税公課	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	1,800,000	0	1,800,000			
特定預金支出(退職給付引当金)	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	1,540,000	0	1,540,000			
その他経費計	218,000,000	300,000	6,000,000	3,400,000	4,000,000	4,350,000	2,200,000	2,500,000	2,500,000	1,500,000	244,750,000	28,740,000	273,490,000			
経常費用計	221,910,000	300,000	6,000,000	4,180,000	4,780,000	4,350,000	3,340,000	3,850,000	5,200,000	2,070,000	255,980,000	49,000,000	305,070,000			
増減額		△ 8,910,000	△ 300,000	△ 6,000,000	△ 4,180,000	10,220,000	△ 4,350,000	△ 3,340,000	△ 3,850,000	△ 2,070,000	△ 27,980,000	△ 22,670,000	△ 5,310,000			

(単位:円)

(単位:円)

参考資料：旧形式による平成 27 年度（2015 年度）予算資料

平成 26 年 10 月 1 日から平成 27 年 9 月 30 日まで

特定非営利活動法人 日本分子生物学会

科 目	27年度予算案	備 考
I 収入の部		
1 入会金収入	1,500,000	
正 会 員	500,000	1,000 円× 500 名
学生会員	1,000,000	1,000 円× 1,000 名
2 会費収入	70,050,000	
正 会 員（海外在住含む）	58,050,000	6,500 円× 9,400 名×約 95%
学生会員（海外在住含む）	10,800,000	3,000 円× 4,500 名×約 80%
賛助会員	1,200,000	40,000 円× 30 口（27 社）
3 事業収入	228,000,000	
①分子生物学・学術研究事業	213,000,000	〈学術集会の開催等〉
年会	213,000,000	第 37 回年会（支出予算額－学会補助金定額分 500 万円）、日薬連寄付金含む
②普及啓発事業（学会誌・会報・HP 等）	15,000,000	
Genes to Cells 出版収入	15,000,000	ワイリーブラックウェル社より Profit Share 1400 万円、編集定額補助金 100 万円
③その他の事業	0	
その他の事業	0	
4 雑収入	210,000	
受取利息	20,000	利息収入
印税その他	190,000	出版社著作権管理機構分配金、ファーマバイオ（Bioedit 英文校正）、30 周年企画 3 部作印税等
当期収入合計（A）	299,760,000	
前期繰越収支差額	186,770,000	※ 26 年度予算の繰越金とした。
収入合計（B）	486,530,000	
II 支出の部		
1 事業費	244,750,000	
①分子生物学・学術研究事業	224,300,000	〈学術集会の開催等〉
年会	218,000,000	第 37 回年会（定額補助金 500 万円は収入科目の中で精算） *実質 500 万円を補助
年会その他	300,000	年会終了後、年会運営に関する定型 Web アンケートの設定、集計作業
国際会議支援（補助金）	6,000,000	2016 年開催の国際会議への支援（補助金）
②普及啓発事業（学会誌・会報・HP 等）	13,950,000	
Genes to Cells 編集費	4,000,000	学会負担分（編集費用 12000 万円のうち 800 万円は出版社負担精算へ）
Genes to Cells オンライン費用	4,350,000	ワイリーブラックウェル社へ支払い（フリーアクセス料 100 万円を含む）
会報発行費	3,400,000	
ホームページ関係費	2,200,000	10 万円× 12 カ月、メール配信 60 万円、その他（理事長メッセージ英訳費等） 40 万円
③その他の事業	6,500,000	
(1) 社会貢献・教育活動	2,500,000	37 回年会時、理事長企画・市民公開講座 / サイエンス&アート展示費用 150 万円含む
(2) 各種委員会（キャリアパス・男女共同参画、他）	2,500,000	キャリアパス委員会 100 万円、同委員会企画ランチョンセミナー弁当代ほか 70 万円、
(3) 事業費その他（研究倫理・その他）	1,500,000	大規模アンケート報告書印刷 30 万円、その他 50 万円
2 管理費	56,980,000	
事務所賃料	4,000,000	賃料、管理費、光熱費等含む
給与手当	27,500,000	事務局 4 名
法定福利費	4,000,000	社会保険料・雇用保険等事業者負担分
福利厚生費	80,000	雇用職員健康診断等
業務委託費	1,500,000	公認会計士監査料、会計事務所顧問料、税務申告費用
会員管理システム運用管理費	2,550,000	サーバー運用保守、UFJ 社決済基盤使用料含む
印刷費	1,750,000	会費請求書出力含む
通信運搬費	9,000,000	会報、年会プログラム集、会費請求書の送料
旅費交通費	3,500,000	理事会、委員会、執行部会議、他
会議費	500,000	理事会、委員会、他
支払手数料	250,000	
消耗品費	850,000	封筒印刷代含む
雑費	1,500,000	国内・海外会費クレジットカード決済手数料、外部倉庫代、他
3 租税公課	1,800,000	消費税、法人税等
4 特定預金支出	1,540,000	退職給付引当金
当期支出合計（C）	305,070,000	
当期収支差額（A）－（C）	－5,310,000	
次期繰越収支差額（B）－（C）	181,460,000	

（単位：円）

学術賞、研究助成の本学会推薦について

本学会に推薦依頼あるいは案内のある学術賞、研究助成は、本号に一覧として掲載しております。そのうち、応募にあたり学会等の推薦が必要なものについての本学会からの推薦は、賞推薦委員会または研究助成選考委員会の審査に従って行います。応募希望の方は、直接助成先に問い合わせ、申請書類を各自お取寄せのうえ、ふるってご応募下さい。

本学会への推薦依頼の手続きは次の通りです。

1. 提出物

- 1) 本申請に必要な書類（オリジナルおよび募集要項に記載されている部数のコピー）
- 2) 本学会の選考委員用および学会用控に、上記申請書類のコピー計6部
- 3) 申込受付確認のための返信封筒（返信用の宛名を記入しておいて下さい）
- 4) 論文（別刷は各種財団等応募先の必要部数をご用意下さい。委員会用の論文は不要です）

2. 提出先

※賞推薦についての送付先

日本分子生物学会・賞推薦委員長 相賀裕美子
〒102-0072 千代田区飯田橋 2-11-5
人材開発ビル 4 階

日本分子生物学会事務局気付

※研究助成についての送付先

日本分子生物学会・研究助成選考委員長 塩見 春彦
〒102-0072 千代田区飯田橋 2-11-5
人材開発ビル 4 階
日本分子生物学会事務局気付

3. 提出期限

財団等の締切りの1カ月前まで。提出期限後に受取った場合や、提出書類が不備な場合は、選考の対象にならないことがあります。推薦手続きのことでご不明な点がございましたら、学会事務局までお問い合わせ下さい。

※研究助成（学会推薦）に関する留意事項

学会推薦した会員が財団等の研究助成対象者となった場合には、その研究成果を将来、学会誌「Genes to Cells」に論文あるいは総説として発表して頂くように要請いたします。

応募に際しては、その旨をご了解くださるようお願いいたします。

※各種学術賞（学会推薦）に関する留意事項

- 委員会の内規により、外部財団等の各種学術賞への推薦は、原則として一人につき年度あたり1件となっておりますので、ご了解ください。
- 重複申請があった場合、すでにある賞等の推薦が決定されている候補者は、それ以降審査する他の賞等の推薦候補者として原則的に考慮いたしません。応募に際し、ご留意くださるようお願いいたします。

研究助成一覧

名 称	連 絡 先	件 数	締 切	助成内容等	概 要
第46回三菱財団 自然科学研究助成	(公財)三菱財団 ☎ (03) 3214-5754 〒100-0005 千代田区丸の内 2-3-1	総額 2億5,000万円	2015年 2月3日	1件当たり 2,000万円まで	自然科学のすべての分野にかかわる独創的かつ先駆的研究を支援。

名 称	連 絡 先	件 数	締 切	助成内容等	概 要
山田科学振興財団 2015 年度研究援助		15 件程度 (本学会の 推薦枠は 5 件)	2015 年 2 月 27 日	1 件当たり 100 ～ 500 万円、 総額 3,000 万円	自然科学の基礎的研究に対して の研究費援助。 「推薦書は山田財団HPより ダウンロード http://www.yamadazaidan.jp/ 」
山田科学振興財団 国際学術集会開催助成 (2017 年開催)	(公財)山田科学振興財団 ☎ (06) 6758-3745 〒 544-8666 大阪市生野区巽西 1-8-1	総額 800 万円以内	2014 年 4 月 1 日～ 2015 年 2 月 27 日 (募集期間)	総額 800 万円以内	以下の要件を満たす学術集会を 山田コンファレンスもしくは山 田シンポジウムと称し、これら の開催を援助する。 ①基礎科学の適切なテーマにつ いて、国際的視野で最高レベ ルの研究を総括する。 ②研究者の世代間の対話によっ て、若い世代の研究の発展の 基礎を構築する。 ③異分野間の交流を図り、cross- disciplinary な討論を通じて新 しい発展を模索する。 詳細 山田財産 HP 参照。
第 31 回国際生物学賞	国際生物学賞委員会 ☎ (03) 3263-1724 〒 102-0083 千代田区麹町 5-3-1 日本学術振興会内	1 件 (1 件)	2015 年 4 月 15 日	賞状、賞牌、 1,000 万円	生物学の研究において世界的に 優れた業績を挙げ、世界の学術 進歩に大きな貢献をした研究者。 第 31 回の授賞分野は「細胞生物 学」。
第 32 回持田記念学術賞		2 件以内 (1 件)	2015 年 * 7 月 31 日	1 件 1,000 万円	学術賞は次の 6 項目の研究分野 で、研究の進歩発展のため顕著 な功績のあった研究者に贈呈。 (1)バイオ技術を基盤とする先端 医療に関する研究
第 33 回研究助成	(公財)持田記念医学薬学振興財団 ☎ (03) 3357-1282 〒 160-0003 新宿区本塩町 7-6 四谷ワイズビル	総額 2 億 7,000 万円	2015 年 * 6 月 19 日	1 件 300 万円	(2)バイオ技術を基盤とするゲノム 機能 / 病態解析に関する研究 (3)免疫 / アレルギー / 炎症の治 療ならびに制御に関する研究
第 32 回国内および 海外留学補助金		総額 1,000 万円	2015 年 * 6 月 19 日	1 件 50 万円	(4)循環器 / 血液疾患の病態解析 / 治療制御に関する研究 (5)創薬・創剤の基盤に関する研究 (6)創薬の臨床応用に関する研究
平成 28 年度笹川科学 研究助成	(公財)日本科学協会 ☎ (03) 6229-5365 〒 107-0052 港区赤坂 1-2-2 日本財団ビル	生物系で約 90 件 (26 年度実績)	募集期間 2015 年 * 10 月 1 日～ 10 月 15 日	1 件当たり 100 万 円まで	人文・社会科学および自然科学 (医学を除く)の研究計画に関す るもの。4 月 1 日現在、35 歳以 下の若手研究者へ助成。
上 原 賞	(公財)上原記念生命科学財団 ☎ (03) 3985-3500 〒 171-0033 豊島区高田 3-26-3	2 件以内 (1 件)	2015 年 * 9 月 4 日	金牌、 2,000 万円	生命科学の東洋医学、体力医学、 社会医学、栄養学、薬学一般お よび基礎医学、臨床医学で顕著 な業績を挙げ、引き続き活躍中 の研究者。
第 32 回井上学術賞		5 件以内 (2 件)	2015 年 * 9 月 18 日	賞状、金メダル、 200 万円	自然科学の基礎的研究で特に顕 著な業績を挙げた者(ただし締 切日現在満 50 歳未満)。
第 32 回井上研究奨励賞	(公財)井上科学振興財団 ☎ (03) 3477-2738 〒 150-0036 渋谷区南平台町 15-15-601	40 件	2015 年 * 9 月 18 日	賞状及び銅メダル、 50 万円	過去 3 年間に、理学・工学・医学・ 薬学・農学等の自然科学の基礎 的研究において、新しい領域を 開拓する可能性のある優れた博 士論文を提出し博士の学位を取 得した研究者で、37 歳未満の者
第 8 回井上リサーチ アワード		4 名以内 (うち 1 名以上 女性研究者)	2015 年 * 7 月 31 日	1 人当たり 500 万円 (研究期間は 2 年)	開拓の発展を目指す若手研究者 の独創性と自立を支援する目的 で、研究を助成。期間は 2 年。
第 24 回木原記念財団 学術賞	(公財)木原記念横浜生命科学振 興財団 ☎ (045) 502-4810 〒 230-0045 横浜市鶴見区末広町 1-6	1 件 (1 件)	2015 年 * 9 月 30 日	賞状、 200 万円	最近において生命科学の分野で 優れた独創的研究を行っている 国内の研究者で、原則として締 切日現在 50 歳以下の者。
住友財団 2015 年度 基礎科学研究助成	(公財)住友財団 ☎ (03) 5473-0161 〒 105-0012 港区芝大門 1-12-6 住友芝大門ビル 2 号館	総額 1 億 6,000 万円 90 件程度	2015 年 * 6 月 30 日	1 件当たり 500 万 円まで	理学(数学、物理学、化学、生物学) の各分野及びこれらの複数にまた がる分野の基礎研究で萌芽的 なもの。若手研究者(個人または グループ)を対象とする。

名 称	連 絡 先	件 数	締 切	助成内容等	概 要
第 56 回藤原賞	(公財)藤原科学財団 ☎ (03) 3561-7736 〒 104-0061 中央区銀座 3-7-12	2 件 (1 件)	2015 年 1 月 31 日	副賞 1,000 万円	推薦の対象は自然科学分野に属するもの。わが国に国籍を有し、科学技術の発展に卓越した貢献をした者。
平成 28 年度科学技術分野の文部科学大臣表彰科学技術賞および若手科学者賞	文部科学省 研究振興局振興企画課奨励室 ☎ (03) 6734-4071 〒 100-8959 千代田区霞が関 3-2-2	科学技術賞140件(年)のうち、研究部門は40件程度 若手科学者賞は100名程度(学会推薦枠は定まっていないが推薦は若干名まで)	2015 年 * 7 月 16 日	表彰状及び副賞	我が国の科学技術の発展等に寄与する可能性の高い独創的な研究又は発明を行った個人又はグループを表彰。 萌芽的な研究、独創的視点に立った研究等、高度な研究開発能力を示す顕著な研究業績を挙げた40歳未満の若手研究個人。
平成 27 年度島津賞	(公財)島津科学技術振興財団 ☎ (075) 823-3240 〒 604-8445 京都市中京区 西ノ京徳大寺町 1	1 件 (推薦枠は若干件)	2015 年 * 9 月 30 日	賞状、賞牌、 副賞 500 万円	科学技術、主として科学計測およびその周辺の領域における基礎的な研究において、近年著しい成果をあげた功労者を対象とする。
島津科学技術振興財団研究開発助成		総額 1,200 万円	2015 年 * 9 月 30 日	1 件当たり 100 万円以下	上記同様に研究対象とする、国内の研究機関に所属する45歳以下の新進気鋭の日本人研究者。
東レ科学技術賞	(公財)東レ科学振興会 ☎ (047) 350-6103 〒 279-8555 浦安市美浜 1-8-1 東レビル	2 件前後 (2 件)	2015 年 * 10 月 9 日	1 件につき 賞状、金メダル、 500 万円	学術上の業績顕著な者、学術上重要な発見をした者、重要な発明により効果が大いなる者、技術上の重要問題を解決し貢献が大いなる者。
東レ科学技術研究助成		総額 1 億 3,000 万円 10 件程度 (2 件)	2015 年 * 10 月 9 日	特に定めず最大 3,000 万円程度 まで	今後の研究の成果が科学技術の進歩・発展に貢献するところが大きいと考えられる、独創的、萌芽的な研究を活発に行っている若手研究者(原則として45歳以下)。
ノバルティス研究奨励金	(公財)ノバルティス科学振興財団 ☎ (03) 5464-1460 〒 106-0031 港区西麻布 4-16-13 西麻布 28 森ビル 10F	約 35 件 指定機関からの推薦必要	2015 年 * 9 月 16 日	1 件 100 万円	生物・生命科学およびそれに関連する化学の領域における創造的な研究に対して助成。
第 47 回内藤記念科学振興賞	(公財)内藤記念科学振興財団 ☎ (03) 3813-3861 〒 113-0033 文京区本郷 3-42-6 NKD ビル 8 階	1 件 (1 件)	2015 年 * 10 月 1 日	金メダル、 1000 万円	人類の健康の増進に寄与する自然科学の基礎的研究において、独創的テーマに取り組み、その進歩発展に顕著な功績を挙げた研究者。
第 47 回海外学者招へい助成金		前期・後期各 10 件以内	2015 年 * 6 月 1 日・ 10 月 1 日	1 件 20 ～ 80 万円 まで (エリアによる)	同上のテーマに取り組み、国際的に高い評価を得ている外国の研究者を招へいする受入れ責任者(当該学術集会の組織委員長)に贈呈。
ブレインサイエンス財団研究助成	(公財)ブレインサイエンス振興財団 ☎ (03) 3273-2565 〒 104-0028 中央区八重洲 2-6-20	15 件以内	2015 年 * 10 月 9 日	1 件 100 万円	脳科学の広い分野における独創的な研究計画への助成。
塚原伸晃記念賞		1 件		賞牌ならびに 副賞 100 万円	生命科学の分野において優れた独創的研究を行っている50歳以下の研究者。
海外派遣研究助成		若干件	2016 年 * 1 月 8 日	1 件 30 万円まで	我が国における脳科学の研究の促進を図るため、国際学会、シンポジウム等への参加、あるいは短期間の研究者の派遣を助成。
海外研究者招聘助成		若干件		1 件 30 万円まで	脳科学研究分野において独創的テーマに意欲的に取り組んでいる外国人研究者の短期間の招聘を助成。
平成 28 年度研究助成	(公財)長瀬科学技術振興財団 ☎ (06) 6535-2117 〒 550-8668 大阪市西区新町 1-1-17	10 数件	2015 年 * 11 月 30 日	1 件 250 万円以内	生化学および有機化学等の分野において研究活動を行う研究者または研究機関。

名 称	連 絡 先	件 数	締 切	助成内容等	概 要
第 12 回日本学術振興会賞	(独)日本学術振興会 研究者養成課 「日本学術振興会賞」担当 ☎ (03) 3263-0912 〒 102-0083 千代田区麹町 5-3-1	25 件程度 (機関長推薦 扱いとして 学会推薦枠 も若干件あ り)	2015 年 * 4 月中旬 (受付日指定)	賞状、賞碑、 研究奨励金 110 万円	人文、社会科学及び自然科学にわたる全分野が対象。博士の学位を取得しており、国内外の学術誌等に公表された論文、著書、その他の研究業績により学術上特に優れた成果を上げたと認められた研究者 (45 歳未満)。
第 6 回日本学術振興会育志賞		16 件程度 (1 件)	2015 年 * 6 月中旬 (受付日指定)	賞状、賞碑、 学業奨励金 110 万円	我が国の学術研究の発展に寄与することが期待される優秀な大学院博士課程の学生を顕彰 (34 歳未満)。
(一財)材料科学技術振興財団 山崎貞一賞	(一財)材料科学技術振興財団 ☎ (03) 3415-2200 〒 157-0067 世田谷区喜多見 1-18-6	各分野 1 件	2015 年 4 月 30 日	賞状、金メダル、 300 万円	授賞対象は、「材料」、「半導体及び半導体装置」、「計測評価」、「バイオサイエンス・バイオテクノロジー」の 4 分野からなり、論文の発表、特許の取得、方法・技術の開発等を通じて、実用化につながる優れた業績をあげている者。
平成 27 年度研究助成	(公財)光科学技術研究振興財団 ☎ (053) 454-0598 〒 430-0926 浜松市中区砂山町 325-6	総額 5,000 万円	2015 年 * 7 月 21 日	助成金総額 約 5,000 万円	光科学に関係する研究に対して助成。対象課題有り。
2015 年度朝日賞	朝日新聞社 CSR 推進部 「朝日賞」事務局 ☎ (03) 5540-7453 〒 104-8011 中央区築地 5-3-2	ここ最近 は 4 ~ 5 件 (1 件)	2015 年 * 8 月 31 日	正賞(ブロンズ像) と副賞 500 万円	学術、芸術などの分野で傑出した業績をあげ、わが国の文化、社会の発展、向上に多大の貢献をされた個人または団体に贈られる。
第 27 回加藤記念研究助成	(公財)加藤記念バイオサイエンス研究振興財団 ☎ (042) 725-2576 〒 194-8533 町田市旭町 3-6-6	25 件 総額 5,000 万円	2015 年 * 9 月 30 日	1 件 200 万円	バイオサイエンス分野における有能な若手研究者を発掘し、その創造的かつ先駆的研究を支援する。年齢制限あり。
平成 28 年度(第 5 回)三島海雲学術賞	(公財)三島海雲記念財団 ☎ (03) 3780-2317 〒 150-0021 渋谷区恵比寿西 2-20-3 代官山 CA ビル	自然科学部門 で 2 件以内 (2 件)	2015 年 * 9 月 30 日	1 件 200 万円	自然科学部門は、食の科学に関する研究が対象。国内外の学術誌等に公表された論文、著書、その他の研究業績により独創的で発展性のある顕著な業績を挙げている 45 歳未満の若手研究者。
平成 27 年度三島海雲学術研究奨励金		全部門計 50 件程度	2015 年 1 月 10 日 ~ 2 月 28 日	自然科学部門は 1 件 100 万円	食の科学に関する学術研究。若手研究者および女性研究者の積極的応募を期待する。
一般研究助成		研究課題ごと に 10 件	2015 年 * 8 月 20 日	1 件 300 万円	日本の研究機関に所属し、微生物(細菌、アーキア、菌類、微細藻類)に関する研究を行っている研究者。
大型研究助成		合計 4 件	2015 年 * 8 月 20 日	1 件 1,000 万円	研究課題 (1)微生物の分類、生態、進化に関する研究 (2)発酵、応用微生物に関する研究 (3)健康、環境に関与する微生物の研究
若手研究者助成	(公財)発酵研究所 ☎ (06) 6300-6555 〒 532-8686 大阪市淀川区十三本町 2-17-85	1 件	2015 年 * 8 月 20 日	年間 500 万円 助成期間 3 年間	日本の研究機関に所属し、微生物(細菌、アーキア、菌類、微細藻類)に関する研究を行う 40 歳以下のポストドク。
寄付講座助成		1 件	2015 年 * 9 月 19 日	2 億 5 千万円 設置期間 5 年間	微生物の研究を行う寄付講座の設置を希望する日本の国立大学、公立大学および私立大学のいずれかに属する部局(研究科、学部または研究所)を対象に、独創性があり、新しい発見を目指した研究に助成。

●件数の()内は、応募に当たり学協会等からの推薦が必要な場合、本学会の推薦枠を示しています。

*は、本年度の案内を受取っておらず、昨年の締切日を参考に示してあります。

締切日を過ぎているものは、本年度応募は終了していますが、参考資料として掲載しました。

各種学術集会、シンポジウム、講習会等のお知らせ

○千里ライフサイエンスセミナー J1

「粘膜免疫システムの解明と免疫疾患」

会 期：2015 年 5 月 11 日(月) 10:00～16:40

会 場：千里ライフサイエンスセンタービル 5 階
山村雄一記念ライフホール

主 催：公益財団法人 千里ライフサイエンス振興財団
趣 旨：

消化器や呼吸器などの粘膜組織に存在する免疫システムが免疫学の重要領域の一つとして認識され、様々な観点から研究が進められています。また、粘膜免疫を応用した「吸う・飲む」ワクチンである粘膜ワクチンが実用化されていることから、粘膜免疫の免疫学的ユニーク性は学術的な観点だけではなく応用面からも期待されています。さらに、粘膜免疫を介した恒常性維持機構の破綻と食物アレルギーや炎症性腸疾患、花粉症などの免疫疾患との関連が解明されるに伴い、粘膜免疫の破綻ポイントを標的とした新しい治療戦略も考案されています。特に最近では、生体内因子だけではなく、腸内細菌や食事成分などの腸内因子を介した免疫制御と各種疾患との関連が新しい潮流の研究として注目を集めています。本セミナーでは、粘膜免疫をキーワードに、腸内環境を介した免疫制御機構の解明や新しい免疫療法・ワクチンの開発について、基礎と臨床の両観点から最近の知見を紹介いただき、皆様と議論したいと思います。

プログラム：

1. 栄養・腸内フローラを介した免疫制御と創薬研究への展開
國澤 純（医薬基盤研究所 / 東京大学医科学研究所 プロジェクトリーダー / 客員教授）
2. 食物アレルギーの病態と管理
海老澤元宏（国立病院機構相模原病院臨床研究センター 部長）
3. 粘膜免疫誘導型新規結核ワクチンの開発
保富 康宏（医薬基盤研究所 霊長類医学研究センター長）
4. 腸内細菌による免疫エピゲノム修飾機構の解明
長谷 耕二（慶應義塾大学薬学部 教授）
5. 免疫疾患に影響を与える腸内細菌種
本田 賢也（慶應義塾大学医学部 教授）
6. 上皮幹細胞移植による大腸・小腸再生医療の可能性
中村 哲也（東京医科歯科大学大学院医歯学総合研究科 教授）
7. 炎症性腸疾患の発症機構の解析
竹田 潔（大阪大学大学院医学系研究科 教授）

コーディネーター：

國澤 純（医薬基盤研究所 / 東京大学医科学研究所
プロジェクトリーダー / 客員教授）

竹田 潔（大阪大学大学院医学系研究科 教授）

参加費：無料

申込要領：氏名、勤務先、所属、〒所在地、電話番号、Eメールアドレスを明記の上、Eメールで下記宛お申し込み下さい。件名は「千里ライフサイエンスセミナー J1」として下さい。

申 込 先：千里ライフサイエンスセミナー J1 係（担当：湯通堂 隆）

E-mail sng@senri-life.or.jp

URL <http://www.senri-life.or.jp/seminar-1.html#seminar-F1>

TEL 06-6873-2001

○第 17 回マリンバイオテクノロジー学会大会

第 17 回マリンバイオテクノロジー学会大会を下記の要領で開催します。

会 期：平成 27 年 5 月 30 日(土)～5 月 31 日(日)

会 場：東京海洋大学 品川キャンパス

大会役員：大会会長 今田千秋：

東京海洋大学海洋生物資源学科 教授

実行委員長 廣野育生：

東京海洋大学海洋生物資源学科 教授

委 員 石田真巳、浦野直人、岡井公彦、永井

宏史：東京海洋大学海洋環境学科

近藤秀裕、寺原猛、吉崎悟朗、矢澤良

輔：東京海洋大学海洋生物資源学科

大会事務局：〒108-8477 東京都港区港南 4-5-7

東京海洋大学海洋生物資源学科内

第 17 回マリンバイオテクノロジー学会大会

実行委員会

E-mail: mb2015@m.kaiyodai.ac.jp

（お問い合わせ等はメールでお願いします。）

大会の内容：

1. 一般講演（口頭発表、ポスター発表）
2. シンポジウム（一般、ミニ）

発表形式：

1. 口頭発表：一般講演は質疑応答を含め 15 分 液晶プロジェクターを使用
2. ポスター発表：学生を対象とした優秀ポスターの表彰を予定

一般講演のセッション：

1. 微生物 2. 微細藻類 3. 海藻・付着生物
4. 魚介類 5. 天然物化学・未利用資源 6. バイオミネラルゼーション 7. 環境・環境適応 8. その他

発表申込みの締切：平成 27 年 4 月 10 日(金)必着
講演要旨の締切：平成 27 年 4 月 10 日(金)必着
事前参加登録の締切：平成 27 年 4 月 30 日(木)必着
事前参加登録費：会員 5,000 円 学生 2,000 円
非会員 9,000 円 非学生会員 4,000 円
当日参加費：会員 7,000 円 学生 3,000 円
非会員 10,000 円 非学生会員 5,000 円
懇親会費：一般 6,000 円 学生 2,000 円
※協賛頂きました団体（分子生物学会）の会員の方は、
当学会会員と同等の参加費で参加頂けます。なお、発
表は学会会員に限ります。
講演申込み方法および参加登録方法の詳細は、大会
ホームページでご確認ください。
第 17 回大会ホームページアドレス：
<http://marinebiotechnology.jp/mbt2015-HP/index.html>
学会ホームページ：<http://marinebiotechnology.jp/>

○International Conference of Cancer
Immunotherapy and Macrophages 2015
がん免疫療法・マクロファージ国際会議 2015
〈第 3 回（2015 年）日本分子生物学会国際会議支援
助成決定会議〉

開催期日：2015 年 7 月 9 日(木)～7 月 11 日(土)
開催会場：東京大学 伊藤国際学術研究センター、
東京都文京区本郷 7-3-1
<http://www.u-tokyo.ac.jp/ext01/iirc/access.html>
主催機関名：日本がん免疫学会（JACI）/ 日本マクロ
ファージ分子細胞生物学研究会（MMCB）
会議内容：第 19 回日本がん免疫学会と第 23 回マクロ
ファージ分子細胞生物学国際シンポジウムの
共催による国際シンポジウム
会議テーマ：がん免疫療法とマクロファージ「基礎研究
と臨床研究の新たな展開を目指して」
開催責任者（President）：松島綱治（東京大学大学院医
学系研究科）
副責任者（Program chair）：垣見和宏（東京大学医学部
付属病院）
副責任者（Program chair）：竹田和由（順天堂大学医学部）
事務局（Secretary general）：寺島裕也（東京大学大学
院医学系研究科）
開催事務局お問い合わせ先：
E-mail：ICCIM2015@m.u-tokyo.ac.jp（メールにてお問
い合わせ下さい）
〒133-0033 東京都文京区本郷 7-3-1 医学部教育研
究棟 12 階 分子予防医学教室

プログラム概要：（言語：英語）

1. 特別講演 & 特別セミナー (Keynote Lecture &
Lunch Time Special Seminar)
Shizuo Akira (Osaka University, Japan), Ugur Sahin

(Johannes Gutenberg-University Mainz, Germany),
Irvine Weissman (Stanford University School of Medicine,
USA), Yutaka Kawakami (Keio University, Japan), Robert
Schreiber (Washington University, USA), Shigekazu
Nagata (Kyoto University, Japan)

2. シンポジウム (Plenary Lecture)

Mark Smyth (Queenland Inst. Medical Research,
Australia), Kazuyoshi Takeda (Juntendo University,
Japan), Thomas Tuting (University of Bonn, Germany),
Kazuhiro Kakimi (The University of Tokyo, Japan),
Christopher A. Klebanoff (National Cancer Institute,
NIH, USA), Carl June (University of Pennsylvania, USA),
Hiroshi Shiku (Mie University, Japan), Lieping Chen
(University of Pennsylvania, USA), Kouji Matsushima
(The University of Tokyo, Japan), Kenya Honda (RIKEN,
Japan), Clotilde Thery (Institut Curie, France), Noboru
Mizushima (The University of Tokyo, Japan), Edward
A. Miao (University of North Carolina, USA), William J.
Kaiser (Emory University School of Medicine, USA)

ポスター発表 & 懇親会：2015 年 7 月 9 日(木) 19:30～
21:30

懇親会会場：東京大学 伊藤国際学術研究センター Foyer
事前参加登録費：会員 10,000 円 非会員 11,000 円
学生 5,000 円

当日参加費：会員 12,000 円 非会員 13,000 円
学生 7,000 円

ホームページアドレス：
<http://webpark1433.sakura.ne.jp/iccim/>

○Conference on Transposition and
Genome Engineering 2015
トランスポゾン転移とゲノム編集技術に関する
国際会議 2015

会 期：2015 年 11 月 17 日(火)～11 月 20 日(金) [4 日間]
会 場：奈良県新公会堂
(〒630-8212 奈良県奈良市春日野町 101)
<http://www.shinkokaido.jp/>

主 催：TGE2015 実行委員会

TGE2015 Conference Organizers:

Junji Takeda (Osaka University)
Takashi Yamamoto (Hiroshima University)
Knut Woltjen (Kyoto University)
Dana Carroll (University of Utah)
Perry Hackett (University of Minnesota)

後 援：

日本分子生物学会

※この国際会議は、第 3 回（2015 年）日本分子生物
学会国際会議支援 助成採択会議です。

奈良県ビクターズビューロー

講演予定（言語：英語）：

Dana Carroll (University of Utah, USA)
Neal Copeland (The Methodist Hospital Research
Institute, USA)
Emmanuelle Charpentier (Helmholtz Centre for
Infection Research, Germany)
Perry Hackett (University of Minnesota, USA)
Zoltan Ivics (Paul-Ehrlich-Institute, Germany)
Nancy Jenkins (The Methodist Hospital Research
Institute, USA)
Martin Jinek (University of Zurich, Switzerland)
Jin-Soo Kim (Seoul National University, South Korea)
Andras Nagy (Lunenfeld-Tanenbaum Research

Institute, Canada)
Hideyuki Okano (Keio University, Japan)
Yoichi Shinkai (RIKEN, Japan)
Kosuke Yusa (Wellcome Trust Sanger Center, UK)

問い合わせ先：

TGE2015 実行委員会
E-mail : tge2015@pac.ne.jp
〒 650-0033 神戸市中央区江戸町 85-1 ベイ・ウイン
グ神戸ビル 10 階
株式会社プロアクティブ 内
FAX : +81-78-332-2506
ホームページアドレス : <http://www.pac.ne.jp/tge2015/>

日本分子生物学会 賛助会員一覧

(2015 年 2 月現在)

アサヒグループホールディングス株式会社 イノベーション研究所
株式会社エー・イー企画
科学技術振興機構 バイオサイエンスデータベースセンター
科研製薬株式会社 創薬研究部
協和発酵キリン株式会社 研究開発本部企画推進グループ
コスモ・バイオ株式会社 開発部
第一三共株式会社 バイオ創薬研究所
タカラバイオ株式会社 事業開発部
株式会社ダスキン 開発研究所
田辺三菱製薬株式会社 研究本部研究企画部
東洋紡績株式会社 ライフサイエンス事業部
株式会社トミー精工
ナカライテスク株式会社 マーケティング部広報課
日本甜菜製糖株式会社 総合研究所第二グループ
日本ベクトン・ディッキンソン株式会社 BD バイオサイエンス
日本たばこ産業株式会社 植物イノベーションセンター
日本たばこ産業株式会社 たばこ中央研究所
浜松ホトニクス株式会社 システム営業部
富士レビオ株式会社 研究開発管理グループ
フナコシ株式会社
株式会社ボナック
三菱化学株式会社 経営戦略部門 RD 戦略室
ヤマサ醤油株式会社 R & D 管理室
ライフテクノロジーズジャパン株式会社
ロシュ・ダイアグノスティックス株式会社 AS 事業部
湧永製薬株式会社 湧永満之記念図書館
ワケンビーテック株式会社 学術部

(27 社、50 音順)

■第 38 回日本分子生物学会年会 (BMB2015) 公式サイト

URL: <http://www.aeplan.co.jp/bmb2015/>

■日本分子生物学会 Facebook 公式アカウント

URL: <http://www.facebook.com/mbsj1978/>

特定非営利活動法人

日本分子生物学会 事務局

〒 102-0072 東京都千代田区飯田橋 2-11-5

人材開発ビル 4 階

TEL: 03-3556-9600 FAX: 03-3556-9611

E-mail: info@mbsj.jp

BMB 2015

BIOCHEMISTRY AND MOLECULAR BIOLOGY

第38回 日本分子生物学会年会

第88回 日本生化学会大会

合同大会



2015年12月1日(火)~4日(金)

神戸ポートアイランド

(神戸ポートピアホテル、神戸国際会議場、神戸国際展示場)

第38回 日本分子生物学会年会

年会長 影山 龍一郎 (京都大学 ウイルス研究所)

第88回 日本生化学会大会

会 頭 遠藤 斗志也 (京都産業大学 総合生命科学部)

演題募集期間

2015年7月上旬予定

BMB2015運営事務局

〒532-0003 大阪府大阪市淀川区宮原2-14-14 新大阪グランドビル6F

株式会社 エー・イー企画 大阪オフィス内

Tel: 06-6350-7163 Fax: 06-6350-7164

e-mail: bmb2015@aeplan.co.jp

The Molecular Biology Society of Japan NEWS

日本分子生物学会 会報

(年3回刊行)

第110号 (2015年2月)

発行——特定非営利活動法人 日本分子生物学会

代表者——荒木 弘之